

ぞ二人もなみだにくれながら菊之丞はとりすがり親に別れて其後はさま／＼の御教訓淺からず  
 思ひしに身にかはらんとその御詞生々世々忘れはあかじ去ながら御恩ある御身をころし何とて我  
 身をながらへん是非此身をイヤ我をイヤ某と三人か死を争ふてはてしなき折から平九郎與三八  
 船頭など覗しのみなんどをとりもたせどや／＼と立歸れば三人あはてる其中に彼男は影のごとくきえ  
 て行衛は見へざりけり菊之丞はいままばしといふもいはれぬ他人の中水面を見やる折から八重  
 桐は覺悟かくごをきはめやぐらの上よりざんぶりと水中に飛入ればつと立たる水けふりかたみに殘  
 るうたかたの泡と消行玉きへゆくたまの緒の絶たてはかなくなりゆけば船中俄にわかにさわぎたち八重桐入水と聲々  
 にいへどこたへもあらし吹なみの間に／＼そこ爰とさかせどさらに詮せんもなし菊之丞は涙ながら  
 明あきていわれぬ身の上の生いては義理も立がたしとにも入水と覺悟かくごの躰てい何の様子も知らぬとも此  
 躰ていに驚おどて平九郎押留おしどめ尤なほその催もよほせし船遊ふねあそびとは云ながら八重桐が入水せしは畢竟怪俄ひつさやうけがの事といひ  
 我／＼とて此船中一所にありし事なればこなた一人のどがにあらず公へ申上まをさ免なりとも角な  
 りとも皆／＼一所なるへしと與三入船頭諸共もろともに詞を盡つくて留れば明あきていはれぬ胸の内いたはしな  
 みだまきなみのそこよ爰よと大舟の思おもひ頼たのみて求もとめど姿も水のつれなくもいづこに流夜ながれよの雨のふ  
 りか／＼りにし憂事うれしごとを神かみに祈いのれとせんすべの渚なみさにありて玉梓たまはこの道をたどりて若草わかしの妻つまにかくぞと告  
 ければ消きばかりの露の身は置所おきどころさへまら波の跡なき人を戀これとふされば古歌にも納潭いりよちに偃よたる

公きみをけふ／＼と來んと待らん妻がかなしもと詠よせしも我身の上とかきくどく歎なげは濱なみの にて  
 かきつくされぬ筆の海聞人袖をぞ志をりけり

根南志具佐前編五之卷 大尾



爰に爪とらす髪ゆはず朽葉衣に世をのがれたる  
 人あり自天竺浪人と稱す此人横ぐわへに草をか  
 んで其毒氣一角となる其長さ三寸ばかり其角額  
 にあらず頭にあらず常は昏に隠て見へずといへ  
 ども今此根南志草を味ふにおよんで其角長さこ  
 と三丈あまり彼を破是をつんざく抑薬や毒にあ  
 らずしてまた何ぞ

扇放さず山に住人跋

根無草後編序

風來山人登萬國之東側觀娑婆大劇場有小舞臺之志於是  
 紅毛千里鏡觀冥途樂屋仰天堂俯地獄啖抹香於閻魔被犢鼻  
 于地藏倒舍利弗智囊振富樓那辨舌三摩佛面始知黃金膚嘆  
 日地獄天堂金次第矣退著一書寓言八重桐間聞柏車薪水御  
 無常風繼爲此編以傳諸借本屋二子追善莫大焉此編也掛一  
 枚看板而行於三箇津矣明和戊子秋寐惚先生陳奮翰撰



自序

味噌を上るとは。自慢といへる東都の俗言なり。謹んでその言の意を考ふるに。口豆がかうじくして話の鹽にいひ出せるより起れり。されば知るも知らぬも此味噌を漏るとなし。唐の親父は。天徳を予に生せりと理屈臭い玉味噌を上れば。天竺の謊つきは。唯我獨尊と頭がちの腦味噌を上げ。泪羅に洗みし偏屈者が。身の皎々たるといふより白味噌に思ひ付けば。引込思案の世間知らずが。郷里の小人に腰を折るまじといへるは。これ五斗味噌の始めなるべし。予嘗て根無草を著す。鹽加減の薄味噌なるも。當世の口に叶ひ。隣の糝汰馥しからんと評判四方に隠れなく。遠近より尋ね來り。これを驚くこと三千部に餘れりとして。書肆の歡び斜ならず。爰ぞ駄味噌の上げどころと。又筆を採りて後編を著し。株を守り

て兎を獲へば。よき吸物の獻立ならんと。眞赤な赤味噌に。神儒佛のさくく汁。教へのはしくれにもならんかと。いらざる世話を焼味噌に。微意あることを記せども。牛の糞やら胡麻味噌やら。そのわかちなき人には。味噌を敷きたる灸のごとく。應へること少なからんと。高慢の鼻搦槌のごとく。天狗出立の味噌盡しとホ、敬白

明和五年子の顔見せ。柿の衣に兜巾篠懸。風來山人切幕より暫と聲掛て。世上の作者の鼻をひしぐ



根無草後編一之卷

偽りのなき世なりせばいかばかり人の言の葉嬉しからましされば卵の方ど娼妓に實なきのみならず佛法に方便あれば軍法に計策あり浮世に追從輕薄あれば參會に座なりおはむきあり虚言あればてれんあり偽りあれば手くだありだますといひこんたんどいひ文なすといひ懸るといふ手爾於葉の違ひはあれどつまる所は引くるめて誑で丸めた世の中に只偽りならぬものとは産れた者の死ぬるとにて北州の千年蟬蛸の夕べ長き短き限りあれども貴きも賤しきも賢きも愚なるも猫も飯釜もおしなべて此道をもるゝとなしされども人情の淺はかなる門松は冥途の旅の一里塚とも氣はつかで無上に新春の御慶と壽き懸棘鬣魚も魚の死骸と悟らねばめつたに目出度きものとのみ覺え熨斗咆を顛倒はしのと讀まれ四の字をきらへば五の字にもごねるといへば油断ならざいざや其死んで行く先々を尋ねるに釋迦の工夫の大狂言切落しから落の來る萬代不易の當り劇場地獄極樂數多ある中に六道の街となんいへるは繁花いはん方もなく車轂擊ち人肩摩り弘誓の船宿川岸に招けは紫雲の遠肩輿通りに遮り五々の菩薩のめりやすは楓紅露友がおもむきをうつし呵責の鬼の催促は日なしの親方火の車をめぐらし蓮花の大屋店賃を債れば脱衣の老婆勸化をせつく實にや現在を見て過古未來をしり明櫛を見て澤菴漬を思ふ油断せぬ世の中なれば三

途川の遠干瀉に數千丁の土手を築出し白波變じて平地となれば國に懸出しをするがごとく後々未代に至るまで其益すくな芥子味噌鼻の穴までぬけめなき鐵門屋か仕出し料理しゆんかんの筆には石女に燈心をあてがひ硯蓋の蓮根には極樂のねだをばす死手の薯蕷三途の川鱒八寒地獄の凍凍に西の河原の地藏焼好み次第飲みしだい夜の内からの人群集是ぞ此地の名物と詞の搥に錢出して辛い浮世に甘き族も暮を限りに立歸れば跡は人聲も波の音のみして更行く夜半のそよ／＼風に草木もおのづから居眠りをそゆる星の光かすかなる闇路はるかに聲立て迷ひ子の閻魔様ア／＼と鉦太鼓の音哀げに小提灯の明りを頼みうそ物淋しき三途川の邊り西を東南を北と立別れ尋ねつかれて追々にとある結縷原を目印に赤鬼黒鬼斑鬼棕色正官綠基盤島五色八色さまさまの貌形一角兩角一眼二眼牛頭馬頭あほう羅殺なんど異類異形の獄卒とも一つ所へ寄集り是程にさがしても閻魔様のお行方しれず地獄極樂創りて終どない旦那の亡命尋ねに出るところが難儀と口々にわめきちらし振廻す頭の數々角目立とは是なるべし地獄の果でもない智惠ふるふ社長戸頭と思しき鬼しかつべらしく正中に居並び扱々毎日町々のいかいやつかい昔と違ひ地獄極樂ともに近年の大不景氣日にまし死んで來る人はふるるそう／＼餓鬼道計りへも遣られねば日日の喰潰し段々米は貴つて來る粥喰してもつゝかれぬに娑婆で欠の序ながら申した念佛を思に着せ百味の飲食かはかしありうぬらが夫妻相對の内證事を大そふらしく一蓮たく生と契りまし



たかゝアが跡から成備いたし格別尻が大きいから出来合の蓮臺ではほうがへしも成りませぬ蓮臺をひろげるとも譬の方を削るとも指圖なされて下さりませと願ふやら菩薩達の箔の置替へ天人衆を釣下げる道具立の大物入り扱又地獄の責道具も請負方で高ばるゆる近年御勝手不如意の只中閻魔様の無分別捨置いては三千世界が暗闇になる事ぢやと十王様のとちめん棒ふつてわいた地獄の騷動毎日毎夜尋ねてもまだにお行方しれざること旁いかい思はるゝと小首かたむけ問掛くれば又跡の月頃田舎から山出しと見えて荷持瘤の跡しやちこばつた黒鬼の長助大勢の中遠慮もなくそれ様達アどう思ふてあんじやり申す閻魔様の亡命とはヤヤてんこちもない肝サアがでんぐりかへるにヨ大方年内の借金につまり申して逐電をし申されたか毎日さがせど影サアも見え申さない扱うらしまでが宿なしに成り申すは悲しいこんだど流涕こがれてとこぼへ申すと譬に違はぬ鬼の目に涙ぐんで物語れば額をぐつとぬき上げさかやき延びたがたり天窓腕膨物した赤鬼の八兵衛懐手してずつと出でつがもないこつとら身代でも五兩三兩の借金にせつかれ内外で濟まぬこんなら高が砂利をつかむと思へば借りる時の地藏顔なす時の旦那の面だ貸した奴がのたまく云や横ぞつばうはりのめすに素氣の短い旦那殿がうぎに亡命されるとはあて事もない外聞を失つておいらまでが顔が立ない何のこんだ咄しの様なとめつたにりきめばそばからぬそく上方の産れと見えて西瓜に蠅のどまつた様な髪曲は寐てもそんせぬ勘辨ご

と白鬼はよこれめ見え黒鬼は弱からうと地の太き伊勢島鬼不思議そうな顔つきにてわしらはとんど呑込まぬわいの閻魔様の身代はゑらアいもんぢやさかいでいくら借金が有たとてちつと始末なさつたらつひ直りそうな物ぢやわいなこつといへばわしのが少いた簡の様なれどひどう積つて代物の随分利口に付くやうに菩薩達の黄金の膚も御堂前の出来合同前倭鉛鍍金で間を合せ極樂へ毎日の仕出しも百味の飲食理りいふて仕掛で壹匁五分膳ぐらゐで濟みそなもの其上でまだ不足なら娑婆中へふれを廻し六道銭に新鑄の當四銭を入れさせ無間地獄の蛙を止めて壹歩札にて三百兩の富を突かせ畜生道で馬市をはじめ劔の山を一丁目か柳原へはこんでも一方は防がれるに閻魔様は味な了簡わし等はとんど呑込まぬわいのと茶粥の腹の減りをもおぼえず上方理屈いひ並ぶれば鬼仲間でも口を利く殺鬼といへる通り者銀煙管脂下りにくはへ唐ざらさのじゆばん腕まくり本田あたまた打振りてイヤ親玉の亡命は金でなしの色事目玉光の赤面髭むしやの口廣で見掛けに似ぬ近惚れ天人衆の奇麗事に頗いきのいちやつき羽衣じめのちよんの間あれこましのからだちも宿上りもずい流しそこで大日腹を立て閻州には似合はぬ身持と尻われのぐつとこまりずいにげのぐひはづし推量違ひ中の丁打つて置けチヨンとそり立つれば鼠色のへんてつに東坡巾かぶりしはすかんばんの宗匠鬼朝鮮扇しやにかまへイヤく大王の亡命は中々左様の事ならず紀の貫之が古今の序に繪に畫る女を見て心を動かすがどしとは僧正遍照が歌の評



判それは昔の筆の跡かゝるためしを目のあたり眉目容類ひなき瀬川菊之丞が繪姿に閻魔大王現をぬかし龍神に勅定ありし一部始終の委い事は根無艸に書きしるし世上に隠れなみくならずぬ其戀人を思ひ川流れて末の逢ふ瀬あらばと待ちわび給ふ折からに龍神の下知を請け手下の水虎が働きにて伴ひ來る路考が姿聞きしには似も付かず存じの外の不器量に一座大いにあきれ果て定めて譯の有磯海不覺を取りし其様子包まず白狀仕れど水虎を御吟味ありけるに己が心に覺えあり疵持足の氣味悪く御白洲にひれ伏しく誤り入つたる有様よりかつばと伏すといふ事は此時よりそ初りけるされども漢子も去る者にて詞をかざり驚を烏いひくろめんと淨頗梨の鏡に掛けての詮議故のがれぬ所と覺悟して路考が情に大事を忘れ萩野八重桐といふ女形を身替りに連れ來れると有の儘なる白狀に閻王甚怒らせ給ひ三千世界を司る此大王を茶にしをるは言語道斷につくき奴と忽ち水虎を蹴殺し給ふしたが娑婆にて死んだ者は此所へ來れども此所で死んだ者は行く所がない故に魂娑婆へ迷ひ行き人のからだを假初に男色千人切の馬鹿を盡すも皆此水虎の亡魂の障礙をなすとしられたりそれより年を重ねても閻王今に熱さめず路考をこがれ給へども定業にあらざれば大王の御威光でも呼寄せざる事時はぬ故いつそ娑婆へ尋行かんと思ひ詰ての亡命ならんと始終の咄しを聞居たる茶色の鬼が圖に乗つておれも御用に撰出され去年と今年の堺町節分の夜のにくまれ役もいやと鰯の臭さをこらへ狗骨で目をつくくくと路考に見とれし最負

の證據赤鬼白鬼黒鬼のと昔から定法の仲間をはづれおれ一人か路考茶鬼コノ見よ虎の皮の犢鼻褌に金糸でゆひ綿縫はせたはあらも首たけ濱村屋今三がの津の希者鼻の高い天狗仲間鞍馬山の太郎坊愛宕山の治郎坊湯の山の有馬坊羽黒山の出羽坊を始めとして最負の連中山の手から下町はいふに及ばず蝦夷松前の果までも路考を引かぬ者なければ旦那の惚れたも無理ならずと口々評議に社長のうち咄しがかうじて長休みあんまりたばこ吞過し男倡の地獄見るやうに尻から焔の出ぬ先にサア最一息尋ねて見ようコリヤ尤も大勢が立ちさわぐ最中に急脚子と見えてすたゝ走り色眞黒にふすも顔眞一文字に行過ぐるを獄卒共引きとめ我々に理りなしに何國へ通るとどがめられ誰とはあろか忝なくも藥研堀に隠れなき不動明王を見しらぬかと市川流て白眼付くれば獄卒共うろたへて能く見れば不動様後光の火焰がござらぬ故頭巾着ぬ大黒同前見違へしとのわび言に不動明王打うなづきおれが急足に來りし様子は今朝淺草の觀音殿から呼びにおこされ閻魔様が藏前の出店にかくれて御座らしやる潜に迎ひをよこす様にと地獄へ飛脚かやり度いが參りの多い時節故寺内でも人少隙で居る久米の平内は見ると通りおもたいたから急ぐ間には合ひにくい雷や風の神では通り筋の小言も氣の毒そちの小豎をやつてくれヲット心得たんぼ道安うけ合ひに請合つて制吒迦矜羯羅に行けといへば近年は地獄でも若衆の沙汰が物窓なれば酢の蒟蒻のといやがる故しやうとなしに自身の捷歩三途川を歩行渡り先祖代々持傳へし



脊中の火焰を微塵にして大事の後光祿仕舞ひ徳はいかいで不動そん見違へしも無理ならず閻魔  
 のとやがしれたれば外をさがすに及ぶまいと聞いて皆々色を直し去りとはいかい御苦勞さま安  
 い佛に樂をさせ御自身の急足とは本の次第どう明王娑婆の若衆にうつほれて路考しやうどに  
 うかれ出るこれも他生のえんま様迷ひ子の閻魔様とへちまな地口口々に鉦ちやんくと打鳴ら  
 し藏前さして尋ね行く

根無草後編一之卷終

根無草後編一之卷

それ造化のかぎりなき小見を以てはかるべからず田鼠化して鵝となり雀水に入つて蛤となり童  
 奴變じて伴當となり婦化して姑となる漆蟹を得て泥のごとく海參蕪を得て水のごとく大戸酒に  
 呑れて酒風漢となり少年娼妓にたられされて飄客となる千變萬化のかぎりなき張華も博物の看板  
 をおろし東坡も相感志の店をたゝむ爰に市川雷藏なる者あり此者の變化定りなき其源を尋ねれ  
 ば父は代々瓢象の都の方に隠れなく富みさかえぬる武家に仕へて渡部義兵衛となんいふ人なり  
 しが朋輩の連坐にて浪々の身と成けるより老たる母と妻子をも養育手次にもと住みなれし都を  
 離れうき數々に大津の町のわび住居弓馬の道は廻り遠く外に營むべき業なければ繪の事は先素  
 人ながらつひ出來易き所の名物げはうのあたまへ階子掛けても我身の上の下り坂主持たぬ身の  
 一徳と浮世は輕き瓢單で押へる鹹のぬらりくらり犬のくはへて引きあるく先士の坊の輝さへし  
 まりなき世渡りのいつ果つべき事にしもあらず其上に民之進とて一人の忤あり容貌百人にすぐ  
 れ心さどくして滞らず手習學問鎗兵法遊藝までも器用なれば末々は能主取をもさせんとて江戸  
 の稼ぎを心掛けて薄々用意は有りながら老いたる母女房なんどのしらぬ吾妻の長旅を如何あら  
 んと思ひすどし一日過ぎ二日過ぎ早三年の月日さへ立寄るべき方もなく有附くべき主人とて



ながくの浪人住居母女房も氣毒がりいつそ江戸へ出て見てはと思ひ立ちは立ちながら鬼して  
 角して隙取る内思ひ掛けなく母の中風旅立どころにも有らばこそわけて義兵衛は孝行なる男に  
 て看病に手ぬけもなくあなたこなたの醫者よ祈禱よと心遣ひもどより手薄き身代なれば諸方に  
 穴も秋の末より冬の半に打ちつゝき義兵衛も脊に癩を發し初めは母の病苦の障りと隠しても隠  
 しどぐべき病ならず段々と腐入れば中々一通りにて快氣しがたしと下地せつなき其上に又此才  
 覺にかてくはへ少しも所縁ある方は段々無心もいひ盡し貯へし兵器諸什器指がへの大小の反  
 はなけれどまげ仕舞ひ夫婦が着が一夜の衾後は銅壺茶鈴まで賣代なし漸殘る物とては四人が口  
 をどち蓋の破鍋にさへ金氣もなくせつなき餘りの一寸のがれ高利の金をかりそめにも足元を見  
 ては猶物の哀をしらぬ族日夜朝暮の詰催促義兵衛は重き病氣の上母の耳へ入れまじと斷いふ程  
 責めかけられ詞の劍理つめの鎗先千騎萬騎の敵よりも防ぎかねたる浪々の身を悔めば女房の心  
 遣ひ身をそがるゝよりせつなければども智慧才覺にも出來がたき金が敵の世の中なれば只しみぞ  
 みと明暮に年の寄るより外はなし或夜母のすやく寐入りしを窺ひ義兵衛女房に向つて申しけ  
 るはいかなれば我々程果報拙き者あらじ京都にて勤めし時も何の仕落なき身ながら朋輩のまき  
 ぞへにて御暇給はりしそれよりかゝる浪人住居仕つけぬ業の世渡りも今の難儀にくらぶればう  
 しと見し世ぞ今は戀しき母の病氣我腫物剩さへ其上に四百四病にまさるといふ貧の病身にせま

り耆婆扇鵲が藥でも生延びられぬ我がおとろへ今日の醫者の詞にも母の病氣も中風なり我腫物  
 も腐つよくいづれも人參の力ならでは中々療治なりがたし外へ見せよとにげらるれど其日の煙  
 立てかねて知る通りの躰なれば死したる者が蘇り枯木に榮の發けばとて人參のことは扱置き毎  
 日毎夜の催促に最早いふべき詞も盡き貧苦の上にて我大病手がまはらねば母人の看病までが疎客  
 になり不幸の罪もおそろしければ我は今宵腹切つて相果ん我死したりと聞きたらば貸方にても  
 あきらめて催促にも來るまじ左すれば貧苦と我看病二つのなんぎを助けて母一人の看病しどげ  
 いかなる人にも身をまかせ奉公宮仕へをしてなりとも悴を守立て人となし家の名字を繼せてく  
 れ頼み置くは是計といふ内も腫物の痛み熱の往來胸までせき來る無念の涙痰咳とともむせび  
 入れば女房夢の心地にて藥あたへつ抱かへ漸咳をさすりしづめ母の目や覺めんかと聲をも立  
 てずないじやくりして夫の顔をうらめしそうに打ちながめつゝいかに難儀のかさなればとて日  
 頃にも似ぬ不了簡今自滅し給はし母御も生きては居給ふまじわらはもながらへ居らるべきかさ  
 すれば可憐民之進は誰が残つて人となさんさはいふものゝいかなれば貧苦といふも程あらんに  
 其日の煙も立てかねて昨日も藥は貰ひながら煎ずべき薪なければわらはが髪の中を剃り漸少し  
 の價にて買調へし落葉さへ涙にしめりもえ兼る寒氣つよき此時節夜の物なく火の氣もなく姑御  
 といひ御前の大病次第に暮る苦しみを病む目より見る目のせつなさ人參で愈ると聞けばせめて



此身が若かりせば君傾城に身を賣つてもしやう摸様もあるべきにそれさへも叶はぬ因果天道にも佛神にも見かざられたる身の上と夫婦手に手を取り合ひて忍ぶにあまる泣聲を初めよりつく／＼と寐たふりにて聞居たる民之進が子心にも堪かねて泣出せば夫婦は驚きいかゞせしぞと尋ねながらも様子聞ての事なるかと心遣ひかざりなし民之進もせきくる涙明さば猶しも苦の上ぬりどこはい夢見ておそはれしと何氣なく取りなす内夜明烏の聲諸其母の目も覺めければ藥湯よと女房の心遣ひ哀なりともいふばかりなし其日も終日民之進は獨しみる泣居たれども何となすべきでだても出ず此上頼みは神佛の力ならんと稚心に思ひ付き暮にまぎれて内を抜け出であたりの淵にて垢離を取る所も名にし逢坂の關の明神へ裸參り神前に打伏して死なうといふ父の命祖母の命諸共に金さへあれば助るとや何卒金を調へて病苦貧苦を救はせ給へ夫も叶はぬものならば一寸も動くまじ爰にて我を蹴殺してたび給へと脇目もふらず祈りけるが頃しも冬の半なれば次第に夜陰の空寒く雪吹交りに吹く風は身内を切るがごとくなれども固より氣丈の生れつきに一心の誠をあらはし少しもたゆまずこたふれども寒氣五臟にしみ渡りからだは氷のごとくなれば何かは以てたまるべき正氣を失ひ打たふれしは目もあてられぬ次第なり折節近所にて心易き柏屋の長右衛門といふ人牙郎宿願の事あつて此宮へ詣でけるが此躰を見て介抱し羽織を脱いで打着せあたりの家に伴ひ行き巨燵に暖め藥をあたへさま／＼といたはりければ漸に心付

きけるが又かけ出して行かんとするを人々どいめ様子を問へば右のあらまし物語り此上はいか様なる奉公にも身を賣つて家内の難儀すくひ度との稚心有りあふ人も感に堪へ長右衛門も哀とは思ひながら年端も行かぬ稚き者年季奉公に出たりとも高のしれたる給金なりいつそ宮川町へ身を賣つて男倡奉公に行くなればいつかどの金にもなるべしとつど／＼にいひ聞かすれば相應の金にも成り父母の難儀をすくふならば身は八つどきにさかれ生贖をぬかるゝともさら／＼厭ふ所存にあらざと流石日頃の氣質程有つて悪びれもせぬいひぶん長右衛門吞込んで民之進を人に送らせわづか三里の道なれば其身は宿へも歸らずして直に京都へ急ぎ行くされば孺子の井に入らんとするを見ては惻隱の心ありといふ親父の寐言野夫ならず斯て民之進は宿に歸れば家内は案じ居けれども立願の諱いひくろめ其夜も過ぎて翌朝より長右衛門を待居ける孝行ふかき心の内けなげにも又哀なりけり程なく晝にも至りければ長右衛門が案内にて京都の子供屋扇屋藤助義兵衛が内に入れば民之進出むかひ二人を伴ひ内に入り父母の前に手をつかへ祖母様と申父上の久々の御病氣貧苦にせまり父上の死なうと覺悟し給ふを寐たふりにて聞たりしが子の身としてばうか／＼と聞いていらぬ命の瀬戸せめて廿年にもなるならば仕様摸様も有るべけれども若年の私ゆへ外になすべき手だてもなく是なる長右殿を頼んで宮川町へ奉公に參り度う御座りますると涙と共に願ふにぞ祖母も夫婦も思ひよらねば顔と顔とを見合せてどかうの詞も出



でされば長右衛門引きどりてない習ひでもござらねばマアそうでもして身の代で諸方の借金をもつくのひ人參でも調へて心ながら養生なされいづも闇ではない習ひわしが請に立つからは金さへ出来りや何時でも請返さうと自由な事御子息の孝行を無にせまいと思ふゆへ夕べから夜も寐ず京へ六里のたて通し兼て懇意の親方ゆへ諸事しめくもりして置いたれば判さへ出来れば金渡さうと詞に付いて扇屋も長右殿の咄に違はず孝行といひ器量といひ目の内に見處あれば此子は一はねはねうと思へば飛びつく程欲しいから六年切りで百兩と金子の包さし出せば父は涙の顔を上げ何れもの御世話性が孝行過分にはござれども拙者も故有る武士の浪人いかに貧苦にせまり果て病氣難儀なればとて天にも地にも只ツタ一人のおひ先ある悴を賣つて其身の代で命をつなぐは我が子の肉を食する同前先祖へ對して言譯なく犬猫にもおとりたれば嘗へ砂をかみ餓死ぬとも此儀は決して相ならずと得心すべき氣色もなし民之進もしほれ居しが父の詞を聞くよりも傍なる脇指ぬきはなし切腹と見るよりも皆々驚きいだき止むれば祖母も行歩は叶はねども共々に這ひよりて短氣をするなどうなりともそちが望みにまかせんと取りくになだむればどうで生きて詮なき命祖母様や父上の御難儀を見んよりは死なせてたべとかち歎けば父も涙の目を押しのごひ氷の魚雪の筈其孝行にもおとるまじ日頃一徹短慮なりと阿られし程ありて十二や三の子心にて年に似合ぬ丈夫の魂此上は留めても留まらじ汝が望みに任すべし去りた

ら此年まで養育せしは主人を見立て奉公させ世に出さんとこそ思ひしにふがいなき親ゆへに年端も行かて苦勞かんなん不便の次第とふるふ手を長右衛門が介抱にて證文に印形すれば祖母と母とは左右にすがり涙ながらに髪かきなで思ひつゞけし數々の胸にせまりて詞なし二人も哀にくれながら用意の竹轡をさし寄せさせ民之進をいたはり乗せ名残は盡きじとそこく暇乞ひして立歸る跡のなげきいはん方なしかくて果つべき事ならねば彼身の代にて大醫をむかへ價の貴き人參を用ひ残る方なき養生に母の病も全快し義兵衛も程なく平愈しけりこれ偏に民之進が世に類なき孝心の天に通ぜし故ぞかし彼唐土の郭巨てふ人母の爲に子を埋まんとして金の釜を堀出せしに類等しき孝行なりそれよりも民之進は宮川町へ引移り昔の武藝引きかへて三絃小舞の手など日數もたゝで覺えければ嵐玉柏と名をかへて四條の劇場へ出しけるが下和が玉磨かれては瓦石と類すべきにあらねば全盛つゞく者もなく江戸よりも聞傳へ段々の云入れに親方の相談極り堺町へ下りけるがわけて其頃押なべて男色盛の時節なるに梅のずあいのすんとして態ならぬ色香あるは東の人の氣象に叶へば風流の客前後を争ひ色子の内も評判つよく元服して海老藏が弟子と成り栢延の一字を貰ひ俳號を栢車と名乗り村上彦四郎の荒事より次第くへに評判よく上方よりも招かれて當りを取る其内に初めの名は遠慮ありとて雷藏と改名し再江戸へ下りてより益最負の人多し此人常の詞にも我は仕合せ悪くしてかゝる身となりたれば形は武門に



返りがたくとも心はなご昔の武士を忘れんやと其志し古の朱家劇孟がおもむきを移し物ごと  
 角力角力すき又拳の上手にて世上にならぶ者もなしされば段々評判よく當り狂言多き中にしのぶ  
 賣りあかん平總角の助六なんど類なき大入りにて世上の評判樂屋のもてなし取わけ女中の最負  
 つよく雷藏くとはやし立て仕出し團扇櫛笄三升の中へ雷の字を付けたるは屋敷も町も嬉しが  
 り鳴る雷はこはがれども此雷はかはゆがり抓まれたがるも多かりき爰に又色事師坂東彦三郎薪  
 水といふ者有り先の彦三郎が實子にて稚名を菊松となん呼びけるが父薪水泉下の客と成つてよ  
 り菊松父の名を繼いで二代の彦三郎と成りにけり元來父彦三郎はくれ竹の伏見の里の産れにて  
 是も武士の忤なりしが故あつて役者と成り舞臺も武道を専とし實の實といふ仕内にて眞の上手  
 どもてはやされ家老職のおもくし其頃續く役者もなし然るに薪水四十に至りて子なき事を  
 うれへけるが人の教にまかせつゝ隅田川の龍神へ三七日の通夜をして祈出せし申子は即ち後の  
 薪水なり實にやびんが卵の中より其聲衆鳥にまさるとかや薪水子役より愛敬つよく若衆形に  
 て大入りを取り僧俗男女心をうごかし扇牙杖差煙袋歌發句はいふに及ばず薪水が手で墨を付け  
 ても兒女子の嬉しがると義之が墨蹟定家の色紙にもまされり父は堅きを仕にせとし後の薪水は  
 初めより色事師の名代にて舞臺の風はかはれども常の行跡父にもまさり最負の人々招けども等

閑にては茶屋へも行かず若し據なく行く時はいつも袴を脱がざる故客も却て窮屈がる程行義  
 正しき生質にて流石昔のあづさ弓引くかたの女中なんどは鴈の便を求めては玉の緒の絶えなん  
 どかこち人目の關を忍兼ねつゝしたひ來るも多かりしが自然と柳下惠が行ひに等しくみだりな  
 る事怪我にもなし女はつれなしと恨むれども其守りの堅き事大人君子も恥ぬべし初め薪水孤に  
 て親類とてもあらざれば尾上梅幸を親と頼み又此栢車が男氣を見込み兄弟分の約をなし雲と成  
 り雨どならんと契りしが元服の後も交り絶えず實の兄弟より睦じいかなる過去の約束にや戌の  
 秋より雷藏は何となう煩出し押して勤め勤めながら次第に氣分悪ければ亥の二月より舞臺を  
 引きて養生しけるを薪水も日々行いて看病おこたる事もなしされどもさらに快氣も見えず次第  
 におもる病の床最負の方にも聞傳へそこの立願かしこの祈禱様々心を盡せども其驗も見えざり  
 けり

根無草後編二之卷終



根無草後編三之卷

かやうに候者は市川の雷藏にて候我久々の病氣にて醫療手を盡すといへども更に快氣もなかりし處に此程淺草の觀世音を念じ奉りける驗にやいつに勝れて快く覺え候程に御禮の爲淺草に參詣せばやと存候浮世の夢も短夜のまだ晴れやらぬ雲井の月心の駒を引立て法の爲には藏前の閻魔堂にぞ着きにけりく淺草までは程遠し爰にていざや休まんとて堂のかたへに蹲踞り暫し念珠し居ける所拜殿俄に物音して晝のごとく照り渡り閻王中央に座し給へば左右に十五列を正し表の方には獄卒ども數もかざらず並居たる閻魔王御聲高く是まで心を盡せども戀の叶はぬ業腹まざれ朕闇雲に亡命して此所に至りし心は堺町をぶつこはし玉をこつちへ引きさらはんと心はやたけにはやれども日本は神國にて伊勢八幡王子の稻荷あへない手相が多ければ漫りに他領へ踏込みがたし乾道の事は教法大師の支配なれば呼寄せて申付けよと轉輪王の心付き尤に思ふゆる廣野へ呼びに遣はせしが定めて使歸りつらんと勅誂あれば轉輪王さん候教法が儀は幸と大師河原の別業に逗留せし由承り御次まで召寄せ置きたりそれくと呼次げば香の衣に九條の袈裟御衣の袂の香を殘す標帽子の花々しくいとも殊勝に着座あれば閻王近くと招かせ給ひ汝を召す事餘の儀ならず聞きも及ばん此大王見ぬ戀に身をやつす御坊は名高き若衆の開基此道一派

の祖師なれば諸分功者と聞及ぶ何卒路考を手に入れる魂膽は有るまいかと惚々として勅誂あれば教法の詞を待たず宗帝王居丈高に成つて毎日毎夜諫めても金言耳に逆馬の指つまりたる御所存かな三千世界の其中には日本といひ唐といひ天竺阿蘭陀をはじめとして數萬の國々ありといへども皆それくの司あつて國を治め民を教へ萬國太平を樂しむと皆上一人の徳によれりされば古唐土にて吳王劍をこのまるれば民きずつく者多く楚王女の腰の細きをすけば宮女に餓死多かりしも上の好む所下必ず隨ふならひ君は世界の物司にして過去現在未來までの善惡を正し給ふ大切の御身を以て稚子の小路がくれ二才野郎の扱參りのごとく地獄を逐電し給ふさへ沙汰の限りの事なるに寝ても起きても若衆の樽一つ穴の狐とやらで教法までを呼寄せて言語道斷の御しかた是に居らるゝ教法大師も廣野へ入定めされて以來未だに戲家がやまぬかして動もすれば石芋石蛤で人をちやかし古河では水でじやうだんをはじめ役にも立たぬ白の目を切り折々は堺町葎間通ひもめさるやら坊様忍ぶは闇がよい月夜にはあたまがぶらりしやらりと諷はる天地自然の女色さへ淫るゝ時は身をまくり家を失ひ國を亡す况や男色の無理非道なると耳の穴へ食を喰煮茶罐で味噌を摺るがごとしかゝる不埒を行ひながら此宗一派の洪匠とあふがれ密教とやら夕河岸の阿字本不生の脊こし膾鮮の過ぎた衆生を化す上へ計の見せかけにて葛西舟の船頭雪隠の神の末社も同前己がななくば我々もかゝる憂目は見まいぞと此一宗の新發意が祖師の



あたまを叩くといふも實に尤と覺ゆるなりいそぎ教法を追ひまくり廣野山と黃蜀葵根店を片時も早く破却して痔病の愁ひを除くべしソレソレと下知すれば轉輪王押といめ宗帝王の詞は皆理屈と申物にて大道をしるの理にあらざ閣王の御持持諫むるは臣下の道とは申ながら譬へば雷火に水を掛れば其火ます／＼さかんれども合せ火をなす時は其火却消ゆるがごとし浮世に此理を知らぬ者人のすること皆非に見え獨り噴毒を燃しつゝ世をうらやむ族も多し又教法の若衆好きは其人の一癖にて道害するに至るべからずなくて七癖といふ諺あり王濟が馬癖和嶋が財癖杜預が左傳慈鎮の倭歌盛親僧都の芋魁宗祇法師の髻を愛せしも皆人々の癖ぞかし志し尋常にして癖大なる者は癖の爲にとらかされ志し大にしてなみ／＼の癖ある者何ぞ癖の爲に志しを奪はれんや大師の若衆を愛するは一には癖二には糟糠も腹にみつれば八珍をかへりみず末世の坊主男色にて事を濟せ女犯の害をまぬかれしめんと遠きを慮る權者の心不學無術の輩の容易しる所にあらざと詞を放つて云返せば初江王すゝみ出で轉輪王の詞面白しまかし坊主は左もあらんが女色をいましめぬ俗人の男色を好む事甚だ以て其意得ず大王も只今より路考が事を思ひ切り是より三谷通ひと出掛け土手をしつぱり雪の鷺只一人は用心いかゞ我等御供仕らんそれ郭通ひの風流なる宿の出入に人目を忍び家業のいとまに我身を竊む或は兜籠或は船黃帝車を製すれども四つ手の輕き案じは出でず梶原逆櫓を争へども猪牙の早きに心付かず末世の手まはし浮

世の才覺腰のすわり櫓の手練飛鳥と成つて雲に入らざれば射る矢と成つて空をしのぐかど疑ふ船かるく人重く動けば動き鎮まれば鎮まる潮引いては橋杭長く月出でゝは登ると早し火細箱にくゆれば吸ひがら舳をたゞく聲は聞えず往來の人目は届く左右の河岸椎の木は屋敷をしのびて高く首尾の松は波をくわりて榮ゆ竹町の渡し十文字に過ぎ駒形の堂斜に見渡す遠きもの自ら近づき近き物忽ち遠さがる程なく盧崎眞乳山三圍の鳥居恨めしそくに眼けば洲の上の葦心有りげに招く今戸橋小さしといへども通る人よりくゝる人多く堀の舟宿多しといへども出る舟あれば入る舟あり懸方燈水を照せば提燈の火は土手に映ず道哲の鉦耳をすませば煙の臭ひ鼻をつらぬく金なき男は無常を觀ずれども時めく人は遊ばぬが損なりと悟る草青々と萌出ては心殊更春めき月皎々と照りては其係益ゆかし螢かすかに飛んでは別世界の風涼しく雪ちら／＼と落ちては醉覺の顔心地よし野路の風景他に異なるを見れども見えず聞けども聞えず衣紋坂大門口人の風俗常にあらざれば我心我にあらず仙人も通を失ひ石佛もうかれ出る衣装の伊達あたまの物好き三人一般ならざれば萬人亦同じからずしる人あればしらぬ人あり見ぬふりあれば見せるふりあり待合の辻中の町大道直うして髪のごとく料理潔うして玉のごとし茶屋の饗應牽頭の洒落小戸は茶漬に正躰をあらはし底ぬけは先底を入れる垣間見の隣座敷は見し玉簾の内ぞ床敷く行過ぐる道中には乙女の姿しばしばしといめよと思ふ提灯寸をはづれて大きく定紋紙にあまつて目立つ



花美を極むる繡には鳳凰も文彩を耻ぢ照りを撰べる瑠璃には名玉も光輝を失ふ道筋糸をはゆる  
 がごとく足音節を打つに似たり禿のさはやかなる新造の花やかなるやりてのいくせある顔色も  
 芝蘭の室に入つて自ら香しき常の姫とはたがへる様にちもほゆるもおかし江戸町京町前後に在  
 つて各左右二町に分れすみ町亦其中にはさまれて獨り南一町にかたよる五丁町の名遠近に傳へ  
 夜店の氣色古風を變へず身仕舞濟んで鈴の音聞え日暮れて後格子賑ふ座は位を定め衣裝は新古  
 をわかつ油煙天に登り三絃地に響き文は誰が爲に書き囁きは何事をかいつ地廻りの下駄鼻歌と  
 共に去りはむきの町人新吾左と伴ひ來る老爺あれば少年あり醫人あれば先士あり野夫あれば通  
 り者ありどらは盡す始終の氣僧は忍ぶ借り着の紋頭巾は一むれの闇を生じ編笠一片の山を畫く  
 種々の出立ちさまざまの風俗波のごとく寄り雲の如く集る人の心各異に物好き亦一般ならず目  
 本に惚れば口元になづみ鼻筋に見込めば壓に打込み莠と苗と燕石と玉と何れをか捨て何れをか  
 残さん初會の盃もむき古く給えせぬも久しいものなり作法を崩さず位を落さず座を明けず囁  
 かずさわぎの柏子に乘らざること岡場所の企て及ぶべきにあらず料理出で床をさまり來る事お  
 そく待つ事長し引け四つの柝聲はの聞ゆれば廊下の足音耳に響き茶屋は迎ひの刻限を約し男僕  
 來りて油をつぐ隣の口舌よそのむつ言蒲山しき風情ありて待つは久しき物にぞ有りけりの小歌  
 の文句も身にこたへモウ來そな物ぢやといふ狂言も思ひ出す上草履の音扱こそと待てば夫に

はあらで行過ぎたるも本意なく亮隔の明けは是なんめりと思へば新造來りて厨櫃を鳴らすもに  
 くし長うなり短うなり右に寝ね左に起き咽乾いて手をならせば了鬢の返事もながくしき夜を  
 獨かも寐かといと心細し欠し伸し心氣勞れて纒と來りたばこくゆらすも亦思はせぶりなり初會  
 の遊びは答める花の色を含みて日を待つがごとく谷の報春鳥枝に來て聲を出さるに似たりか  
 らる内なん九郎助稻荷もいまだ講中とは思はず出雲の神も先づ當座帳に記すなるべし行くに解  
 け通ふに馴染み白き糸の染るにたとへ陽氣に物の暖るがごとく茶屋にむかへ大門におくり先座  
 の委細巨細新造の人身御供させども貰ひもめれども來る愈々思へば愈々思はれ可憐ければ又が  
 られ連われれば行き一人も行く異見いふを野夫と見くだし馬の合たを粹なりと思ふ惣仕舞は門帷  
 をあらし居ついはは浴室を覺え雪の且の小鍋立てには了鬢向ふの人を呼び雨の夜のしつぼり酒  
 には内の女郎追々に集る語盡して歸ると思へど別れになれば詞殘るがごとく逢はねばならぬ用  
 ありと呼ばれて行けば又左のみ外に用なし枕の定紋ほくろの命箸紙客の替名をしるせば文には  
 己が本名をあらはし昔を明し行末をかたり神に誓ひ佛に祈り或は指或は爪實と見える虚あれば  
 虚より出る實もあり若し飛鳥川の淵瀨定らず月草のうつろふ色あれば捕手待伏勢あこり羽織さ  
 かれ髪切られ男は女の操を守れば女に男の意氣地あるも實に此里のならばせなり物日の約束夜  
 具の敷初め抽留めつき出し身請けの祝儀物を貰つてやり手と呼れ角なくて牛といはる臺は喜の



字に定り豆腐は山屋に名高し袖の梅巻きせんべい漬菜昆布巻甘露梅群玉庵は河漏に名をなし最中の月は竹村に仕出す小買の淺漬茶碗の煮豆宵の文蛤夜明の按摩世に並なく外に類なし遊の興多き中にも大黒舞のいさましき燈籠の花々しき二日七種藏開き初午涅槃事納め上已灌佛衣更端午七夕盂蘭盆會八朔重陽えびす講いのこ餅つき淺草市櫻の風流月見の趣向善盡し美を盡す一時の榮花に千歳をのべ白髪忽ち黒きに變ず世に譬ふべき樂みあらんやかゝる風流を知らずして若衆を愛し給ふ事は夏の虫氷をしらず乞食の女房搗立の餅を喰はざるにひとしサア返答を承はらんと席を叩いて演べらるゝ

### 根無草後編三之卷終

### 根無草後編四之卷

初江王の辨舌に闇王を初めとして一座大きに驚き入り詞を出す者もなし其時大師莞爾として曰く鮑魚の肆臭き事を覺えず藝の虫葵にうつらず女色に淫るゝ輩は我が男色の貴きとを知らずそれ男女の交りは陰陽自然の道理にして大倫の根元なればいきとし生る者此道にもるゝとなし然るに末世に至りてはかゝる貴き男女の道を切賣りにして遊所と名付け人の心を蕩すより家を傾け國をかたむく其災少からず我これを慮りて男色の淡きを以て其災を減せしむるは鹽茶にて渴きをどいめむかへ酒にて宿酒を醒す又男色の上品なるは劇場の地を専とすこれ亦樂の餘風にて人を和するの器となり惡を懲し善を勸め鬱を散じ憂ひを忘れ太平に居て亂世の趣きをさとり安きに座して危きの理を知り愚夫も仁義のはしくれを聞き兒女子も古人の姓名を覺ゆ實に治世の玩ひなり抑芝居のさかんなる二丁町の賑々敷中村座市村座外記座辰松肥前掾軒をならべ入り争ふわけて歌舞伎兩座を以て根元とし大劇場と稱す顔見世入替り定つてより役者附四方に散じ世界定めはなし初讀初稽古總ざらへ下りの乗込み一座のさわぎ酒酒を飲み人人にたかる雪霜の夜の寒きを忘れ一陽來復先づ此地より初る紋看板には甲乙を顯はし繪姿藝のあらましをしらしむ提灯連つて定紋まばゆく行燈争つて趣向を盡す左右の埒鮮のごとく押し前後の群衆桃を



盛るに似たり行かんとすれども人分らず退かんとすれども顧るに隙なく押れて動きもまれて止  
 り氣頭に登り足地に踏まず最負のきほひ手打の連中ひろめの幌巾垂にかぶり我慢の弓張筋違に  
 提げ虎のごとく翺り狼のごとく叫び十里の谿谷ヨイ／＼と響き歸りの禮義お目出度と騒ぐ  
 積物峨々として山よりも高く張札翻として雪のごとく飄る迎ひの提灯烈缺を欺き二階のさわ  
 ぎは雷の落るかど疑ふどぶ板厚うして足音高く披露地狭うして小便流る東西の街南北の道筋基  
 盤のごとく又蜘蛛手に似たり來る人行く人止る人貨食者は煮るにいとまなく賣擔子は遠にむら  
 る橋は群集の人いたはみ川は蹴上げの流塵に埋む一番太鼓は八聲に先立ち三番叟は明けるを待  
 たず木戸の仕着せ揃ひの定紋手巾長うして領に餘り扇大きうして招くに便なり仕切場留場棧敷  
 番半疊中賣火繩賣衣装目立ち鬢光り勢ひ猛に聲高し貴賤老若僧俗男女胸さわぎ魂飛ひ足を空に  
 なして脇目をふらず衆星の北辰に共ひ河水の海に朝するに似たり上棧敷下棧敷内簾太夫新格子  
 場所の善悪手筋を求め茶屋の云込み前後を競ふ毛氈の紅葉衣装の花羅漢の人は依のごとく重り  
 舞臺の透間は蠅のごとくたかる向棧敷土間棧敷切落し追込みなんと分に應じ好みにしたかふ膝  
 と膝肩と肩人氣蒸し火繩くゆり番附つらぬ新淨瑠璃饅頭煎茶おこし米蜜柑辨當酒肴無遠慮に越  
 え大股にまたぎ割込は近所の膝を痛め烟草は隣の羽織をこがす袖と袖との色事にはあたりのや  
 きもち騒々敷足を踏まれし喧嘩には留場來りてかつぎ出すしらせの撃柝替名の讀立て幕明いて

より殊更にどよみ花道の出端手打の祝儀下り役者の謁見にはひろめの取なし最負を願ひ座附の  
 口上玉を連ぬ家々の藝得手／＼の所作頭の物好天下に流れ衣装の仕出し都鄙に傳ふ音曲は呂律  
 を極め鳴物は拍子を盡す作者の趣向道具の見え故きを温ね新しきを工み或は勇み或は戯れ或は  
 笑ひ或は愁ふ諸見物の心々響きの聲に應ずるがごとくりきめばりきみ泣けば泣き私に感じ顯に  
 譽めはづみのかげ聲人並のヤンヤ鼻毛延び涎流るしつぱりのぬれ事には女中の上氣耳を熱がり  
 老女も昔に還らまほしと思ふ着替へては媚を争ひのべ鏡は化粧を補ふ東の上はてら／＼と輝き  
 西のうづらは興を催す舞臺の出遣入ちよんの間盃手折れる花のあたり目立ち水の月影所を定  
 めず追々に跡出てより程なく正月二の替り嘉例の曾我に種々の持込み春狂言曾我祭り土用休み  
 秋狂言又顔見世の入替り環の端なきがごとく年々歳々人同じからず茶屋の混雑勝手騷ぎ下女  
 飛んで八百屋に至り魚ながしに踊るかまどに陽炎もえ出れば播盆地下に雷を發し剗刀の電光あ  
 ればいり鳥鍋に液雨の聲あり四季の景色目前にあらはれはからずして仙境に入るかど疑ふ二階  
 はれやかにして間取無造作に割め正しくして器物潔し茶屋のむかひ送りの提灯編笠面を覆ひ振  
 袖地を拂ふ緑の髪雪の脛小袖きらびやかにして往來の目を驚かし足音しどやかにして待つ人の  
 胸に響く追々に來り程々に座す氣どりは旭の昇るがごとく風情は若竹のうるはしきに似たり小  
 歌勇みありて三絃俗ならず酒はづみ興闌にして舞の身ぶり狂言のおもむき旗檀は二葉より香



しく蛇は一寸にして其氣を得るばんばち火まはし道具まはし八兵衛く八兵衛地口どぐわんす  
 羅漢舞蔭繪聲色中返り男は女は獅子ちよきりちよ投壺の矢數拳の變化蛇は蛭蝮にまけ里長は狐  
 に誤る我を忘れ人を忘れ童に還り愚に及ぶ臨氣應變千變萬化遊びの骨髓に入り騒ぎの妙所に至  
 る或は通ひ或は馴染こつそりと逢ひしめやかに語るいやみなくいちやつかず意氣地あり拍子あ  
 り己を立つるの計策少く末を契るの慾もなし傾城は甘きと蜜のごどく申童は淡きと水のごとし  
 甘きものは味盡き淡きは無味の味を生ず娼妓の實は慾より出で優童の實は義より出づ鳳凰孔雀  
 雉鷄雌は雄の見事なるにしかず娼子妓女妓町屋形女は男娼の美なるに及ばずまして二丁町の他  
 に勝れる花の都の錦を分けては柳櫻の艶なるを撰び浪花江に身をつくしてはよしあしの品をさ  
 がす千人の中より百人をすぐり百人より又一人を出す名代の小倡古今絶えず此地の繁花四時を  
 わかたず二月の瓜九月の獨活寒中の筭には孟宗のお袋小言を云ひやみ四方が仕似せの沃泉水に  
 は美濃の孝子も荷囊をたたく福山の河漏虎屋の菓子家桶盛府が油店雷藏おこし鹿子餅月々に流  
 行り日々に弘るうかれては暮るゝを覺えず騒いでは明るををしらず元氣を引立て積箭を散ず不老  
 延年の藥たりともいかでかこれに勝るべけんや彼利に入りし娼妓買の陰症の傷寒に類せると日  
 を同うして語るべからずかゝる繁花の其中に三箇の津にて一人と呼ばれし菊之丞が其容貌譽む  
 るにも詞なく譬へんとするに物なし鮫のお仙小指をくはへ銀杏のおかんはだしにて逃げ雪溪が

花鳥も色を失ひ春信も筆を捨つ帽子に瀬川の名目あれば染物に路考茶あり路考娘弓町路考似た  
 るに名付け美しきに譬ふ我此一派開基以來かゝる器量は見初めなれば閻王のこがれ給ふもゆめ  
 く僻事と思ふべからずと教法大師の辨説に一座も大に感心し大王猶しもうかれ給ひ扱々餅は  
 餅匠とやらさすが男倡の祖師程あつて驚入たる諸分の功者連もの事に御坊を頼み路考を迎ひに  
 遣はすべし早々用意とせかせ給へば俱生神かぶり打ふりイヤくそれは宜しからずかゝる名代  
 の若衆好きを路考が迎ひに遣はされんは焼鼠を狐に預け猫に佳蘇魚の番とやらにて必定しくち  
 りの基なり既に以て先達て龍神に勅定ありしに若衆好きの水虎めを迎ひにやりし不調法故あつ  
 たら玉を取りにがし只今に至るまで地獄のさわごと成りたると前車の覆るをみすくも教法を  
 遣はされんは以ての外の誤りなり只今大師申す通り天下に一人の器量にて四角四面の大王さへ  
 戀ひこがれ給ふからは誰をやりても忽ち惚れ木乃伊取るとて木乃伊と成るは億萬劫をふるとて  
 も容易く御手に入るまじければ此以後の懲しめの爲め龍神を呼寄せて罪に行ひ給はずんば閻王  
 の政道暗きに似たり即水中の物司難陀龍王の幕下此淺草の川上隅田川の龍神を召し給ひて急度  
 御吟味あるべしソレくこの早使ひ足疾鬼に引立てられ隅田川の龍神參内あれば閻王怒りの御  
 聲高く先達つて路考が事難陀龍王に申付しに不吟味なる取計ひ故水虎めが大しくじり汝此川筋  
 を守りながらしらず顔にて打過ぎしは言語同断の仕かたなれば其罪汝一人に歸す早く刑罰に處



すべしと仰せの下より獄卒共鐵の棒をふり立て〜龍神を取りまはし既にかうよと見えければ傍に居合す雷藏が椽側よりあゆみ出で暫く〜と聲を掛つと出て獄卒を取つてつきのけはりとばし龍神を後にかこひ閻魔王をばつたと白眼東夷南蠻北狄西戎四夷八荒天地乾坤の其間あるべき者の知らざらんや長病にて瘦せられたるも海老が譲りの暫役天幸まがひの閻魔殿鬼瓦からつりを取りてあてこともないしやつ面で身の程いらなひ色ぜんさく傍から見る目かぐ鼻のいはれぬちよこざい出かしたてあらが若衆の産砂の龍神までを呼出していぢめる所へびつかりとひかりに出かけた雷藏がぐわたく〜鳴りの荒事にうぬらが臍の用心しろと飛掛つて大王のがんづか抓んで投付くればソレのがすなと取巻くを取つてはなげのけつかんで十王みぢんの鬼味噌も當るを幸踏みちらしすつくと立ちし夢覺めて雷藏は病の床冷汗流してうなさる聲妻をはじめ病家の人々様々に介抱すれば漸々正氣と成りいとくるしげなる息をつぎ我長病のつかれにてまどろむともなき其内に不思議なる夢を見しとて始終の様子物語りこれぞ正しく我命の終るべき時至り閻魔の廳に至るといふ佛の告げと覺えたりしる通り幼少よりうき艱難の世の中を渡りくらべてしるといふ阿波の鳴戸のなみ〜ならぬしんぼうしとげ世の人の最負に預り世話に成りし思もあくらで果んと返す〜も口惜し二つには兼てより我は此身で朽果つるとも悴を守り立て人となし父の名字をつがせんと思ひし事も水の泡是ぞよみぢの障りぞと涙と共に物語れば妻

根無草後編四之卷終

や子供はしやくり上げとかうの詞も出でざれば薪水は力を付け尤も病は輕からぬと死ぬるといふにも極るまじ藥の効佛神の力を頼み給ひつゝ心しづかに養生あれ譬へお命終るとも我らかくて有るからは跡の案じはし給ふまじと念頃力こそふればいと嬉しげにうなづきて何かいはんともがげども舌強りて聲出でず漸に筆をとりて辭世の一首かく計り終にゆく道とはしれど子規なきつる方にむかふ極樂市川栢車と書終り四十四歳を一期として明和四年亥四月中の二日子の下刻眠るがごとき臨終に人々夢の心地にて前後不覺の歎きの眸目もあてられぬ次第なり扱有るべきにしもあらざれば野邊の送り取りおこなひ所縁ある菩提所なれば下谷の常林寺に葬りて蓮華院詠行信士と書きしるす印の石は朽ちせぬと最負の人の涙の雨朽ちぬ袂はなかりけり



根無草後編五之卷

萬のとはたのむべからずと吉田の法師が筆の跡頼みにならぬ娑婆世界さしも日頃健なりし市川栢車世を去れば世上の驚き大かたならず遠近親疎の差別なく或は惜しみ或は歎きわけて最負の婦人などは思ひ亂れて泣く涙雨とふらなん渡り川水まさりなばかへり来るかになどかこてもも三途の川に川留めなく死出の關の戸閉さねば反魂香の烟さへ仇に立ち行く月と日の七日の訪吊ひ諸事薪水が身に引請け事故なく取りまかなひ殊に悴離職は父栢車が稚立にひとしく伶俐なる生質にて育ちも賤しからざれば先祖の家名を繼がせんとて父の傳へし業を止めさせ頼母しき人引とりて教訓殘る方もなし其外稚き娘なんども所縁の方に宮仕天道人を殺さずにて皆それくにかた付きけりされば南山雲起れば北山雨下るの習ひにて翌年の春の頃より薪水も氣のかたにてどこ悪きとも覺えねども只何となう心重く次第に形容瘦せおとろへ盗汗朝熱痰咳に藥よ減よ四花患門所禱立願殘る方なくさまく養生すれども中々快氣の躰にも見えず其身も所詮生きたるべき病ども覺えねば後世の營みおこたらず兼てより聞けるにも佛出世の本懐を妙法蓮華經と名け法華の八軸は八葉を表し四要品の中には普門品を咽喉とし觀音薩埵の妙智力三十三身無量の容を標し南方於帝庭古天の廣小路補陀落の切道しにて種々の手づまをはじめ給

ふ就中聖觀音は餓鬼道にての化主之助と呼れ衆生濟度の方便には豆と徳利の妙をやらかし一紙半錢の手の内にはむしやらくしやらの大明神と我を区々私ととなへて掌より甘露をふらし餓鬼趣に施し給ふ故大慈觀世音と申なり金龍山淺草寺に安置し給ふ因縁は推古天皇は御宇に當つて檜熊濱成武成とて兄弟の漁父有りけり憂き世渡りの網の中より顯はれ給ふ尊像にして古今の靈驗いちじるく日頃念じ奉ればましてかゝる時節なれば普門品を念誦して懇情少しも怠慢なし頃しも早月初めつかたいと短き終夜寐る隙もなきながくの看病に勞れ果て妻をはじめ病家の人々眠らじとは思ひながら皆それなりに打こけて跡の様子は白川の夜舟船ぐてふ射の音に薪水は目を覺し讀みかけし經にかゝり一心稱名觀世音菩薩即時觀其音聲皆得解脱と念じつゝ信心おこたるとぞなきされば水晶太陽の火をよび水清うして月影をうつす氣にむかへ心にまねき思ひくして止まざれば鬼神告るの習ひにて異香四方に薫じ音樂の聲聞え渡れば薪水不思議の思ひをなしふりさけ見れば大空より淺草の觀音忽然として顯はれ給ひこれへく招き給へば薪水夢の心地にて病の床を立出れば自然と病苦も覺えずして行くともなく歩むともなくどある所に隨がひ行く菩薩御手をのべ給ひかたへなる卯の花の雪にまがふを手折せ給ひそれ世の人の口ずさみに我大悲の力にては枯れたる木に花咲くとのみ一筋に覺えたるは皆凡俗の迷ひなり生ずべき時節に生じ枯れべき時節に枯るゝとは天地自然定れる數にて破鏡重ねて照らさず落花



枝に上りがたし釋迦達摩顔回孔子深山鳥も白鷺ものがれがたきは此道なり悟れば安く迷へばく  
 らき生死二つの道にうとく私わたくしの法を立て得手勝手の教へをもうけ皆己が田へ水をひく不埒の  
 族多き故世上の俗人益々愚にして箸のこけたも神子山伏屁を放たるにも加持祈禱奇妙の咒咀卜  
 筮人一犬吠えて萬犬吠え應くといへばきくかと思ひ祈禱を頼みの不養生より身を失ひ家を亡す  
 心だに誠の道に叶ひなば祈らずとも神や守らんとての教への歌は丘之禱久矣といふ孔子の詞  
 に符合せり人は天地の靈なれども私の雲に覆はれ人欲の雨風はげしき故災を生じ病を生ず事  
 に臨んで祈るといふは人欲の私をしりぞけ浮雲を拂つて晴天を望むこれ一心の誠より其本にか  
 へるなり譬へば此卵の花の白きは花の持まへにて天より授かる色なれども人家の垣根に咲く時  
 は風塵埃の爲によごれ煙にふすぼり灰に穢さる息にて拂ひ水にて洗へば本の白きにかへれども  
 願はくは初めよりよごさぬやうに氣を付ければ穢れを拂ふ煩ひなしよごれを拂ふを頼みにして  
 よごるゝをかまはぬ故スハといへば狼狽まはりソリヤ御祈禱よ立願よとせつない時の神だゝき  
 地黄を頼みの不養生袖の梅を楯についで内損をするがごとし彼觀音の力を念せず火坑變成池  
 刀尋段々壞と説れしは釋尊一時の方便にて實の觀音を説くにあらざり正法に奇特なし飯糲放下の  
 類にはあらず何ぞや業慾無慙の祈禱者の言を巧み偽りをもうけ謝禮をむさぼる族を頼みて凶事  
 を祈り病を退けんとするは開帳場にて巾着切に紙入を預けるに似たり又人の名をなし事をなす

は草木の花さき實のるにひとし牙ある者には角なく重瓣の花に實少きは造化といへる伴當の入  
 合せたる算用なり汝が花は二葉より人に優れる榮名ありしは早く咲けば早く散る花の譬へと思  
 ふべしさきに栢車が病中に我を念ずると切なりし故浮世のはかなき有様をしめし生死の道を悟  
 らしめんと閻王だも煩惱のまよひまぬかれがたきをしらせ人の樂しみ多き中に虚を賣り實を買  
 ふ吉原堺町の面白きと世にならぶべきものなく人の心をどらかせども皆是一睡の夢の樂しみ  
 なることを示し栢車がよみぢの迷ひをばらせりいざや薪水汝が命久しからざる因縁を語り聞かさ  
 ん汝が父彦三郎四十に及んで子なきとを愁へ隅田川の龍神にたんせいをねきんで祈るといへ  
 ども天より授けし子種なき故龍神の力にも叶はず去りながらあまり切なる志しにめで龍神自  
 ら形をわかち汝が母の胎内にやどり出生せし子は其方なり去るによつて汝が體は隅田川の龍  
 神とは一躰分身の姿なり栢車が夢中にしらせしごとく隅田川の龍神無失の罪にしづみ其科の  
 れがたき事あり是龍神の飛行自在大小變化の妙術も死すべき時節はまぬかれがたく去る四月五  
 日の夜天人の五衰とて多くの天人薨をならべ作り立てたる家々の忽ち一時の灰燼となる其砌龍  
 神も煙りに巻れ焼死んで其尸世に残り龍の頭と評判せしは閻王の命にそむき路考が代りに八重  
 桐を連行きし水虎が科のどばしり故に相果てし隅田川の龍神の遺骨なりと思ふべし龍神死して  
 は程もなく汝が命終るべきは極れる命數なりといふかと思へば忽ちにかき消すごとく失せ給ふ



薪水はばう然と元の病の床の内夢もなく現とも思ひ掛けなき教を請け心のまよひ晴行けば病の苦痛はなけれどももとても必死の症なれば次第〜におとろへて辭世一句

艶なるや我はめいどへ花あやめ

明和五つ戊子の歳五月四日の曉に終に空しく成りにけり戒名は妙果院薪水日成と深川の淨心寺に石の印いちじるく最負の參詣絶間なし嗚呼時なる哉命なる哉さしも名高き栢車薪水二年の内故人となり劇場も何か物足らぬ風情にていかほの沼のいかにせんと世上のいさみうすかりしが楓葉衰へて盧橘花發く習ひにて當顔見せの入替りより若手の役者新下り花を競べ色を争ひ木戸の大入り世上の評判一時の煙となりたりし吉原も建てつゞき日々繁昌いやまして美麗昔に十倍せり人間萬事塞翁がうまれた時は裸にて又死ぬ時とはだかなり飲めや謠へや一寸先は闇の夜に鳴かぬ鳥の聲聞けば拾はぬ先の金ぞ戀ひしきやうのたはけ世に多きも實に太平の御代の春事もおろかやかゝる世に住める民とて豊なる君の恵みぞありがたき〜

### 根無草後編五之卷大尾

### 跋

鶏が鳴く吾妻はやと千早振神の教への和事より相聞の根に通ひ由縁ある江戸紫の治郎帽子はことにその色香も深からずやとりわき此道の聖とあふぐ市川瀬川の兩流はその源遠くその末廣くして流れをくみ取る人多ければ浪速のみづと聞くとにつけて蘆町のよしあしをいはず花房町のあだなる散りのわかれには湯島のわきかへる胸をこがし底倉の湯泉のそこひなき淵に身を沈むるとも思ひ入りたる意氣知のをしきさ男氣のいきはり有る是に増る情やはあるはしきやし郎女のなからひは久方のひさしいもので舊衣の事ふりにたれば朝夕の飯を調ふるが如く是を包丁の人料理の家とはいかでかいはん山鳥の尾の長々しき河漏麩の淡薄をめて隼人の薩摩なる金粟酒の酷烈をもてはやすこそは風流のしわざなるべき學びの窓に氣を屈めて古文をよみ鳥凡の上に筆を曲めて篆隸を書くを文人書家



といふもみな是なりがたきを樂みとして醴あまみの如きをして、水の如きにしたがふならずや今や時太平に治る御代の春しごと遊魚くらひなすのらりくらりの遊びの道はながいも有ればみじかいも百たらぬ八百屋の椽えんの下より多く寶引ほうひきの糸の千條ちぢぢにわかれ紋付の數の百箇ももに替るが如く坪皿つぼざらのそこはかなく二乗あひづをくひ瓜造りうりづくにはあらぬ獨樂こまの詐ごめも有るめれど是等はみなうまさけの蜜みつをねぶらせて終にはうつはぎに剣けんとられ裸菟はたからうさぎのきりめに鹽しほのしむらきめ見んよりはしかし此道の左袒かたうでして春はよふく、曙あけぼの白くなり行頃より評判記を待受品定の九品十鉢じゅうはちの月旦評げつたんへいに二の替三の替の未來記を思ひ量はかり顔見せにお取越の正月して時ならぬ花を咲せたるは玉だれの小瓶びんの中なかの乾坤けんこんもかうかしらず三千世界さんぜんせかいに外にはないぞや古人のいへる狂言綺語きんごも法の聲こゑと空海師くわいかいしの蒼海あそみのほよりひろき眞言秘密しんごんひみつのをしへ在原の朝臣あそみの童わらわすがたになづみし岩つゝじの和歌わが什じゅうを初として代々の歌集うたあはせに撰み入られ

しも松帆物語まつぼんものがたりの見るにゆかしきみな此道このみちの器うつわなるをや先に根無草ねむぐさの冊子ふしの行河ゆきがわの水みづのまに〜大邦おほのくにに流行りゅうこうしに今續いまつづて出る物は衆妙門しゅみょうもんの教しよにもとづける成なりべし今に見るべしあら金の地ちを走る犬いぬじもの久方ひさかたの天あまをかける鳥とりの類るいひは雌雄めをとこ相交まじる心こゝろのみ有あて童子どうじを相あおもふ道みちをしらず是こゝろを思おもへば今艶冶いまえんげの情なさけをすて、僻事ひがなりあらぬ外道げだうなりとそしる輩たぐひは人の面おもては有あながら獸けものの心こゝろなりといはゞいかゞはせんあに人ひととして鳥とりにしかざるべけんや

明和戊子めいわぶつしのしはす足をそらにする夜來春やらいはるをはま町のやどりに大藏だいざう干かん文ぶんしるす



## 自序

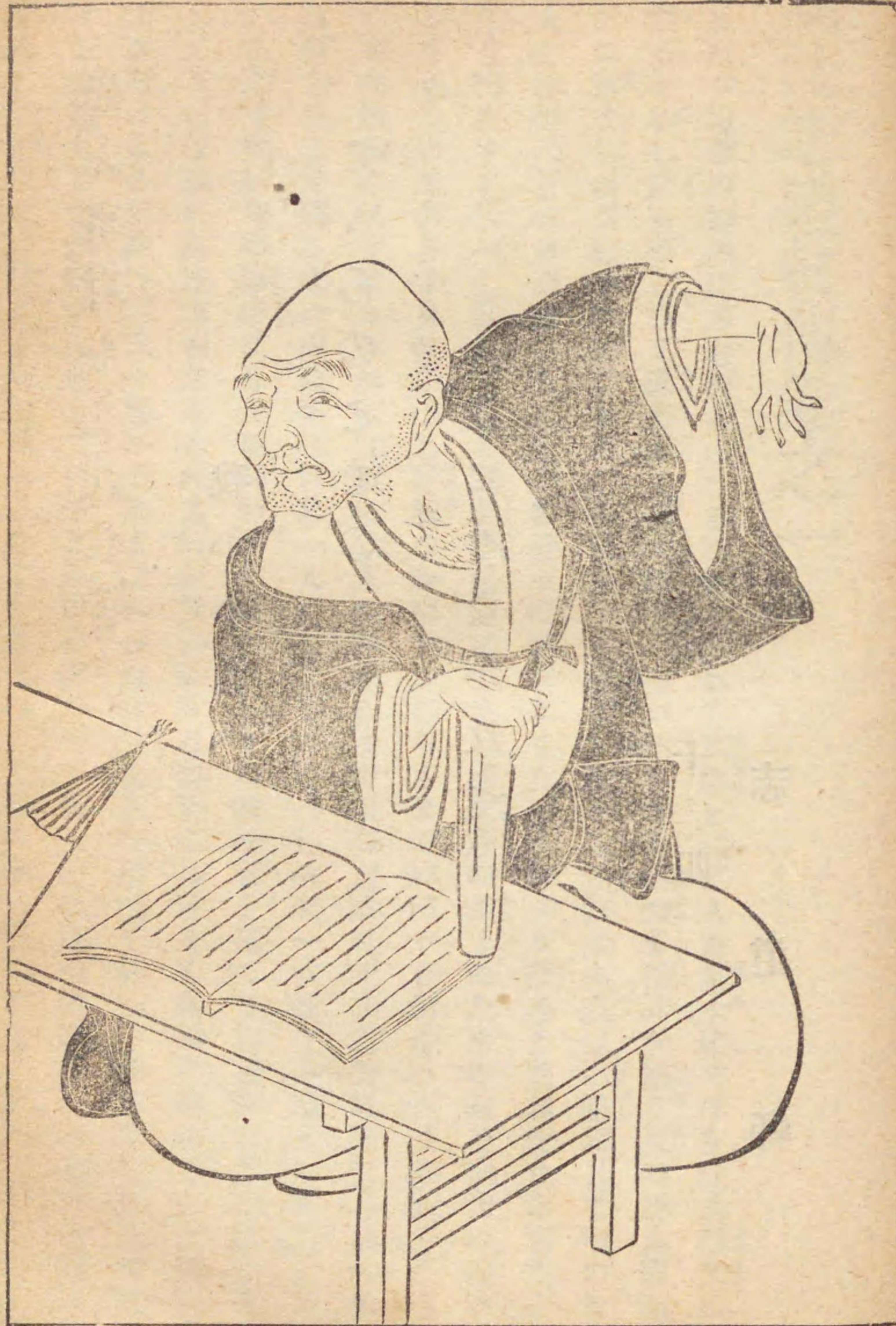
夫馬鹿（ましか）の名目（ななづか）一ならず阿房（あほう）あり雲津久（うんつぐ）あり部羅坊（べらぼう）ありたはけありまた安本丹（あんぼたん）の親玉（おんたま）あり但（た）同（どう）し詞（ことば）にて兄（あに）イといへば少しやさしく利口（りこう）にないといへば人めつたに腹（はら）を立（た）ねどつまる處（ところ）は引（ひ）くるめてたはけは同（どう）したはけなり爰（こゝ）に志道（しだう）斬（ざん）といへる大（おほ）たはけあり浮世（うきよ）の人（ひと）を馬鹿（ましか）にするが不二（ふじ）よりも其名（な）高（たか）は誠（まこと）にたはけの親玉（おんたま）となんいふべしまかはあれどもまた其（その）たわけに領（あき）を落（おち）淺（あ）草（くさ）の地内（ぢない）から腹（はら）をかへて出る雲津久（うんつぐ）ども日に幾人（いくにん）といふ數（かず）を（を）知（し）ず世（よ）にはたはけも多（おほ）きものなり我（われ）また産（う）た時（とき）ぎやつと云（い）からのたはけなれば今（いま）彼（か）が傳（つた）五（ご）卷（まき）を著（あ）安（あん）本（ぼん）丹（たん）にあらずして又何（な）ぞや或（ある）は是（こゝ）を書（か）し是（こゝ）を講（か）するの雲津久（うんつぐ）あれば梓（あ）にちりばめんといふべら坊（ぼう）あり若（し）し此（こゝ）書（か）を取（と）てまかつべらしく讀（よ）ものあらばそれこそ眞（まこと）のたはけにあらずや紙（し）鳶（えん）堂（だう）風來山人（ふうらいしやうじん）一名（いちめい）天竺（てんぢく）浪人（なうじん）浮世（うきよ）三分（さんぶん）五厘（ごりん）店（てん）の寓居（うきよ）に書（か）す



叙

吾友風來山人栖栖市門數年矣其發興所著詆達多端洗洋自  
 恣盖有微意云此册成矣余與客讀之客槌案而歎曰辨哉辨哉  
 假令在於六國之時目如輝星舌如電光與蘇張范蔡之徒周旋  
 於中原者其在斯人歟余曰否若山人之才文之以禮樂令太史  
 謂非龍非虎而未知也而戰國術士豈為山人願之乎客嘿而  
 去人或責以非法言不敢言盖以此概山人固非也以此病山人  
 又非也士苟學焉成志何必銖銖寸寸若膠柱刻舟哉今題數語  
 聊為山人解嘲雖獲阿好之謗所不辭也癸未冬日

獨鈷山人撰





思ふ事有もうれしき

我かみさへ

こゝろのこまの

世につなかれて

八十四

志道軒

風流志道軒傳卷之一

爰に江戸淺草の地内に志道軒といへるえせものあり軍談を以て人を集木にて作りたる松茸の形  
 したるをかしきものを以て節を撃て諸人の臍を宿がへさせる狼雜滑稽耳を爪で尻のごふ程取て  
 も付ぬ齒なしの口をくひしばりそこらだらけが皺だらけなる顔打ふり或は白眼にして他の世上  
 の人を味噌八百のめつほう天八九十に近き瘦親父にて女形の身ぶり聲色まで其趣きを寫すと誠  
 に妙を得たりと云べし其説ところは神儒佛のざく／＼汗老莊の芥子ぬた氷の吸物稻光の油あげ  
 跡も形もないて居る子も笑ひ出し草履つかむやつこらさまでが何やら坊といへば志道軒としる  
 程の古今無双の坊主なりされば江戸に二人の名物あり市川海老藏と此志道軒親父なり然るに柏  
 越は世を去て今残る處の志道軒江戸に一人の名物といふべし故に一枚繪今戸焼を始めとして祭  
 りのあんど髪結床の障子にも此親父が形を畫すばしりの頭松茸を見ても志道軒を思ひ出してを  
 かしくなるは誠に目出度親父なり此人何が故にかゝる事をなしけると其源を尋ぬるに元來此志  
 道軒が親はさる屋敷の用人を勤めて其志淺からぬ深井甚五右衛門といへる筋目正しき人にてそ  
 有ける此甚五右衛門四十に及んで男子なき事を深く憂夫婦一所に淺草の觀音へ三七日の通屋籠  
 をなんして祈けるに満ずる夜の曉南の方より金色の松茸臍の中へ飛入と見て懐胎し男子出生有



りしは即ち此志道軒なり夫婦は悦びのあまり淺草觀音のもうし子なればとて稚名を淺之進と號  
蝶よ花よといつきかしづき初春祝ふ破魔弓も千年を我子へゆづりはと人ももちあゝの鏡より幟畫  
の尉と姪も猶いつまでかいきの松是も久しき親心のまよいなるべし或は髮置袴着なんど光陰は  
鐵炮のごとし淺之進七八歳の頃より寺入の初清書人の親の心は闇にあらぬとも子を思ふ闇に眞  
黒な牛の角文字ゆがみなりも器用な手筋と譽そやし早そろ／＼と大學は孔氏の遺書にして初學  
徳に入にも出るにも人を付置なをざりならぬ養育にまた生性勝れたれば人心付頃より洒掃應對  
進退の節も年よりはおどなしく弓馬の道は云もさらなり立花茶の湯鞠揚弓詩歌連誦を始めとし  
て其餘の藝能ぬけめなく十五歳に成ければ父母つく／＼と思ふやう佛に祈て産たる子といひ又  
かく人に勝れて發明なる子は必ず短命なるものなり其後は不思議にも二男三男の出來たるこそ  
幸ひなれば何とぞ此子を出家せば自ら長命なるべくまた先祖の菩提をも問はせんと其よし  
くと告ければ左のみ望にはあらざれども父母の命もだしがたくそれより世々の旦那寺なれば光  
明院といへる寺へぞ遣しける淺之進は稚心に思ふ様我好く出家せんとにはあらざれども父母の  
かく宣ふは偏に佛縁のなす處なれば此上は一筋に佛法の奧儀を極天下の名僧と成て衆生を濟度  
せんものと日夜朝暮佛經に眼をさらし行住坐臥の勤めおこたらず學問の外餘の交は夏の夜の  
花火見に誘れてそ俗人のたのしみまささに電光石火のごとしと悟春は飛鳥山の花盛もむれつゝ人

の來るのみぞあたら櫻のどがには有けりとつぶやきて雪を寄瑩を集るこそ古人の心なんめりと  
獨竹窓のもとに日ぐらし硯にむかいて見ぬ世の人を友とし四方の氣色うら／＼かに春まり顔に咲  
亂たる庭前の桃の盛なるに仙境の趣を思ひ出つゝ餘念もなき折から軒に巢をくふ燕の窓より  
内に飛入つゝ机の上におり居たり淺之進は身を動かせば燕の驚かんとひそまりて見る内に彼  
燕机の上に卵を一つ産落て何ちともなく飛行けり淺之進は卵を取上げ巢もあらば入なんと思ふ  
内彼卵二ツに破て中より人の形したるものぞ出たりける昔し竹採の翁が竹の中より取り得たる  
赫奕姫の類ならんかと打守て居る内にすく／＼とおほきになりまさりて忽ち能き程の人になり  
て其形のけそうなる事世に類なく玉の顔縁の眉三十二相の形を備淺之進を見てゑみを含めば  
覺えずも心どろけて醉かごとく彼美女は志づ／＼と庭に立出顧て淺之進をさしまねく淺之進  
も庭におりたりけるに彼女手をたづさへいとまづかに假山のあたりへ歩行咲亂れたる桃花の下  
石なんどのありて其中に小き穴の有けるが其穴の中へ伴ひ行たり此穴上より見たる時はわづか  
五六寸の穴なりけるが行く時はまた人の身の通ふべき程の道とぞ成たり行くと十間あまりにな  
れば其内平にして犬鷄の聲なんどのほの聞えてさま／＼の木草生まげり梅か枝に木傳ふ鶯あれ  
ばかたへには卵の花の垣根いと白く雲井には子規のおどづれ紅葉に鳴小男鹿の聲或はまた川風  
さむし千鳥のむれ居て雲の降しく處もあり四時の花實時をあらそひ砂の色も常ならず行水の聲



までも其清々たる事また有べきにもあらずそれより遙歩行はるならぬ句ひの薫來て管絃の聲  
 ほの聞えつゝ玉をかざれる櫻閣あり金銀の砂を敷き渡し瑠璃の階馬腦の欄干また譬ふるにも  
 なし淺之進は此處に至りて少し猶豫し居たれば彼美女かく來れどて先に立ち幾間ともなく廊下  
 を傳ひ行き一問なる所へ請じ入りけり數多の美女立かわり茶の給仕しつゝ様々の菓子など  
 出すを見れば何も初め卵の中より出たる女にもまさりてあてやかなるに思ひくゝの繡していと  
 きらびやかなる衣類をかざり立かわり入替りて出る度に酒肴の數々善盡し美つくし今様をう  
 たひかなで或は美なる女の來て手を取り足をさすりつゝひとかたならぬもてなし淺之進は興に  
 乘じ思はずも酒をすむして美女の膝に打もたれどろくどまどろみけるか暫して目を覺しあた  
 りを見れば今きて有つる美女の姿も酒肴も宮殿もなし扱は夢にて有りけるかと打見れば松柏は  
 枝をつらぬ岩にくたくる溪水の音のみして我住し寺内の鉢にもあらず扱は狐狸の爲にまどはさ  
 れしかど茫然としてなかも居たる處に一むれの雲下りて中よりあやしき姿せしもの木の葉を以  
 て衣とし頭には巾をいたしき左に藜の杖をつき右に羽扇を持って淺之進をさしまねき善哉く汝  
 教へき事ありて我仙術を以て招寄たり少しもあやしむべからずとて近寄るを見れば形は左なか  
 ら老人めけども顔色は玉のごとく年の頃三十歳に過ず髪黒く髭長く目の中さわやかにして威有  
 つて猛からざる姿なれば淺之進はひざまづきて是を拜す其時仙人告て曰汝元來生れつき衆人に

勝れたるに父母佛法にとら加され出家させんとする事金を泥中へ抛がごとし我是を救はんが  
 ため汝を爰にまねけりそれ佛法は寂滅を教とし地獄極樂など名を付て愚痴無智の姥噺を教ふ  
 る方便にして智ある人を導くべき教にはあらず人は陰陽の二つを以て躰をなす譬は石と金とを  
 まり合て火を生ずるがごとし火の薪ある内は人の一生のごとし火消ゆる時跡に殘所の炭は即ち  
 死骸なり其時消たる火地獄へ行や極樂へ行や汝此行衛を知らば地獄極樂有とすべしと淺之進手  
 を拍て大に悟て曰先生の教を受て是までの迷途豁然として夢の覺たるがごとし今より出家の志  
 を止べし志かれども人世の中にありて只草木と共に朽果んは本意ならず願くは先生我に業とす  
 へき道を教へよ其時仙人羽扇をあけて曰汝能我言を信す今我身の上と汝か生涯を示さん我は其  
 昔元曆年中の生れにして源平の戦ひなどは稚心の耳に殘漸く天下治て鎌倉將軍政を専らに  
 し諸人太平の化をたのしむ我は片田舎に長けるがつくくと思ひめぐらすに高祖は三尺の劍  
 を提げ漢朝四百年の基をひらき相將豈種あらんやとは楚の陳涉が詞なり今諸國の大小名を見る  
 に頼朝義經の驥尾について匹夫よりして家を起すもの少からず家は治世に育たれば劍戟を起さ  
 んは天にさかふの罪あり然らば藝を以て家を起さん事を思ふ志かはあれども世の俗人の藝と稱  
 する茶の湯は古茶碗竹べらなどに千金をつひやして四疊半の氣づまりに手づからにじり込の  
 草履をつかむ事大丈夫の業にあらず立花は一瓶の中に千草萬木の趣をこむるといへとも釘にて



打付はりがねにてため直す事自然の風景にあらず碁を打ものはならべて崩くづして並其智三百  
 六十目の外に出ず此人死しては西の河原へ行て一目打ては父戀し二目打ては母戀しと地藏并の  
 袖にすがりて獄卒の鐵の棒をうらむとかや將碁は軍のかけ引なりといへども韓信孔明將碁をさ  
 したる噂も聞こへず今 試に將碁の上手に採配とらせて軍させば敵の龍馬に踏殺され桂馬の高  
 飛歩兵の餌食となるべし香を聞ものは鼻を以て天下を治むるがごとき顔を志かめ沈外息脈の  
 極秘を極め聞香悉能知と高ぶるとも高が無用の翫六國なんど、文盲第一の名目を立る事片腹痛  
 と之楊弓は百射て五百中たりとも鼠を射る足にもならず鞠が上手なりとて腹の減と金出して色  
 よき裝束着るより外に能なし尺八の名人が女郎の尻に詩繪置たるがごときやさしき聲を吹出し  
 ても敵討に出る用意より外何の役にも立ざれば齒のぬけるだけの損なる鼓のヤツハア太鼓のテ  
 レックスツタン〜とんと上手に成おふせても耳へ入てぬける間の樂にて名の不朽に傳ふべき  
 にあらず其外俗の藝と云は皆小兒の 戯なり只人の學ぶべきは學問と詩歌と書畫の外に出ず是  
 さへ教あしき時は迂儒學究とて上下を着て井戸をさらへ火打箱で甘藷を焼き唐の反古にまばら  
 れて我身が我自由にならぬ具足の虫に見るごとく四角八面に喰まばつてもない智慧は出されば  
 却て世間なみの者にもおとれり是を名付けて 腐儒といひまた屁びり儒者ともいふされば味  
 のみそくさきと學者の學者くさきはさんくのものなりとて又是を見破たる先生たち宋儒の頭





巾氣とどなへ出せし卓見も角を直さんとして牛を殺其末流の木の葉儒者には猪牙に乘てひちりきを吹三絃に唐音を乗せ甚しきに至ては天下を運す 掌の内にお花とやらをめぐらす言語同断の學者も有るよし是皆中庸を知ざると鼻毛をぬかざるより起りたるたはけなり唐は唐日本は日本昔は昔今は今なり三代といへども禮樂は同じからず立て拱するが禮なりとて今貴人の前て立れもせず聖人の政なりとて井田の法を行はば百姓どもには安本丹の親玉にせられなんまかれども不學無術にてはもとより行くべきにあらざり只墨かねを能く覺へて手の利たる大工と鍛のよひ刀を能く研たるにあらざれば大功はなしがたし我もまたなまくらならねば鎌倉に至て人間の益をなさんと裏店の淵に身をひそめ鰻鰻泥鰻と同じ様にぬらりくらりと世を渡つてつら／＼世上を窺ふに平家西海に沈て後上下太平の化にほこり賢者あれども登庸ことを知らず北條梶原に傳なきものは位に進事あたはず大江秩父などの賢諸侯ありといへども近寄らんとすれば左右の俗士賢をいむと甚しく其餘和田佐々木土肥千葉以下は 自紅白粉をぬりて狂言綺語の戯イヨ市川の殿様とほめられ或は大磯小磯より女妓なんど召抱晝夜を分たずサツサセ／＼おせゝのかば焼ぬつべりとして 和な譚諧面談の者にあらざれば左右に近付く事なく種／＼のおどり日々に長じ内證はいすかの嗔悔て返ぬ家走用人興も明日もさめるに早ひ藥罐天窓を打ふつて三人寄ば文珠の智慧百人寄ても出ぬは金なりさすが人がらぶつておとなげなく無間の鐘もつかれ

ずお出入の金賣橋次に塵をひねつて頼の老るし一の谷屋島の軍に命を的として奉公したる譜代の家來も格式有てめつたには賃はれぬ虎の威を借る定紋付を狐狸が着すれば左ながら上下のわかちも見えず其時代に流行ものは坊主金もち女の子三絃やうるりたいこもちの類なれば和氏が壁の夜光なるは知らじと我もそれより世を通山林に隱木の實を食して餓々志のぎけるがいつとなく仙術を得て飛行自在の身となり風に任するからだなれば自ら風來仙人と號して五百餘年の星霜を経たり今の世の風俗は知らねども汝出家を止たりとも必ず／＼藝能を以てほこる事なかれまた誠の道を以てするとも却て俗人近寄ざれば後には世を捨るか世に捨らるゝの外には出ざるべければ只東方朔が昔を追ひ滑稽を以て人を近寄よく近く譬をとりて俗人を導くべしと此時淺之進進出て申けるは謹んで先生の教へを受しかれども我若年にして人情に精からず此事如何してかしかるべき其時風來仙人手に持し羽扇をあたへて曰是は我仙術の奥義をこめし團扇なり抑此團扇を以てあをげば暑時は涼風出で寒き時は暖なる風を生じ飛んと思へば羽どもなり海川にては船どもなり遠近を知る幽微を見る身をかくさんと思へば忽ちに見へざる奇妙奇代の重寶なり是を以て天地の間を往來し諸國の人情を知るべし只人情の至る處は色慾を第一とすれば

を經る内には面白き事かなしき事

れども必ず／＼苦とばし思ふべからず汝が修行成就して再此土へ歸りし時また對面をなすべ



しさらば〜といふ聲は障子に殘風の音淺之進は忙然と光明院の窓の内に寐るともなく覺ともなく机にかゝりてもとのごとく坐し居たるに側を見れば彼の夢中に授りし羽扇ばかりぞ残りける

風流志道軒傳卷之一終

風流志道軒傳卷之二

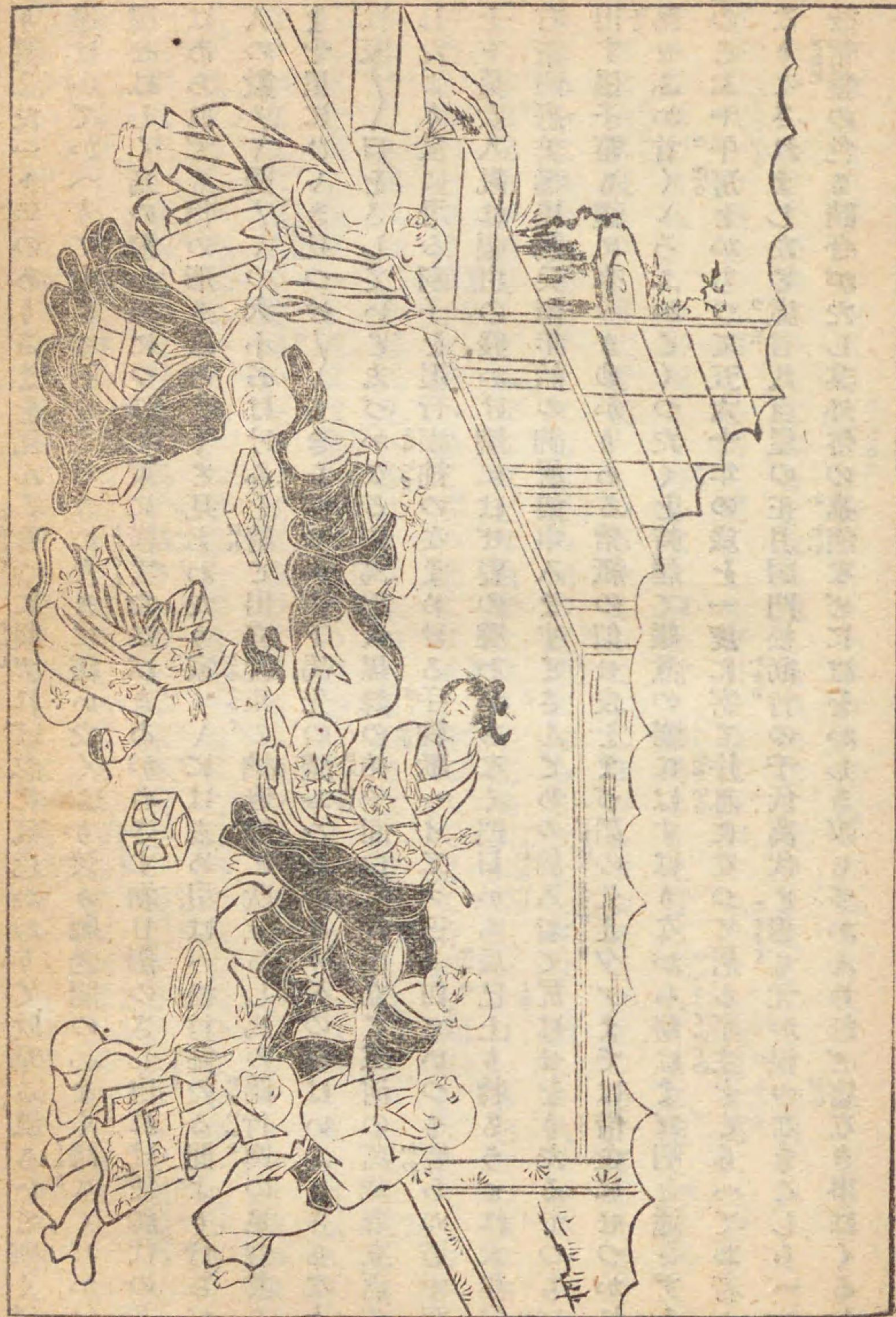
淺之進は光明院に有てつく〜思ひめぐらすに彼風來仙人が教の詞一として理にあたらざる事なく其上暫寺に居て諸家の風儀を試に何れの出家も表をかざり錦繡を身にまとひ人もなげに高座に登口に説ところは衆生を導往生の素懐をどげしめんと極樂の店請にも立やうに説ちらせば愚痴文盲の同行どもはわた持の如來様と信仰し金銀財寶をなげ打ば御殊勝にとばかりにて忝ともいはねども心の内には笑を含其金つかふ胸算用はすれども佛の恩さへ思はずあげ法事頼て來れば名聞の盛物も人の見る方は飭れども佛には卷葉ばかりをかざませ剩むしがへしをくらわせ朝晩の勤も随分外へ聞へる様に鉦も高くは叩ども砂かむよりは老ゆつない念佛金持は金遣はず錢もちに錢遣はず髪結我髪結ず辨當もち先へ喰ずとりあげ姥子を産ず風呂焚は垢だらけけんどん屋飯を喰ひ箕賣は笠てひると醫者の不養生坊主の不信心昔よりして然り出家もと木のまたからも出ず旨ひ物の旨ひと面白ひ物の面白ひは皆同じ事なり椎茸干瓢長芋蓮根南無阿彌豆腐の油揚にて中〜心にたらざれば柔和にんにく葱ぞうすいむき玉子松魚の雉焼厭離江戸前大かば焼鮓本不生の早鮮を老んばら腹のはれる程に取込八切徳水のあつがを引かけ雑修自力の心をふり捨只一心に女郎狂ひ沙汰戀慕の闇に迷弘誓の船の四ツ手竹輿内には念彼觀音力刀刃段々



通へども本来無一物の客なれば女郎は見立花はくれなみど若イ者にもうるさがられ或は薬師の  
 瑠璃の壺入おんころ／＼と蹴ころばし眞如の月のまん丸な比丘尼の頭巾うば玉の鬮より鬮に迷  
 ひ入それも若きはまだしもなれども額に歳の波をよせ眉に八字の霜てにとりつめたる老僧の寺  
 内に弟子は多けれど魂廓に入ぬれば一人もともなふものぞなきされば世の諺にも落そふて落  
 ぬものは二十坊主と牛のきんたま落そもなくて落るものは五十坊主に鹿の角是はまた足利時代  
 の譬にて今は只老ひたるも若きも貴きも賤きも野分の枝の熟柿にて一ツも落ぬはなかりけりた  
 とへ堅固に守たりとも顔陀の行乞食に似たりと淺之進は悟をひらきかたへに有合ふ筆をとり  
 て

のがれんと思ひし道のくらければもとの浮世に有明の月

と墨くろ／＼と障子に書付彼仙人より授し羽扇ばかりをたづさへて光明院を忍び出髪結床に至  
 て元服しつゝ住べき處求んと方／＼とさまよひあるきけるが駿河臺のわたり小高き所にまばら  
 なる庵の有けるを主に頼ものしつゝ此處に假に居にけり淺之進は庵にありて四方の氣色を打な  
 がむれども立つゝきたる家居の敷／＼ひきは高きにあゝわれ或は雲烟のたなびきてさやかに  
 は見へ分ず爰にてぞ彼羽扇ならんと取出しつゝ移し見るに南は品川北は板橋西は四ッ谷東は千  
 住の外までも手に取ごとく見へわたりまらみの足音蟻の呟まで聞ゆれば初て羽扇の妙なる事を





まり猶また一ト年のありさまを見んと暫心に観ずれば忽に氣色かわりて吹來る風もいと寒く道の邊はいてかへりて土とも石ともわきがたきに霜いたくふり渡り師老闇の心なく暗もくたかけの聲せはしく鳥の飛かふにつれて東に横雲たなびきあかねさす初日影のさし出れば彼神代の昔にはあらねども物の形もまろく見えわたり家くには志め引はへ松竹飾たる間より行ちがふ人の數く國くの大小名はけふを晴と出立装束の袖春風に吹けらし馬の蹄竹輿の足音其こたま十里にひいき見つけくもきらびやかに下馬先の禮おごそかなり公の事はいふもさらなり町は家く戸をさしていとまづかなるに鳥追大黒舞の拍子面白く皆出立て三河の萬歳春立返るあしたより嵐に逃る羽子を追行振袖のなまめける手鞠歌一イニフ三イ四フいつも髪らぬ道中双六上下男女入亂れ福引の錢かけ鯛にはせ賣の聲わかちなく門口から辰巳上り物もうどれ大黒屋樋右衛門惠美壽屋鯛兵衛年始の御祝儀申入ますとさんどめの縮入着て尻はせをりたるでつちが差出す扇子箱も禮に來べきゆかりある紫紙の似せ皮をまづ詣の先走夕アまでは借金にせつかれ欠落せふか首くろふかどくつたくを持越て雑煮の膳にはすはりながら餅はまだ咽を通さず上置のこぶや午房をかぢつて五六十の歳を一度に寄て片息になつて居る亭主をとらへてお若ふおなりなされましたと虚言八百屋の正月詞門松飴竹の千代萬代と壽も元が根のなきこしらへも故常盤の色も請合がたし其外俗の嘉例などにはをかしき事も多かんめれど害なき事はくるし

からず但古人の詞にも一日の計は朝にあり一年の計は元日にありとは其本亂て末をさまりがたきをいふわけて初春は一志ほに心を改め悪しき事はなすまじきことなるに正月といへば童までが寶引穴一の類をする事と心得て親くも寶引せねば蚊がくふとやら馬鹿律儀におぼえこむにはあらねども人くの好所より埒もなき理を付て稚時より見習ば成人するに隨て御器用なる御子息達勘當帳につく事は皆親くのあやまちなり二日からは初芝居金元の勢は屋倉太鼓のひいきにあらはれ太夫元の手まはしは幕の間の遅速に知らる故をたづねて新しき八百屋お七に取ませし曾我兄弟が敵討くどふ云はねど其由來は葛見宇佐美河津の庄三ヶ日から七日の賑ひ飯糰に笑出されて七種の拍子を違へ帳どちの祝には錐を囊に入た様な番頭も活氣を出し大盃の酔が廻り上書の大福入が三十程に見へるはもうけの有前表となんぼ酔ても數は忘れぬどう慾なくだ巻舌に同じ事を幾度か十五日は綱引粥杖爆竹の煙空にきへて行衛も志らぬ奉公人もやぶ入小袖の花やかなるに裏店の露路かやけば風流の若い者は魂のあり所を知らずコリヤマタ組がはり込もいまくしい程美しいと云れぬ世話をやき餅も齒にこたへて來る時分はもふのらつきも廿日正月柳は色を含梅は香を吐出す鳥の囀さわやかに東風吹空の長閑なるをふりさけ三輪の神ならでいとゆうくと吹すさむ八巾の數くは天をいろどり垣根には菘蒲公英の花盛なるに隣の焼泡もうかれ出し涅槃參の珠數袋に臍くり金の底をたき彼岸といへば只だんごのみ覺たる



もをかし白酒賣の聲春めきて十軒店のわたりどよみ出せば菱餅のこしらへいそがしく鶏合の人  
 たかり沙干の蛤またふみも見ぬ尼法師まで梅若參我一とまつさきの田樂も焼野の雉子ほろゝ打  
 昨日今日と移行飛鳥山の花盛に染井のつゞじ色を争ひ毛氈の虹道にたなびき掛香の匂ひは草に  
 残る紙乗物の志とやかに繫馬の不遠慮なる聲色淨瑠理のかまびすしきなま酔の腕まくりと未熟  
 なる詩歌發句にあたら櫻を穢さんよりは只友どち打むれて靜なる所に酒酌かはしたるぞ越なふ  
 奥ゆかしと見ゆ或は其日も暮方の臘月夜に敷ものもなく獨樂の樽枕にいかなる夢を結かは志ら  
 ずいびきの聲の聞ゆるはもぎとふにてまたをかし御影供の參を頼に江戸の田舎の片ほとりにも  
 煮賣店の立つく大師河原のにぎはひ世は空海とぞ知られたり程なく卯月は衣更佛の産湯の時  
 も過初松魚の賣聲高く子規啼や五尺のあやめふく飴兜幟の氣色空には五色の雲ひるがへり粽  
 柏餅のおとづれに蒔繪の重箱はせちがひ夏の氣色を荷出すはんじ團扇漉團扇あをげばいよく  
 高荷の蚊や賣水雞のたたく頃より五月雨の降つゞきて衣類に微もみな月の氷餅氷室の便不二祭  
 の群集の足にこみ踏立れば麥葉龍も雲を起すかと疑れ火花の盛は兩國を照し船は水をかくし人  
 は地を覆空にも戀は天の川星の手向のいと志ほらしく琴の爪音かきならず十三日より盂蘭盆の  
 苧がら蓮の葉瓜茄子に懸乞の入みだれ 聖靈祭生身魂郭には燈籠にさまゝの美を盡入朝の白  
 妙に約束の客待宵より月見のさわぎすかゝきの上づり客人がらには人形まはし隣の趣向もうそ

ならぬ本田組の一むれがまけぬ氣の河東ぶし聲の響は山彦のばち音も清見八景皆こがれよる船  
 の内人の心も浮瀬に里神樂三番叟目出度鈴をまいらせふと臺の葡萄に牽頭が口合客の羽織を萩  
 の花芒のやうな目はすれども心の慾の穂に出る花車やりて若イ者さまゝ口を菊月には九日の  
 節句後の離十三夜の月見には我朝の風流を増中菊の盛なるには澁谷の隱居か物好を傳ふ目黒の  
 餅花神明の生姜市亥猪十夜の時も過れば御影講の飴物は錢とらぬ見せものゝごとく惠美壽講の  
 百萬兩は商人の虚言をかざる顔見せの先ぶれば番附賣八方へ散じ芝居の挑灯はそれゝの紋を  
 照す帯解のすそ長ゝしく報恩講の尻もつたておの字を干ほど云ならべる口切ふいごのまつり  
 なんども事終て乙子の餅祝ふ頃より雪霰なんどまげゝにふりまさりて風は身をそくがごとく  
 なれば富ル人ゝは冬籠の巨燧に藥喰の用心するさへ手水鉢の檜杓も氷にとぢられ軒の氷柱は  
 劍を逆に植たるがごとくなればあつから寒氣にあてらるゝに其日のいとなみ事志げき者は  
 さまゝの業に雪氷をもいとほす西を東南を北と立さはぎ手足にはひいあかぎれ我身を損ずる  
 をもいとほす或はつよき力わざする者なんどはかゝる寒時にさへ肌をあらはし汗をなかしわづ  
 かの價の爲に使はるゝ下さまの世渡を貴き人は思ひはかるべき事にぞ有けるわけて煤拂のそう  
 ぐしき布子の上に單なるを引はり常は事たらぬ道具なれどもかゝる時は多きやうに覺ゆるを  
 手ゝに持はこびて御萩は屏風の内に鎮座ましゝ持佛は半櫃の上に來迎あり用にも立す捨る



にもをしかりしものなんども溢紙しよかみに包込つひかこれ久敷見へざりし器うつわなど物のそこより出たるも嬉しく  
 または全道具まづたぎを持つはこぶとて損そんじたるを我は知らぬなんど、下部はどがをゆずり合疊たみのこみも  
 たしき仕舞まじりて諸道具も片付たるさま左ながら清きよらには見ゆれどもからだを見れば手足も鍋なべの底  
 なんだのごとく目計めかきよろつきて鼻の下の一志いちしは黒もをかしく追々湯ゆに入て後初てもどの人  
 間になりたる様にぞ覺ゆ次第に曆も人の心もせまりて道行人の足も跡から追來る人も有やと見  
 ゆるばかり町々には賣物の山草折敷やまぐさほんだはらば板何やかやかちぐり淺草市の人だかり節  
 季きぞろのせはしなく餅つきのかしましき中にも親出合おやしあの年忘拳酒としわすれけんさけの九十きゅうじゅうめつたに手をひろげ  
 ても義太夫ぶしの五段目大三十日までかたりつめては八人藝やくでも間に合あはずソリヤ獅子も浮うて來  
 ず掛かきは皮財布かわさいふを膝ひざに敷ひて達磨だるまのやうな目をむき出し九年面壁めんぺきの居催さい促そくあてはなくてもまだ寄  
 ぬどの一寸いっすんのがれ此時このときに至いたては愚おろなるも富とる者はさかしく見みへ賢かしこも貧みづかしは愚おろなるが如ごとし節分せつぶんの  
 狗骨鯧いぬぼんちの頭も信仰しんぎやうからとはいへども豆まめに逃にる鬼おにならは來りたりともまた何事なにごとをかなさんやく拂  
 の西の海は十二文じふにぶんの惡事災難あくじさいなん有ありたどて邪摩じやまにもならじ惡夢あくむを喰くふとは云傳いひつたれども模まの糞ふんを見た  
 者ものなく家々いへいへに敷ひては寐ねれども寶船たからぶねに船大工ふねおほくもなしと思付おもひに形かたちを畫かけて身勝手みかたてばかりの心こころやりな  
 り一年の内には千變萬化せんべんばんくわの世渡りもつまる處は金といふ一字いちじに歸かへり人慾じんよくの私ひそに使つかるゝが故ゆゑなり  
 と淺之進羽扇あさひのしんうせんをなぐれば有あり駿河臺しゅんがたいの庵いほの内に焚懸たきかし飯いひのいまた熱あつせさる内うちなりければ益羽扇えきうせん

の妙たぎを感じかんじ彼風來仙人かかぜらいせんじんの教をにまかせ是より日本にっぽんはいふに及および唐天竺たうてんてくより諸の外國がいこくまでを廻めぐり見  
 んとぞ思おもひ立たけり

風流志道軒傳卷之二終



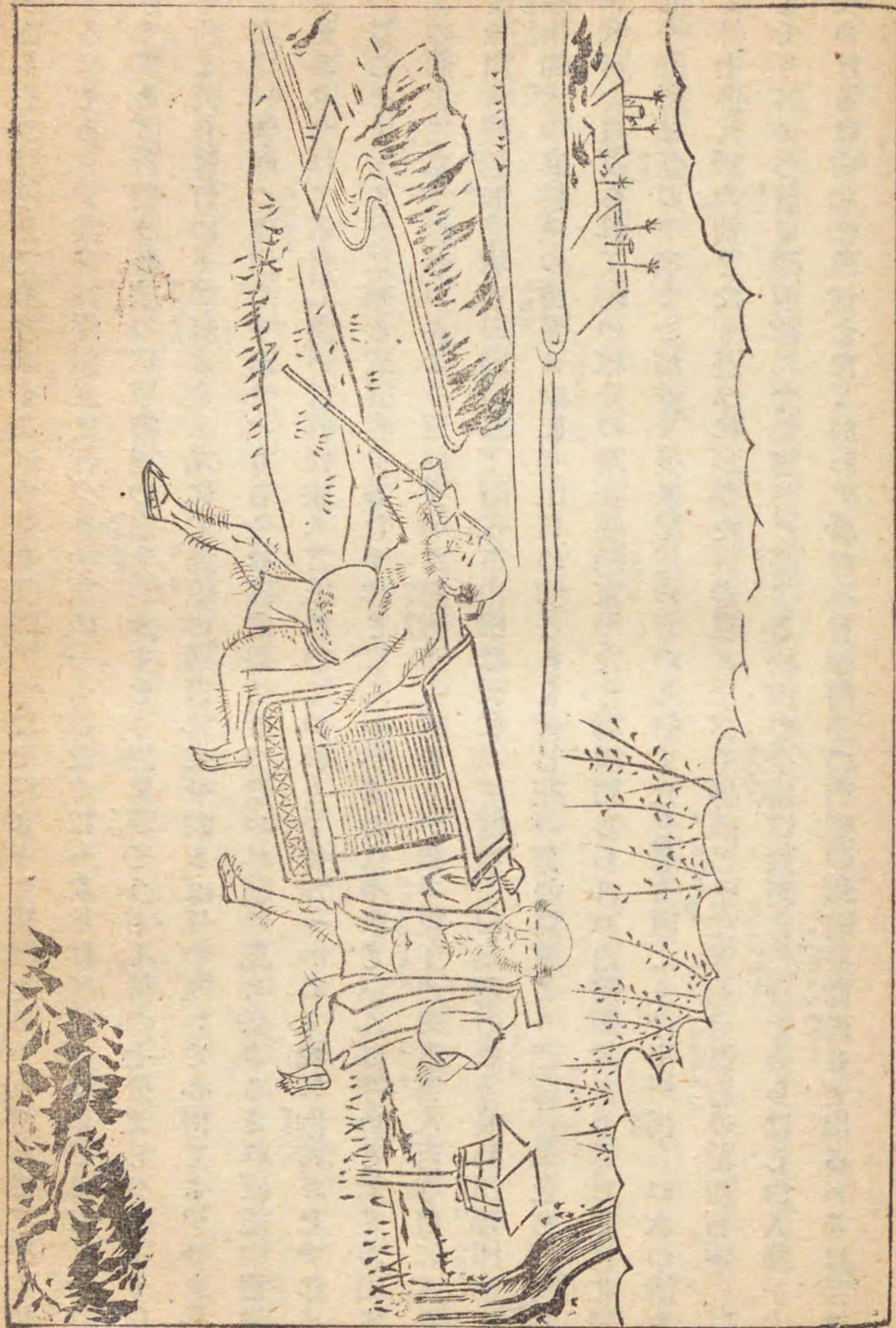
風流志道軒傳卷之三

天神七代の始は男女の道を志らざれば男色ばかりをたのしみて甚だ窮屈なる世界なりしが伊弉諾伊弉册の二神天の瓊矛を指下してめつたむ志やうに滄海を探しかば其矛の鋒より滴瀝る潮凝て燒鹽となる是よりしてからき浮世といふ事始ける此時始て合交せんとするに其術を志らず時に鶴鶴飛來て其尾をひこく揺を味噲豆に研槌播盆始て交の道を得たりと今時そんな野夫な事にはあらず出物のとぢ目に生ずる白魚肌着の縫合の花見風までいきとし生るもの皆陰陽の形あり形有て後此交をなすと天然自然の道理なれば其後の若イ者はつがもない脊令ぐらいを先生には頼ず去程に淺之進は駿河臺の庵を立出何心なふ通りけるにかたへより竹興やろふの聲くを聞流して打通れば跡から類かぶりせし男ちよこく走にて追掛小聲に成て旦那土手まき乗ふの乃の字を半分聞とソレ棒組といふ間もなく竹興すへる垂かき上るコリヤサの掛聲はさわたる雁が洋漕船ふらりく居眠の寐耳へはいる暮六も鐘は上野か淺草を過る間もなき千里一はね是も偏に通ふ神の竹興よりをりてすそ打はらひ少し繕ふ衣紋坂まだ知る人も中の間茶屋が内に着ければ夫婦は縄でにわかのもてなしソレお茶よ煙草盆今日初ての客なればどんな

加減か白魚の吸ものに柚子の匂ひはかはらねど外よりは何となう酒も一入味よく亭主は機嫌取肴にみせの出るを待合の辻色の上下の境町見るも殊更京町から新町より河岸の邊までぐるりと廻りてすみ町は遊びの時を江戸町と口合まざりに見渡せば行かふ提灯下駄の音格子の内の燈は晝よりも照かやける縫箔の伊達もやう銘くたばこ盆に指向ひ思ひの烟くゆらせつまたは多なんと書る躰ゑりの白きにいたづら髪のみかゝれるもおくゆかしく何かは知ず隣どちの咽合たるも心にくし人の心を引立る三絃のいとかしましくは思へとも何となう心うかれ此界の人ともおもほえず雲の通跡吹とちて天津乙女の姿ならんと何れを見てもみにくきはなく又それと定んと思へば是ぞと思ふわいためのなきは目のうつろひならんと後には却てそこくに見極る一夜流の縁結は出雲の神の帳付るにもさぞいそかしくや有らん遊びの趣向園の振舞手くだこんたんやりくりのもやうは事古にたればいはず二度目に行を裏返すとなんいへるは塗工よりいひ出し賣かえるを鞍かへなどは古詞もあるなんめれども只伯樂の詞に似たり二度よりは三度五度よりは七度段く面に面白く願愷之が甘蔗にはあらで漸佳境に入たるを粹といひ又通り者といふされば女郎買と灰吹は青い内が賞翫とは近松が名言なりと淺之進は吉原を立出男色を試んとてそれより堺町へ至けるに是又別世界の一風流金剛が挑灯には名代の紋を先にてらし大振袖の羽織戀風に翩翩とひるがへり見し編笠の内ぞゆかしき紫帽子は舞臺へ出るゆるしの色となん人の物



好は面の異なるがごとくなればこそ稚あり長あれどもそれくの相手あるが中にも四十過ての振袖類鬢の跡青さめたるも見ゆ是等を翫人は好の至れるなりと自味嗜は上れども火吹竹のあえものは筭の和なるにはまかじ木挽町に引るゝ客は身代は大鋸屑のごとく神明參の歸足は本地垂跡の兩道になづむ湯島の二階は千里の目を極英町の向側は隣よりもまた近しよこれをふくかやば町眇眼もまじる神田の明神外になければ市ヶ谷の八幡前天満神のあたり近き室咲の梅手折んと麴町には寐るをたのしむ土氣の取ぬ土橋より一ツ目山猫なんといへるは左ながら化物の名に近し莠の苗を亂り紫の朱を奪ふ所かはれば品川の風流女護か島の辻番かと思ほゆる看板に偽有磯海深川のびんまやんも度重れば飴のごとし和で齒に付ぬ大根畑の居つゞけには地黄丸の功を失ひ皺が橋へ走ては親つぶのにらみをうく鞠のつまる鐘撞堂借た跡での板橋より千住といへば観音めける萬福寺の戀無常朝鮮長屋の異國くさきいろはぢゝ谷世尊院人を引出すおたんす町八まんたまらぬお旅のさわぎ三味の音じめの音羽町かたり明して夜を根津の東の空も赤城より暗に逢ふ藪の下通ふ足音高いなり愛敬稻荷の狐より化ぞこなひの市兵衛町水の氷川の寒空はふるふて通ふ胴坊町丸山の丸寐姿新大橋のながしき三十三間どうよくに又も一座を直助屋敷出る舟あれば入舟町石塙につくだけころばし踏返したる丸太の名物立ふとふせふと錢次第舟饅頭に餡もなく夜鷹に羽はなけれどもみなそれくのすきはひは鳶飛て天にいたり魚淵に





をどり子の氣色まで殘方なくながめ盡せば淺之進はそれよりも諸國をめぐり遊んとして旅の用意するにもあらず其身其儘出立て行つき次第の一人旅たくはへなければ盜人の氣掛もなく勞れは休やすめば行物うき旅の忘草宿屋の出女がふすそり顔に葛どうどん粉の七分ましつた下り白粉を所またらに打ぬり頬紅はまん丸にて那須の興市に見せたらば日の丸かと心得てよつひき兵とはなつべき顔つき出して志やべりちらせば大象も能つなかれ秋の鹿も必よるされば道中宿屋の女をおじやれと名付し其いはれば旅人其家に泊つれゝにたへかねて晩に伽におじやれといへばこそゝと寐に來る故其名をおじやれとなんいへるお志やれといふは來いと云とお出といふの間に來やれといふより三四文かた懸歎なる詞なりと葉平東下の記虚言八百卷目に見えたり金川大磯御油赤坂吉田岡崎二丁町古市山田は云に及ず浦賀下田鳥羽あのみ長島田部印南には腰掛加太の立柱色の淺多き中にも出口の柳こきませし花の都の島原より祇園の氣色宮川町繩手に我身を志ばられて跡の紋日の請合も約束かたき石垣町あらぬ内野新地よりさわぎに北野七間の隠所は藪の下鳴でこがるゝ螢茶屋尻の方から灯す火を暮る頃より今出川濁らぬ水の清水坂二條七條八坂の前またも遊びにかうたい寺嵐になびく柳風呂壬生天龍寺御靈の前西石垣のはてまでも其よし蘆は難波津に今を春べと盛なる松梅の全盛は新町に色香をあらはし白人藝子の今様めけるは南北に風情をたゝかわすねたみ曾根崎島の内戀の坂町登詰隠せと出るいろは茶やち

りぬる客をつり寄る目もとの鹽町こつぱりとたまらぬ味の安治川に深くはまりし堀江大露地次第に高津新地より我を忘て神明前何ほど廣きのと町でも柳小路と身はせまり何と志やうまん一家には七里けんはい八軒屋我身の難波新屋敷れいふ尼寺真田山浮名をかふる編笠茶屋穴に間近き臍が茶屋六十四文あり合町せうゆうじ福せんじ裏ゝに住夜發の繁昌そふじや堺に千鳥より奈良の木辻に登詰ては身代をたゝき込撞木町から墨染の花なき枝の柴屋町室津の泊鞆おのみちみたらいからうと上の關行來のなまりにはさりとは安藝の宮島に太夫の全盛後から指懸られし鶺鴒の渡せる橋におく下の關戀に跡先去らぬ火のつくしに遊ぶ浦ゝは博多鳴子に馬の庄異國の人にもまるれば角のとれたる丸山にちんぶん寒國ふりつもる雪のはだへをあらそふて三國新方出雲崎敦賀今町金澤より出羽には坂田かうやの濱津輕に青森やすかた町陸奥にもとめや八丁の目松前のゑさしまで諸國の風流をなかめつくせば淺之進はいざさらは是より外國を廻り見んとて彼仙人より授し羽扇を以海中に入其上に坐しけるに左ながら大船に乗たるごとく蒼海漫々として浪は白馬の走かこどくなれども羽扇の妙あれば海水すこしも衣をぬらさず數日食せされども餓すいづくともなく行けるかどある島にぞ着たりければ羽扇を取て陸にわかりそこよこよとさまよひけるにいと大なる家の見ゆるを目あてにしてたどり付ば淺之進を見付て多くの人立出るを見れば何れも身の長二丈あまり脊におふたる子の形も日本人より大なれば是こそ名に



あふ大人國ならんとは思へども一向に詞通ぜざれば互に手を出し口を教なんど様／＼の仕方志てもわかつべふもあらざれば淺之進心付て彼羽扇を耳に當れば大人の詞も通じ口にあて、物をいへばまた合點するさまなりければ其後は互に詞の通じ合我は日本の者なりなんど語けるに様／＼馳走に大人のもてなし二三日も程経て後遊山に出よと竹輿に乗せて人立多き處に芦籬にて四方をかこみたる假屋の内へ伴行臺の上に淺之進を乗置をかしき形せし笛太鼓のなりものにて拍子取生た日本人の見せもの手に入て這す様なちつばけな美男作物こしらへものとは違ふて生の物を生で見せる御評判／＼と高聲に呼ばれば老若男女あし合せり合引もきらぬ人群集皆／＼指ざし笑ふ躰淺之進うるさく思ひ如何はせんと案じけるが爰にこそ彼羽扇ならんと天に向て仙人を拜し羽扇を以て飛立ば小屋の屋根をつき破て雲井はるかに飛されば大人どもは月夜に笠おのちの口／＼に是まで日本人の飛行する事聞及ず是は定て日本に澤山なる天狗にてやあらんといへばさればこそ羽扇を持たりまかし鼻は小さかりしなど思ひ／＼の取沙汰一人の大人が曰諸國廻る天狗なればこそその色里にて鼻は落したるにそ有んなど評定しても埒明ず夫よりも淺之進は羽扇にまかせ飛けるが加すかに島の見えければ其所へそあり居たりける此處は小人島にて人の大き一尺二三寸に過ず一人歩行ば鶴に取る、故四五人連にてあらざれば通得ざる程小さき國にて有ければ淺之進を見てみな／＼恐おのゝき戸を閉て出されば見すこしてなん通りけるに

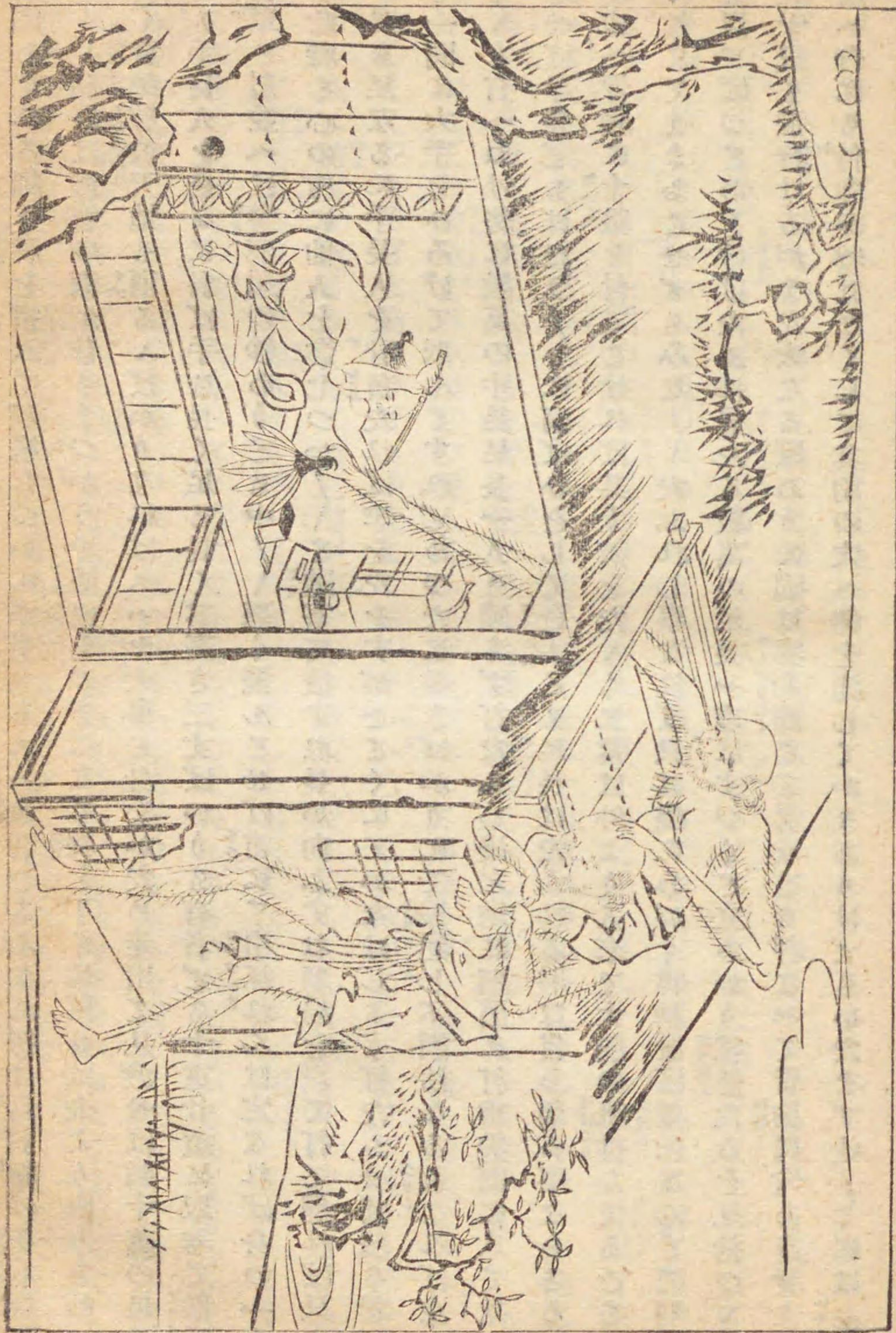
次第に奥へ行程猶更に人小く五寸三寸の人ありけるが奥小人島に至れば其大き豆人形程そ有けるかゝる國にもそれ／＼の主ありてさしも奇麗に作たる城なんどの邊には大勢の小人ども登城下城の袖をつらねさも嚴重なる其内にもやんごとなき姫君の輿に乗て出る躰淺之進は指にてちよつと引つままで印籠の中へぞ入たりけるに付／＼俄にさわざ立西よ東よはせちがふ輿に付たる奥家老とちぼしき男うるたへまわる躰なりければ淺之進また引つままで此度は印籠の下の重へぞ入たりける半日ばかりも過て出し見るに彼奥家老は姫君を奪れて云わけなしと思ひけんういらうに腰打懸腹十文字にかき切てうつぶしにぞ伏たりけりかゝる少き人にてさへ君臣の義理あればこそと涙ながらに彼姫を取出しもとの處へ歸しける扱／＼むざんの事かなとそれよりも又羽扇に打乗あてどもなしに飛行鳥

## 風流志道軒傳卷之三終



風流志道軒傳卷之四

扱それよりも淺之進は羽扇にまかせ飛廻りて北より南へ流れたる大河の邊にあり立けるが草木の形も見なれざるもの多く川水の色も異なるさまになん見ゆれば歸國の咄の種にもなるべしいざや歩行渡して見んとは思ひながら深き淺きのそこひさへ志らぬ國の川なれば人の渡りを松が根に腰打懸て向ふをばるかに見渡せば川の半に人四五人歩行渡りの躰なるが水は腰にも至らされは見懸にも似ず淺き川にぞ有けるとて裳をかゝけて渡りけるに其深さ丈にあまれる川なればはかなく押流され浮つ沈つ苦て既に命も危かりしが其時また羽扇を取てさかまく水をかきわくれば水は八方へ退てさながら平地を行がごとく向の岸にぞ着たりけり去にても彼渡りし人はいかゝなりつらんと打見れば此國は長脚國とて體は日本人程なれども足の長さ一丈四五尺なれば此川水には流さるも斷なり扱また彼足長どもは川中にて淺之進が羽扇の妙ある事を見て何とぞして奪取んと打寄て評定をなんしけるが中へ卒爾には取がたしとて其隣國の長壁國といへるは手の長さ一丈四五尺にて常に盜を事とすれば此者どもをかたらひて羽扇を奪取んとぞ計らひける此事淺之進は夢にも知らず川渡の難儀に勞れければ道の邊の茶店に立寄座敷を借て屏風引立前後も覺えず臥居たりしが何かは志らず物音にふと目覺して打見れば上なる引窓より其長さ





丈にあまれる細き腕を指入て羽扇をつかんで引上るスハ曲者ごさんなれ扱は鳥羽繪の茨木童子  
 中へ羽扇は渡邊の綱が昔もまつかうと懐劍をぬきはなち腕を丁と切落せば夫より四方さわが  
 しく責鼓鯨波天地も崩るゝばかりなればスハヤ大事と身をかため走出て見渡せば數十萬の足長  
 ども手長人をせなに負ば手も長く足も長く其高さ三丈ばかりも有者ども十重廿重に取巻て稻麻  
 竹葦と居並へは譬羽扇の妙ありとも中へ悪く飛んとせば宙にて引抓れんは定なれば身の一大  
 事此時と心の内に仙人を念じつかへと馳寄て彼すね長が向ふすね羽扇を以て打て廻れば只さ  
 へ長き足なるに手長人を脊負たれば竿をたすがごとくにてかたはしより打たふせば残る者ど  
 も一同に大手をひろげて取んとすれどもめつたに長きばかりにて振廻し不調法なる腕なれば左へ  
 くゝり右へぬけ終に數萬の手長足長一人も残さず打たふし淺之進は羽扇に打乗雲間に入て見お  
 ろせば手長どもはほうへに高ばひをして逃去とも足長はたふれる時は自ら起る事ならさるも  
 のゆへ皆腰に太鼓を付てこければ其太鼓をたゝくに常は外より人來て大船の帆柱たてるごとく  
 輾轉にてまきあこせどもみなへたふれし事なれば只其儘にあがく躰捨置ば餓死なんとて羽扇  
 を以てばつとあをげばたふれ居たる數萬の足長一度にすつくと立あがり茫然たるを見捨つゝ四  
 五千里も飛行けるがまた大なる國あり此國は穿胸國とて男女ども押なべて皆胸に穴あり貴人他  
 所へ行にも竹輿乗物はなくして其胸の穴へ棒を通してかきありけどもいたまらずは賤

者ども棒をたゞさへて通りを待人を見れば棒やろふへとなんいへる事日本のかごやらふとい  
 ふがごとし淺之進もかゝれて見んと思へども胸に穴なければすきやうなく段へ與へ行に  
 隨ひて家居も多く賑なれども流石夷國にて人からは皆賤さまなれば淺之進を見て上下男女立つ  
 どひ扱も珍しき風俗かゝる男の又あるべきにやと引もきらずの人だかり日を経るに隨て國中此  
 沙汰かくれなければ此國の主大孔王の耳に入官人を以て淺之進を召れけるに朝廷の群臣皆淺之  
 進か容貌の美なるをぞ感じける此大王に男子なく當年十六歳の姫宮一人ましへけるが淺之進  
 が器量を見給ひ姫君も大王も此者を婿と定め此國を譲あたへんと群臣をも呼集てさまへ評定  
 有けるが大王の勅命といひ姫宮の戀人なれば皆然るべしと萬歳を唱いそぎ淺之進をむかへ装束  
 を改んとて多くの官女達立つとひ一間なる所へ伴行いろへ綾錦に金玉を以て飭たる天子の  
 装束を臺に載官女達とりへに淺之進が帯をとき装束を着せ替んとして胸を見れば穴なしみな  
 へ大に肝を潰装束打捨逃入けるが一間の方かしましく能男とは云ながら容貌に引かへて思ひ  
 の外なるかたわもの胸に穴さへなき形にて此國の主には存もよらず大王泡へも姫宮泡へも此由  
 奏聞有べしとつぶやく聲へ聞へければ淺之進もあきれ居たる所へ此國の大臣來りて淺之進に  
 向て曰汝が容勝れたれば大王迎て子とせんと宣言ありしかども只今官女が申にては胸に穴なき  
 かたはなるよし都て此國にては智慧あるものは胸の穴廣く智慧なき者は穴せまし故に穴せまき



者なんどは高位には登がたし况穴なきもの天子にはなしかたければ是までの約束變改あり早く國境より追拂へと大王の勅命なれば此上何と穿胸國に一日も逗留叶はずいざこさなしに早立のけと下部はわり竹たゝき立れば初の契引かへて妹脊の縁も淺之進は我胸をさぐり見れども元より少もあなうたてやと例の羽扇に打乗て蝦夷琉球はいふに及ず莫剛爾占城蘇門塔刺淨泥百見齊亞莫斯科米亞晉牛亞刺敢亞爾默尼亞天竺阿蘭陀を始として其外の國には家業を志らぬうてんつ國髪は本田に銀きせる短羽織に日和下駄を穿てやうるり三絃座敷藝お花といへる地色に打込只遊ぶ事を第一とす志かるに此國折くは大水出て親の代より讓請し家業株町屋敷諸道具衣類などを押流され火の降こと度くなり又其隣國にきやん島といへるあり神儒佛の教もなくからだはまぼり染のごとくはりこみといふ網にてあくたいと云魚を取て着にし大酒を呑できをひ歩行を業とす又おそろしき國あり其名を愚醫國といひ又數醫國ともいふ此國の人皆頭を丸め折に物髪なるるあり學問を表にかざり人の病を直す事を業とすれども近年甚下こんになり書物を見れば目の先くらみ尻の下より火焔もえ出暫時も學問する事ならず只世間功者にとばかり心懸輕薄を常としてれんついまやうの妙術をきはめ羽織は小袖より長く竹輿のすだれはいき杖よりもふとし牽頭煤屋敷の賣買天窓をふり立かけまはり見へ第一の藥箱も銀かなぐはかゝやけども中の藥は吟味もせず牛膝は牛の膝と覺え鶴虱には鶴のまらみを尋るといふ古人の詞に違ひなき笑

止千萬なる國にぞ有ける又四角四面なる國あり其名をぶざ國といひ又志んござ國とも云此國の人面大にして國なまりをいひちらし他國より來し者におほいをいへば能事と心得志つぶかくして女郎にきらはれ陰で笑はるゝを知らざる程愚なる國なり又いかさま國となんいへる所に至れば此國の人寄集舟に乗て漕出し標蒲一島といふ島へ連行目の一より六ッある猛獸に喰付せて裸にせんと謀ければ淺之進も早くにそ逃歸けりかく様く之苦勞艱難世界中の國く島く殘る所なく廻りければ羽扇の妙ありとはいへども元氣も足も勞れければ朝鮮に至て人參のぞうすいを喰ふ事二月ばかり又足を休んにくつきやうのとありとて夜國に寐ると半年餘にして草臥も直りければまた羽扇に打乗て唐土へところろざし清朝の主乾隆帝の住給ふ北京になん至けるに廣き事類なく繁華詞にも及ぶべからずいざや城中に入てながめんとして彼羽扇を背に負へば忽ち影ぼうしもなく水鏡も見えざれば志すましたりと笑を合て大門より白晝に入ども人是を知る者なしそれより足にまかせて數多の宮殿殘る方なく見めぐりけるが後宮に至て打なかわれば三千人の宮女紅粉をいろどり雪のびんづら靄の眉玉をつらねし美人の粧昔久米の仙人は物洗ふ女の木綿湯具のびらつきて脛の白く見へしにさへ通を失ひしためしもありかく數多ある美人の中に至りなば釋迦も黄金の涎をながし達磨の目玉も絹糸のごとくなるべし淺之進も心亂て城外に出る事を志らず後宮の隅にかくれて夜な〜官女の闔へぞ忍びけるがいつとなく其噂聞へけ



ればいかさま變化へんげの所爲ところならんと宰相さいしやう以下打集うちあつて評定ひやうていあり四方八方燈とうをてらし寓直どうちの武士ぶし嚴重じゆうじゆうなれども何事も目にさへざらず然れどもかゝる事などは猶なほやまさりければ扱あつかは魑魅魍魎ちみづりやうのまはざか又は日本にてはやると聞姫路きみぢにおさかべ赤手あかてのこひ狸たぬきのきん玉八疊敷やちやう狐きつねが三疋尾さんしやうびが七ツの類るいならば打ものわざにてかなふまじ貴僧きそう高僧かうそうに命いのちじて御祈いのりあるべしなんと評議ひやうぎ一決いつけつせざる處ところに宰相さいしやう申まをされけるは都みやこて魑魅ちみ鬼神きじんの類るいならば足跡あしあとはなきはづなるに御庭ごていのところ〳〵人の足跡あしあと残のこれるはいぶかしく是こゝにてこめてだて段〳〵有馬山油斷うまやまのあぶらする所にあらずと間まごとの入口いりぐちに細こなる砂すなを散ちし置お寓直どうちの武士ぶし懷中火把くわいちゆうたいまつを持もて忍しのびてなん窺のぞひ居ゐける淺之進あさゆきはかゝる事こととは露つゆ白波しらなみの戀こひの關守せきしゆうちもねならんとつぶやきて彼羽扇かひあふにて身を隠かく一間いけんなる所へ忍行しのぎに容かたはさらに見みへざれども散ちし置おたる砂すなの上足跡うへあしあとの付つをめでにして忍居しのたる寓直どうちの武士ぶし彼火把かたいまつをなげかくれば飛とんどする間まもあらむざんや物身ものみに火付ひて燃も上あれば淺之進あさゆきすべき様ようなく急いそぎ帯おびを引ひほどきつ〳〵裸はだかになりて飛出とる内羽扇うちあふも小袖こそでも一時ひとときにみな〳〵灰はいとぞ成なたりければ丸裸まるはだかの淺之進あさゆきが姿すがた忽然こつぜんとあらはれて始はて人目ひとめにかゝりければ寓直どうちの武士ぶしあり重おもり高たか手て小こ手てにいましめて帝ていの前に引出ひきだすされば樂たの極たぎて悲生かなずるとはかゝる事ことをや云いなるべし宮中みやちゆうにてはひそかに契ちぎて淺之進あさゆきが身みの上うへを知したる官女くわんにょは扱あつかもむさんの事ことなりと忍しのび涙なみだに袂たもとをまぼり又事またことあらはれなばいかなる目めにか逢あえんと心安しんあんからざるも多おほかりけり帝王ていおうは淺之進あさゆきを御覽ごらんありて彼かが人ひととなりを見るみるに其容貌そのようぼう賤せんからざる者の

何故なにがかゝる術じゆつをなして我後宮ごうきゆうへ忍しのび入いたりやと尋給もとへば其時淺之進頭あさゆきを振上あ我われは日本江戶にっぽんえどの者ものにて深井淺之進ふかいあさゆきと申者まをなるが我師風來仙人ごうふうらいせんじんの教しやくにまかせ諸國しよこくの人情にんじやうをまらんがため有あとあらゆる國〳〵をなん見廻みまわりけるに此城中このちぢゆうの後宮ごうきゆうに忍入しの思おもはずも官女くわんにょの美うつくなるに心こゝろまよひて我本心ごほんしんを失うひし故師こしの仙人せんじんのどがめにや仙術せんじゆつをこめられし羽扇あふを燒やれて術じゆつを失うひ今いまは我身ごみを有頂天うてんかくのごとくの丸裸馬鹿まるはだかばかのむき身みと笑わられて異國いこくに恥はぢを殘のこさん事こと是非しぜいに及およぬ次第しだいなればとく〳〵刑けいに行いはるべしと詞ことばす〳〵しく申上まをれば其時帝そのときも群臣ぐんしんも扱あつか〳〵珍めづしき事ことかなとて猶諸國なほしよこくをめぐり見たる事ことなんどくはしく申上まをすべきため繩なはをゆるし衣類いるいをあたへ様〳〵酒肴しゆげんをもてなして帝太子ていたうを始はとして百官百寮席ひやくくわんひやくらうせきをつらね後ごの方かたには后ごうよりもろ〳〵の女官達にょくわんたう日本人にっぽんじんの寐言ねごんにあらぬ珍めづしき事こと聞きんとて翠簾すいれんの間に紙かみなんどはさみつ〳〵ひそかにのぞきて聞居きこ給たまふ淺之進あさゆきも漸しぜん心こゝろ落着おちて夫つまより諸國しよこくめぐりたる物語ものがたりをなす事こと日ひをかさねければ諸國しよこくの人物にんぶつ鳥獸ちゆうぶつ山海さんかいの様よう子こまで委物語あつかものごと有あければ帝てい甚おほ感かんあり世界せかい廣ひろしとはいへども我唐土ごうどの五岳ごがくにつ〳〵ける大山おほやまは有あまじきと有あければ淺之進あさゆき申まをけるは仰おほの通り諸國しよこくの山やまの内うちにてはまづ五岳ごがくが隨まつなれども我故郷ごこきやうの日本にっぽんには不二ふじといへる名山めいさんあり其大おほさ五岳ごがくにもはるかまさり八葉はつえつの峰みねそばだちて四時しじに雪ゆきの消きるとなく何れの國くにより是こゝを見ても白扇はくせんさかしまに懸かると詩うたにも作りなかく〳〵にいふ言ことの葉はもなかりけり不二ふじの白雪はくせつ〳〵なんど〳〵歌うたにも詠よむ風かぜは人穴ひとあなを出いて三千世界さんぜんせかいを涼すずうし雪ゆきは麓ふもとに落おちて白酒はくしゆと成なて旨うまがらず五



岳なんどのこときは草履取にも不足なりと申ければ帝大に驚給ひ昔日本の畫工雪舟といへる者我國に來彼山を畫しより唐土人も三保の原氣も浮島の風景も我は其意を繪そら言にて五岳には及ましと今迄は思ひしが汝が詞を聞しより初て不二の萬國の山にまさりたるを知れり我も四百餘州をたもてば何に不足もなければ不二山ばかり日本にまけたる事無念類は中橋なれば是より諸國へ申付多くの入歩を呼寄て不二山を築せて後世に名を殘すべし汝は彼山を能見覺へつらんなれば科をゆるして奉行となすべし五岳の内何れの山にても見立次第基として不日に不二山を築べしとの勅命淺之進謹で私日本に生れたれば不二の形あらまはしは覺えたれとも委事は存せされば御役儀を承りて不二山成就志たりとも目利者に見付られ爰の所は不出來なり此岩は付物なんど、似せ物師の名を請ん事末代の耻辱なれば一まつ日本へ立歸り不二山の雛形を取歸るべし志かし其雛形も外に仕方も有さるべければ唐土中の紙と粘とを取集不二山をはりぬきにして此方にて築し山にすつほりと打きすれば其達明白ならんといわせも立ず宰相かぶりを打ふりて昔秦の始皇の時徐福といへる大山師が蓬萊山に至て不死の藥を求んとておこはにかけしためしも有ればうかつには吞込れず其上かゝる大山をはりぬきにするは紙代等も御時節からには大そふなれば出來兼山の子規外に仕方は有ましきやと冠をかたふけ思案あれば淺之進すゝみ出此事氣遣ひ給ふべからず船に乗て行人は皆王の臣下なれば中々一人の私にて逃かくればなるべか

らす又不二山をはりぬく事は我に一つの仙術あり紙と粘は御入用までもなく唐土中の郡縣へ公役をかけは大方には揃ふべしもし不足なる時は我日の本の戀風や其扇屋の夕霧より藤屋伊左衛門へ贈たる多をもとめてはりぬきにし獻覽に備へ奉ん事本に正直日天泡掛て少も違ひこれなしと辯舌をふるふて申上れば帝をばじめ皆く大に感心あり今に始ぬ日本人の智慧なるかないそぎ其用意せよとて唐土中へ觸をなし紙と粘とを集る事山のごとく大船三十萬艘を寄て追々に積立經師屋の類はいふに及ず素人までも小細工のきゝたる者は召出し淺之進にも様々の賜ありて不二山張振太夫といへる官を給はり日和を見定め三十萬艘一度に出船ありけるは目さましかりし次第なり

風流志道軒傳卷之四終



風流志道軒傳卷之五

抑不二權現そくふじごんけんと申奉るは駿州有度の郡に鎮座ちんざまします祭まつりどころ大山つみのみこと祇命せいのみことの女花木開耶媛めづまきのほささくやひめにて是を  
 淺間せんけんの社やしろと申奉るされば神の靈妙れいみょうはかるべからず異國よこくにより不二山ふじさんをばりぬきの用意よういある事こと忽たちまち志  
 ろしめされければ我守護われしゆごの名山みやまを唐土たうどへ寫うつされては日本の耻はぢなりとて愛鷹あしたかの明神あきみかみに御内談ごうちだんまし  
 くて曾我兄弟そがけいの神かみを早使はやつかいにて伊勢八幡いせはちまんの兩社ふたやしろへ御注進ごしゆじんありければ即時ごときに諸國しよこくへ觸ふれをまはし則  
 不二山ふじさんの絶頂ついでうへ八百萬やふまんの神かみく神かみつどいにつどい給たまひて様さまく評定へうていありけるが昔蒙古むくごより責  
 來きたし時の先例せんれいに任すべしとて雨の神風あめのかぜの神かみに命いのちして急いそぎちくらが沖おきに待請まちこて唐たうどの船ふねを吹ふくだけ  
 よと有あければ風の神かぜのかみ申まをされけるは私共わがたち一族いそ残のこらずちくらが沖おきへ出張しゆちやうをなさば其跡そのあとにては日本にっぽんに  
 風かぜをひくもの一人ひとりもなくんば醫者いしやとも渡世わたよに難儀なんぎたるべく思おもほゆれば少くは跡あとに残のこなんと伺  
 ければ諸神しよかみ以もつての外ほか怒いかせ給たまひ若もし不二山ふじさんをばりぬかれなば日本にっぽん未代みよひの耻はぢ辱はらなり何なにぞや醫者いしやの難儀なんぎ  
 ぐらいに替かべきや其上そのかみ近年こねん生なれつきたる醫者いしやは少く家業かぎやうにうどきのら者ものども青菜あおな賣うり淺漬あさづけ宅たく庵あん  
 となり香屋かうやは稻田いなた安康あんかう餅屋もちやは佐藤さとう養閑やうかんと名乗なをあめ賣うり雨井あまい堯仙やうせんと改か名なし氣きの志しぬ麻布あまふ木庵もくあんが  
 類るいなればばやらぬ時はほうろくはもとの土つちとぞ成なにけりにて餓死うゑしすべきには至いたらされば瑣細ささいの  
 事ことは打捨うちすて唐船たうふね日本にっぽんにおもむかは雨風あめのかぜの神かみ精力せいりきを盡つくし霰あられの神かみ電かみの神かみもともく力ちからをそへ戸板といた

にころつく豆まめのごとく暫時せんじの間に吹ふくたくべしとはげしき仰蒙おんがうて雨風あめのかぜ霰あられ電かみの神かみは雲くもを起おこして降ふ  
 て行唐ぎやうたう人ひとどもはかゝる事こととはいざ白波しらかみを凌しのぎ順風じゆんぷうに帆はをあげて日本にっぽん間ま近ちかくなりける時待ときまちもう  
 けたる事ことなれば黒雲くろぐも八方はつぱうより覆おほかゝり方角かたかくさらに志しれざれば數百たうひやく萬まんの唐人たうじんどもうろたへまはる  
 折をからに雨風あめのかぜはげしく吹ふ來きたり三十萬さんじゆばん艘そうの唐船たうふねを一ひとつ所ところへ吹寄ふきよて只ただ一ひともみにもみくだけば數十萬しゆじゆばん  
 人の唐人たうじん共とも海中かいかうに飛入とひいり水練すいれん秘術ひじゆつを盡つくせども三十萬さんじゆばん艘そうの大船たいふねに積置つみおきたる粘のりと紙かみ一度いちどに海うみへ入いり  
 ればさしにも廣ひろき洋海やうかいも紙漉かみすの箱はこを見るがごとくどろりくとねばりければもちに着つたる蠅はいの  
 ごとく皆みなあられ波なみに打込うちこみ數かずもかぎらぬ唐人たうじんども白しろあえとなりて死ししたるはむざんなりける事ことど  
 もなり爰こゝに一ひとつの不思議ふしぎあり淺之進せんしゆじんが乗のりたる船ふねは日本人にっぽんじんのありし故ゆゑにやかゝる風雨かぜあめの中なかにても  
 船ふねは少すくもいたみもなく何なにちどもなく吹流ふきながされゆらりくと大船たいふねの思おもひ頼たのみ方かたもなく風かぜにまかせ  
 てたゞよひしが覺おぼえずも日を重かさて糧かても水みづも盡つくすとすれば生いきたる心こゝろもあら海うみの向むかいを見れば一の島ひとのしま  
 あり初はつて蘇生よみがへたる心地こゝろにて島しまを目めめてに漕寄こぎよれば此島こゝのしまは女護によごが島しまとて男おとこは一人ひとりもなくして女めば  
 かり住すむ國くに之子こを産うむと思おもふ時は日本にっぽんの方かたに向むかひて帶おびをとき風かぜを請これば懷胎くわいたいして又また女子こゝろを産うむ  
 もあれども皆みな女めなり此島こゝのしまの掟おきてにて外ほかより流來りゅうらいる人ひとあれば船ふねより陸くわへ上ある時國ときくに中の女によ立た出て磯邊いそべ  
 草履ぞうりを直ただし置おき草履ぞうりをはきたる者ものと夫婦ふうふとなる法はふなれどもはるかへだてし島しまなれば是こゝまで人  
 の流來りゅうらいる事こともなきに此度船こゝのたびふねの漂着ひやうちやくせしは天あまのあたへと悦よろこびさみ皆みなく濱邊はまべに立た出て前後ぜんごをあら



そひ草履を直せば淺之進を始として百餘人の唐人ども面々草履をはきつれて陸珍らしく立出ればとかれし者は取すがりてこんなえにしが唐にもあるかとなれしく悦びいさみはづれしものは浦山しく聲く〜にさわぎければ此國の帝王より役人來りて御用なるよし百餘人の者どもを一人も残らず竹輿に乗せ城内へ連行ければ大勢の女共は闇夜にへそをぬかれしごとくうつとりとして居たりしか打寄て相談しけるは此島にそたつ者上つ方も下さまも男のほしきは同じ事なりいかに御威光なればとて残ずお上へ取上給ふは扱〜つれなきなされ方我〜生て何かせんぞ皆一同に連判して國中の者一人も残ず城外へ詰かけて男を返し給ふべし左もなくは此城一ツ責破て目に物見せん彼日本に名の高き巴板額にはあらずとも女の念力岩をもとほすと聲〜に呼はりて恨の氣天地に滿れば帝も大にもてあまし如何せんと評定ありしを淺之進申けるは所詮百人あまりの男にては國中の者争て上へ取ば下うらみ下へ行ば上恨なば是亂世のもとのなるべし我に一ツの工夫有唐にても日本にても女郎屋といふ事あれば此上は私共百餘人の者申合せ女郎のごとく店を出し情の道を商ふへし志かる時は此國の人貴賤上下のわかちなく金次第にて來るべければ互に恨そぬみもなし此儀如何と申ければ是はよろしかるべしとてそれより其旨ふれば何れも大に得心して國中の女ども圍を解て引退扱都の北に當りて志かるべき土地を見立四方には堀をほり茶屋揚屋より諸商人の家〜まで不足なく建ならべ一方の入口には大門を

て郭中の男は外へ出ざる爲にとて關所のごとくに番人を付置淺之進を始として彼百餘人の唐人を五人十人引わけて家〜に店を出すされば女なれば女郎といひまた遊女などいへども是は男の傾城なれば其名を男郎と呼また遊男とそ名づけ又年の寄たるはやりての役を勤れども是も男の事なれば其名を呼てとりてとなん改めつゝ其外は何事も皆吉原を學びて太夫よりかうしさんちや下唐人は河岸へ追やり引ばりみせまで出しけり衣類も様〜工夫しけるか兎角日本の風俗か女の氣に入たりとて唐人共も元服させ捲上髪に長羽織紅白粉にて形を粧ひ黄昏も過る頃鈴の音聞ゆるを相圖につらりと店に居並て燈くわつと照渡れば待もふけたる女客格子に顔をあしめて何れあやめと引ぞわづらふ其内に二階に上る客もあり又は茶屋付揚屋入對の禿に日がかさ羽織のゑりも志どけなくつかみからの八文字押わけられぬ人たかり此國開てこのかた咄にも聞ざればまして見る事は猶初なり遊男を買て遊んどて上を下へとこみ合て押もきらぬ女客初會も程なくなじみとなり貰のもめもの日の約束いつしか客も粹に成て立ひきいきはりのく切るの氣味合事までさして替れる事もなし只世上の女郎に異なる事は袖とめかね付の世話なきのみにてぞ有ける淺之進を初め唐人どもは始の程は面白き事いふばかりなく天上の榮花も是には志かじと古郷の事も打忘れてたのしみけるがいつとなう事足たる様に思へばおのつから秋風の身に志みて雨のふる夜も雪の夜も本につとめはまゝならぬ後には客を見るもうるさく氣に入ぬ



客はふつて見ても男のふらるゝと違ひ義理外聞もかまはず夜中取つき恨歎はそうくはふる事もならず晝夜をわかず勤ければ半年も立ぬ内に色青く瘦ちとろへこつくと咳の出るを相圖にして無常の戀風にさそはれ百餘人の遊男ども西方淨土へくらがへすア、悲きかな生者必滅のこどわり人の命のはかなき事は露のごとくまたいなひかりのごとしと佛の教も此事になん國中の女客は一かたならぬかなしみの涙に袂を志ほりつゝ我にこそ末かけてといひし言葉もありしなんどくらきより暗に迷ふ戀路の習ひ思ひの煙立登返魂香はくゆれども門く多き事なれば幽靈さへも出やらず志かるに淺之進は如何志けん煩も出ざれば只一人生残けるに外の客も皆淺之進一人を目當にして通ひければ後には晝夜を五十程に切て幾度ともなく勤れど體金鐵にてや有けん少も元氣ちとへざりけり淺之進もつくくと我身の上を觀ずればかく一人生残れども身請せらるゝ事もなく一生勤死にしても末のつまらぬ事なり日頃面白かりし色遊も常になりてはうるさきものと女郎治郎の身の上までを思ひやりあじきなき世の有様と思ひつゝ居眠折から何國ともなく風來仙人忽然とあらはれ出藜の杖を以て淺之進を打すれば淺之進誤入面目もなくひれ伏けり其時仙人聲をあげそれ人世の中に有ては功成名遂て身去りそくは春夏にさかへし草木の秋冬にまほむがごとく是即天の道なり范蠡が五湖にのがれ張子房が赤松子に托せしは進退の時を去りたる古今に類なき智者の手本また千里の馬たりとも伯樂を得ざる時強て功を立んと

するは夏日に氷を求るに似たり譬わづかに出來たりとも室咲の梅の色香薄くまかも盛久しからざるがごとし或はまた君を得るとも其身に鷹の能あるもの摺餌時餌にて畜んとせば籠を離て飛去べし雲に入の勢ありとも其身に餓に至りなば却てすりゑにて事足れりとする雀天告子にもおとるべし鷹は死すとも穂はつまず主の目はぬき食ふべからず速に世をのがるべし但山林に隠るゝばかりを隠るとは云べからず大隱は市中にあり其かくるゝ事一にあらざり賣卜にかくれ醫に隠れ詩にかくれ歌に隠れ東方朔は世を金馬門にのがる我汝に教も世界の人情を去りたる上にて世を滑稽の間にさけよと教しに汝物にふれて心動し故却て難儀なる事度く及べり人の浮世にまじはることは只錢湯に入がごとし穢し中へはいる事は其穢を清ん爲にあらざれば以て穢を落し掛湯をして出たる時我身はいつも清淨なり此理を以て世に交らば我側に袒裼裸裎するも何ぞ我をけがさんや汚泥の蓮花を染さるは涅にすれども緇まざるの理なり志かるに世の人物の爲にとらかさるゝが故に我身をそこなひ家を破遊女狂ひにとらかさるゝばかりをどらかさるゝとは云べからず何事もなづめば害あり汝こそ世界中の國く島くをめぐりて能見覺へつらん何れの國に至りても君臣父子夫婦兄弟朋友の五の道にもるゝ事なし人のみにはかざらず蜜蜂の飛に君臣あり鳥の反哺鳩の三枝に父子の禮備れり鶏羽をさげて雌を愛し猫の不遠慮にさかるも夫婦の道なり鼠は十露盤に乗る兄弟あり犬の尾をふつて集り鯁すば去りの海にかたまるも皆朋友



の道なりさればこそ天地の間を引くるめて聖人の教に上こすものなし夫故に伊藤先生論語は宇宙第一の書といふ事尤至極のことにあらずや其論語の中にさへまた時の宜に隨ふべき事あり酒市脯くらはずとはいへとも越後の鹽引周防の鯖串石決明海參の類學者もどぶへ捨た事なく祭の醴より外に内で酒を作たる先生もなし是唐には池田伊丹といふ名物の酒屋もなく又海に遠き國故鹽引類の旨ひ事をまらず狗や猪を食ふ故に其教もまた異なり蓋を捨てて食ふとはいへども鱸のけんは食ぬと云が又日本の禮なり井戸で育た蛙學者がめつたに唐最負に成て我生れた日本を東夷と稱し天照太神は吳の大伯に違はないと附會の説をいひちらし文武の道を表にかざりちんぷんかんの屁をひつても知行の米を周の升ではかり切て渡されなは其時却て聖人を恨べし誰やらが制札の多きを見て國の治らざるを志りたりと云がごとく亂て後に教は出來病有て後に醫藥あり唐の風俗は日本と違ふて天子が渡り者も同然にて氣に入ねば取替て天下は一人の天下にあらず天下の天下なりとへらず口をいひちらして主の天下をひつたくる不埒千萬なる國ゆる聖人出て教給ふ日本は自然に仁義を守る國故聖人出すしても太平をなす唐は文化にとらかされて國を韃靼にせしめられ四百餘州が罌粟坊主に成てもみづから大清の人と覺へて鼻をねぶつて居る様な大腰ぬけのべらほうともなり日本にも昔より清盛高時がごとき悪人有ても天子に成ふとは思はず日本で天子を疎略にすると慮外ながら三尺の童子もだまつて居ぬ氣に成といふは忠









とゝんとんとんと大坂關か原

打をさめたる萬世の聲

志道軒無一艸

跋

笑の由て來こと尙し千早振神代の昔皇孫この豊秋津洲に降臨まししくける時猿田彦の大神天の八衢にしてみゆきの路を遮玉ふ爰に天鈿女命胸乳をあらはし帶を臍の下におし垂て立むかひ給ひければさしもの大神七咫の鼻をひこつかせ赤酸醬の眼を細めて初て掌を抵て笑ひ相共にみゆきを迎へ奉る末の世に俳優をなして人を笑しむる縁なるべし予はやくより陸雲が癖ありて春は霞める山の端と共に笑ひ初め花に雪に餅に酒に喰ば喉につまる程笑はれ飲ば津にむせるばかりおかしけれども笑ふ門に來るてふ福の神はいづちいにけん西の宮の冥助もなく笑ひ佛の護念にも洩てさす四壁の月冷じき師走の終に無物おこせといふ掛乞に腹を抱ゆ親き友諫に古文眞寶の理屈を以てすれば哀如充耳あはれ虎溪近くは三笑の仲間



も加はり譙周在は獨笑に伴ん事を思ふ頃關東に一奇人あり予既に其名を  
 聞て笑ふ恨らくはいまだ其面を見て笑ざること友風來子これか傳作  
 て遠く寄らる予卒業て日嗚呼此法師何人ぞや摩訶迦葉の拈華を悟に非ん  
 ば藥山禪師の山月を拜するならん吾此人と共に笑ふに非して誰と共にか  
 せん終に笑て卷末に書すまた笑を大方に取に足れり于時寶曆未の冬洛東  
 わらひの岡しい葺干瓢子筆を精進齋中に採る

そしり草

目次

一	守屋大連
二	聖德太子
三	光明皇后(聖武帝后)
四	玄昉僧正
五	弘法大師
六	眞濟(柿本紀僧正)
七	朝觀(志賀寺上人)
八	淨藏(釋貴所)
九	道命(天王寺別當)
十	業平(在五中將)



十一 紫式部  
 十二 神崎遊女  
 十三 玄賓  
 十四 遍照  
 十五 喜撰  
 十六 能因  
 十七 日藏  
 十八 慈心  
 十九 賴豪  
 廿 西行  
 廿一 文覺  
 廿二 蓮生

廿三 長明  
 廿四 圓觀  
 廿五 兼好  
 廿六 賴政(源三位)  
 廿七 重盛(小松内大臣)  
 廿八 賴朝(右大將征夷大將軍)  
 廿九 義經(九郎太夫判官)  
 卅 時政(北條遠江守)  
 卅一 泰時(北條武藏守)  
 卅二 時賴(北條相摸守)  
 卅三 藤綱(青砥左衛門尉)  
 卅四 藤房(萬里小路大納言)



- 卅五 義貞(新田左近中將)
- 卅六 尊氏(征夷大將軍足利)
- 卅七 正成(楠河内判官)
- 卅八 仙人
- 卅九 宗論
- 四十 論語讀

そしり草

鳩溪平賀先生著

(二) 守屋

守屋姓は物部。氏は弓削。名は守屋といふ。父は物部の大連尾與といふ。大連と云事は。昔大臣の別稱也。人王三十代欽明天皇十三年十月。百濟國の聖明王より使を遣し。釋迦佛の像并に幡天蓋等。其外經論を奉る。天皇悦び給ふ。大臣蘇我稻目は是を拜し給へと勸めける。然るに物部大連尾與中臣の連鎌子共に奏して曰く。本朝は神國なれば。異國の佛像を拜せんや。恐らくは我朝の神の忿を請けんと奏す。是に依て天皇拜し給はず。其像を稻目に給はる。稻目悦て則小墾田の家に安置し。向原の家を清めて寺を作り。則ち向原寺と號す。是日本に佛法の渡りて。伽藍を作りし始也。斯て幾程なく。諸國疫癘流行しければ。物部尾與中臣鎌子。是偏に佛の祟りなりと申に依て。佛像を大和國高市郡難波堀江に投じて。寺を焼亡したり。欽明天皇在位三十二年にして崩じ給ひ。太子即位有て在位十四年。敏達天皇と號し。即位の始め物部守屋を大連として。蘇我稻目が子馬子を大臣とす。此時亦百濟國と新羅國より。佛像經論を奉る。



志かれ共。天皇は文史を好て佛道を信じ給はず。天皇の御甥太子。蘇我馬子等甚だ好みて崇敬して。馬子が石川の宅に於て佛殿を修治す。此時又諸國に疫病流行。民死るもの多し。守屋奏聞しけるは。是偏に馬子が佛法を信ずるの祟り也。早々佛法を斷絶すべしと申。天皇然るへしと宣ふ故。守屋自分にて寺に趣き。堂塔を破却し。佛像を燒捨。其灰を難波の堀江に流し。僧尼の衣を剃て追放す。馬子涕泣す其後馬子病氣に侵され奏聞しけるは。臣が病は佛力にあらざんば。命助り難しと申。天皇聞召て。汝一人佛法を信ずべしと許し給ふ。馬子爰に於て。また佛法を再興し。三十二代用明天皇在位二年にして崩じ給ふ。守屋計て。天皇の御弟穴穗の王子を位に即んとす。馬子不隨して。穴穗の皇子を殺して。聖德太子を語らひ軍を起して。終に守屋を亡しけり。或説に。守屋は地藏菩薩の化身にて。日本へ佛法を弘むべき方便に。態と佛敵と成り。聖德太子に亡され。佛法の威徳を輝しけると。此事既に聖德太子傳にも見へたり。此説實正なれば。地藏菩薩には似合ざる始末なり。日本に佛法を弘めたく思ひ給ふに。おては。菩薩の妙智力を以て。外にいくらも能き手便も有べきに。守屋に生れて聖德太子と軍して數多の人を殺し大慈薩埵の御身として。殺生戒を犯し給ふはいかにぞや。然るに源平盛衰記に。守屋大臣死しても佛法を破滅させんと。一念鳥と化し。寺々をつゝき壞らんとせし故。此鳥を寺つゝきと名付しとかや。守屋さばかり佛法を破滅させんと思はれ。太子に生れて佛法を

禁斷すれば。さのみ骨を折らずして。忽埒明べきに。鳥類に生れて寺をつゝき壞さん杯とは。若輩なる振舞。守屋には似合ず。但し守屋は地藏菩薩の化身にて。日本へ佛法を弘めん爲め。佛敵と生れて亡給ふと有は。誓願の如く佛法繁昌する故。喜べきに又鳥と化生して。佛法を破滅せんと。寺々をつゝくと云は。前後相違の振舞也。地藏尊には物に狂ひ給ふか。貝原好古か和事始に。世俗妄に佛氏の誣証を信じ。終に守屋をして逆臣とす。守屋は是君の非を諫める忠臣にして。正を崇ふ端士成事を。知らずと書るもむべなる哉。去は清輔朝臣の袋草紙に。雲井寺の上人瞻西。或所にて説法の間。雨降りて袂にかゝりければ。高座より下るとて。袂を打拂ふて詠す。いにしへも今も傳へて語るにも守屋は法の敵なりけり。嗚呼守屋。時の不祥にあへり。さしにも直明の譽れ有て。世俗の爲に。佛敵とやらんいとあやしき名を呼ばるゝ社。悲しけれ。

(二) 聖德太子

聖德太子は用明天皇の皇子也。御誕生の時に。母后廐の邊りにやすらひて。産み給ふゆへ。廐戸の皇子といふ御父帝是を愛して。内裏の宮に置給ふ故に。上宮太子共云り。生質聰明故に。聖德太子といふ。又八人して奏するを。一度に聞て決する故。八耳王子共いふ。太子傳に。聖



德太子は正法明如來と云へり。去はこそ聰明敏智におわしける。惡人蘇我の馬子と心を合せ。忠臣の守屋を討給ひしはいかゞぞや三十三代崇峻天皇は。用明帝の弟におわしませば。太子の御ためには叔父なり。馬子が計ひにて。御位に即給ふ。依て馬子甚威を振しゆへ。天皇是を憎み給ふ或時猪を献しけるに。天皇是を御覽し。いつか此猪頭を切る如く。我嫌ふ人を切るへしと宣ふ。然るに聖德太子も。此時御前に居給ふとかや。宮女の寵衰へて。天皇を恨るものあり。此事を馬子に告げれば。馬子恐れて。勇士東漢直駒と云者を語らひ。御寢所に入て天皇を弑し奉るとかや。天皇は太子の爲、御叔父君なれば馬子とは俱に天を戴かざるの讐也。速に討伐し給ふへきに。却て逆賊をかたらひ給ふは。不忠不孝のいたり。如來にしては不仁不義の大罪人なるべし。然るに世俗斯る委き事をは知らずして。聖德太子を尊ふ事神明の如し。殊に木を取扱ふ輩を始。諸職人信心する事甚し。工木の族信心して。工程の巧を祈るは。唐土にて公輸。日本にては飛驒杯をこそ祈るへきに。太子を祈るはいかゞと問に。俗説に。太子攝政の時諸職人受領せし其恩を謝する爲に。信仰するとかや。今太平の御代に生れて。衣食住に安し。其程の樂しみを極るは恐れなから

東照宮を始奉り。御代／＼の大君の御恩澤なり。何そや近きを思はずして。遠きに迷ふは俗の常也。我いまた聖德太子の工巧を守て。譽を得しものを聞す

(三) 光明皇后

皇后は聖武帝の御后也。父は太政大臣藤原不比等。母は藤原夫人宮子と云。光明皇后容貌美麗にて。照輝ける故光明子と號す。十一面觀音の化身のよし。源平盛衰記に見へたり。去によつて甚た佛道に歸依し給ひ。南都の興福寺西令堂國分寺東大寺等。みな皇后帝にすゝめ參らせて。建立し給ふ。或説に皇后功德の爲にどて浴室を建。誓て貴賤を撰はす。人の垢を洗ひ清めんと。自分人の垢を洗ひおとし給ふ。九百九十九人に至り。今一人は癩風の病人にて。身たれ腐て惡臭事甚し。面を向へき様もなし。是を嫌ふて去らんには。願空しく成ぬ。堪忍すべくもあらねど。癩病人の脊を撫て垢を流し給ふに。此病人の曰く。我病を愁る事年久しく。然るに良醫の言に。人にうみを吸せなば。病必愈へしと云。然りといへとも大慈悲の人なければ。空しく打過ぬ。我聞皇后は。無比の哀憐を行給ふとかや。希くは我を救ひ給はんやといふ。皇后止事を得ずして。終に癩瘡の膿を汲給ふに。其癩人大光明を放て。我は阿肉佛なりと宣ひて。終に見へさるとなり。皇后隨喜の思ひをなし。則其所に大伽藍を建て。阿肉寺と名付給へり。天子の後として。湯風呂屋の賤女の如く。下賤匹夫に近づき。御身を穢し給ふ事。古今其例を聞ず。元より皇后は名にあふ大姪婦にて。浴事に事よせて諸人に近き姪事を恣にせん爲に。浴室を設



給ふと云り。斯穢らはしき行跡を。聖武帝も制し給はざるや。淡海公杯と云る賢臣も。是を諫めざるは不審。其上皇后は十一面觀音の化身とあれば。阿肉佛とは佛仲間なれば。癩病人と成て。皇后の心をためし見るに及ぶまじ。兎角佛道はあさはかな振舞へ。但此阿肉佛といふも。玄昉僧正か類にや。

(四) 玄昉

玄昉僧正は神叡とも號せり。俗姓は阿刀氏也。靈龜三年入唐して。智識の名高く。聖武帝の后光明皇后に深く歸依せられ。常に玉籥の内に召れけるに。潛に玄昉と皇后と。枕を並べて婚遊し給ふを。太宰少貳藤原廣嗣是を窺見て。天皇に斯と奏しければ。帝忍びて御幸あり。御籥の隙より叡覽ありけるに。皇后は十一面觀音。玄昉は千手觀音と顯はれ。ともに慈悲の御顔をならべて。同じく濟度の方便を語り給へり。帝叡信を發し給ひて。廣嗣は國家を亂すべき徒也。一天の國師たりし貴僧を讒せし條。罪科深しとて。西海の浪に流し者と成ると。源平盛衰記に見へたり。又日本王代一覽には。天平十二年八月。太宰少貳藤原廣嗣上書して。時の政事の得失を申。下道眞備と玄昉僧正世を亂すの間。是を除んと言上して。九月終に筑紫におゐて反を謀る是に依て大野東人を大將軍とし。紀飯麿を副將軍として。諸國の官兵壹萬七千餘人を以。廣嗣

を討しめ給ふ。廣嗣終に戰負て。安倍黑鷹に生捕られて首を討る。玄昉僧正は同十八年災死す。沙門の行ひに非る事有るによつて。筑紫に流されしが廣嗣が怨靈に引さかれしと云り。又盛衰記に。太宰府の觀音堂造立有り。其供養に玄昉僧正は道師たり。依て高座に上りて敬白しけるに。俄に空かき曇り雷鳴して。高座の上に黒雲舞下りて。玄昉を握りて天に上り。次の年六月彼僧正が生首を。興福山の南大門に落して。咄と笑ふ聲したりと。廣嗣が怨靈玄昉を怨で。斯しつる社恐しけれ然るに千手觀音玄昉に生れて。衆生を濟度し給はんと。廻り遠き思案也。やはり其儘正身の。紫摩黄金の肌の千手觀音にて。久しひ物なれども。彼紫雲に乗り。歌舞の菩薩めに音樂か時行歌でも唱はせ。靈香を薫じ花を降らせて顯れ。白毫の光りをかき立。妙なる聲色にて。甚深微妙の説法なりと。てつほう咄しなりと。奇妙をなし。神通方便大小便でもたらしたらば。衆生も膽を潰して。隨喜の涙はらくと流し。忽佛道に歸依して。袈裟世界に惡人はあるまじきに。玄昉と云邪僧に生れ光明皇后に墮落し。思はぬ邪淫を侵し。廣嗣が怨靈に首を拔れしと云ば。佛は餘程たはけなるものなり。併玄昉實に千手觀音の化身ならば。やみやみと廣嗣が怨靈に首を拔れんや。既に坂上田村麿。勢州鈴鹿山惡賊退治の時。清水寺の千手觀音擁護をなし給ひ。惡賊悉く亡し事。猿樂どもの謠物に諷ひ。三歳の兒童も能知れる所也。况や千手觀音の化身玄昉などが佛力を以。廣嗣が怨靈を降伏せざるは。論ずるにたらざる妄言な



るを書に記し。佛に汚名を蒙らしむる社歎はしけれ。元來(脱誤あるべし)玄昉共に觀音の姿を顯はせしは。正直一遍の聖武帝の。鼻毛を數へし奸計なるべし。されば光明皇后は不比等の女にして。聖武帝は不比等の聳といひ。外戚の威勢甚しく。帝恐れて皇后の不義を。知らず顔にて過し給へ共。玄昉をば止事を得ずして。此節筑紫へ流せしと見へたり。或書に姪僧に姪供を恣にするを。名付て大布施といふ。又以身施ともいへり

(五) 弘法

弘法大師。父は讚州多度郡の入佐伯氏田公。母は何刀氏。稚名貴物と云り出家して空海と號して。勤○僧正の弟子と成り。博學能書の譽有り。承和二年三月廿一日。高野山に入定して。弘法と諡を給ひ大師號を給ふ。佛者の説に。龍樹菩薩の後身なりと云り。去ばにや空海と云し時入唐して。青龍寺の慧果和尚に隨ひて法を極め。歸朝して本朝に弘しは大功也。然るに男色の戯れは。弘法唐土にて傳受して。日本に弘めしと云り。貝原氏が和事始にも。此戯れは弘法以來の事なりと見へたり。然らば空海は少童の爲には。非道を弘し大極罪人にして。菩薩の後身には不埒なる僧也。元來出家は女犯の禁戒あれは。世の譏りを耻人目を忍ふといへども。男色は出家の犯すへきと云は。元來我儘勝手也。小姓を抱へ野郎に戯れ。淫佚に溺るゝ事其罪深し。

故に古人も男色は陰陽の亂れたりと云り。或は亂風と名け非道と呼。佛豈非道の邪淫を許し給はんや。男色も女色も姪欲の情に替る事なし。然れば破戒の罪は通るべからず。女犯肉食は勿論諸惡自ら生ずべし。去は男色に惑溺し。身を亡し師を耻しめ。宗門を穢したる出家餘多有。斯る非道を。世に弘め罪なき兒童を苦しめ。僧として惡道に陥る。弘法こそは實に非道の惡僧成へし。去共破戒の比丘の爲には。莫大の功德にして。誠に菩薩の大慈悲ならん

(六) 眞濟

柿本紀僧正眞濟は。空海阿闍梨の弟子にして。有驗の高僧と呼ばれしが。五十五代文徳天皇の后。染殿の后と密通。露顯して伊豆の國へ流されしが。后を戀慕ひ。手自松を栽て。后に准らへ愛しけるが。枝葉都の方へなびきけるゆへ。都松とも云。或は染殿松とも號して後世に残れり。眞濟死して。執心紺青鬼と云る鬼に成たる由。然れども此説定かならず。清和天皇の御后も。東光寺の善祐法師と密通し。顯れて后は位をすべり。善祐は伊豆の國に流されしを。染殿と眞濟密通せしと。誤り傳へたるよし。されども眞濟が斯る浮名立しは。行跡正しからざる故と見へければ。虚實を論せず兩僧ともに無頼の惡僧なれ



(七) 朝觀

志賀寺の朝觀は。行學勤修の聖才有と云る。名僧なりしが。或時京極御息所。志賀花園の春の景色を見給ひて歸るさ。車の物見を明ケられたるに。朝觀上人計らず目を見合。覺へず心迷ひ魂うかれ。戀慕の情頻にして止事を得ず。御息所の御前に行。鞠の坪の掛りの許に。二日半夜イみければ。御息所御簾の内より遙に見給ひ。哀とや思しけん。彼心を慰めんと御所へ召て。御簾の内より御手を出し給ひければ。上人則御手を取て

はつ春の初子のけふの玉帯手にとるからにゆらく玉の緒と云る古歌を吟じければ。御息所とりあへたまはず

極樂の玉の臺のはちす葉にわれをいさなへゆらく玉の緒

と返歌し給ひて。上人を慰め給ふとかや。さばかり行學勤修の老僧。人目も耻ず御息所の手を取て。あつかましく古歌を吟したる心を。思ひやられていと淺ましき振舞。言語に絶へたる惡僧なり。女の手より物をとれば。五百生の間手のなき者に生るゝと。釋迦めかぬかし置ひたと佛語に在り。去は古の禮にも。男女親授ず。もつと利を遠くすと云り。御息所も又。朝觀と手を取かわし返歌有しは。甚だ貞に違り。此息所は。本院の大臣藤原時平の女褒氏といふ。宇

多天皇に愛せられ。雅明親王載明親王を生む。幸有身として斯る不貞の振舞は。父時平に似て。正しからざる生質と見へたり。去は時平は。菅公を讒言しけるは言ふに及ばず。叔父大納言國綱の室を奪ひ取たる事。舊記に見へたり。斯る暴惡無道の時平が娘なれば。婦の道に違ひ。元良親王と密通して顯れし時。元良王親がわびぬればの歌を讀て。御息所へ遣したるよし。多く書に見へたり。斯る姪婦なる故にや。朝觀上人不義を仕懸たるにて有るべし。手を取かわせし計にはあるまじ。嗚呼彼吳僧(脱文)庭か。法師の身にて僧(脱文)堪たる詩に。蚤武蚊

(八) 淨藏

淨藏は貴所といふ。又大徳といふは。淨藏を貴ぶ稱名也。三好朝臣清行が八男にして。日藏が兄也。洛陽の人。母は嵯峨天皇の皇孫女也。淨藏四歳の時千字文を讀。一を聞て二を知る。聰明絶倫なり。十二歳にして叡山に登り。出家して玄照の弟子と成。中齡にして雲居寺を草創し。後年平中興が娘を妻として双子を生り。布施伊能の兩氏今に子孫あり。墮落の後行力衰ず。加茂川の水を祈りて逆様に流し。八坂の塔を祈て傾す。奇靈甚しき事數へがたし。學は内外を兼顯密をわたり。悉く天文易經醫卜管絃音律技藝文章。皆貫攝拔萃して。康保元年雲居寺に於て。七十四歳にして死す。誠に古今未曾有の惡僧也。出家の身として。邪姪戒を犯して佛罰を受ず。



却て行法尙ちどろへずとはいふかし。佛何ぞや墮落の僧に加護あらんや。誠に淨藏は世俗を惑するの大惡僧なり。かたもなき妄語を云置しを。一ツ穴の賣僧とも世に云傳しを。後世の孝堀坊主とも。道理に闇くして書に著し。末世の坊主を。彌惡道へ引入るこそ淺ましけれ。されば今の世に。女犯肉食せざる僧を。清僧とて用るもおかしけれ。思ふに淫佚の僧法師の眠藏に梵唄を安置する。濫觴は淨藏ならん

(九) 道命

天王寺の別當道命阿闍梨は。法興院攝政道綱の息男なり。僧として色に耽る事俗に過たり。兼て平井保昌が妻和泉式部が密夫なり。其外うるはしく讀經するに。妙成音聲あり。或夜和泉式部が元に宿し。目覺て經を讀。入軸讀終て側を見れば。八十計の老夫。感を催ふして讀經を聞居たり。道命如何成人ぞと問けるに。我は五條西洞院の邊に住もの成か。此御經を今宵承りし事。生々世々わすれがたく候と云ければ。道命。法華經を讀誦するは。常の事なり。など今宵計左は云る、哉と尋ければ。老人答て曰。御身潔齋して讀給ふ時は。梵天帝釋を始として。諸菩薩影向して聽聞せさせ給へば。我々杯は。中々近付事叶はざるに。今宵女人を犯して。沐浴もなく穢れ給ふ。諸菩薩も影向し給はず。依てゆるく聽聞し侍ると云て歸りぬ。後に考へ見

れば。此老人は道命が父に仕へしものなるが。道命惡名あまり沙汰あるによつて。道命が幼稚の時別れし故。顔も覺へずなれば。氣の毒さにかやう計らひしならん。古より名僧智識と聞へしは。千人に千ながら女淫を犯す事は。表向慎しむふりにて。少々餘人が聞知りたりとて。少しもひるまず。俗といふものはやぼなものやと嘲なり。女犯は少しも穢れたるものに非ず。ゆへに我々も此世に生じて。俗を誑り金銀を貪り女を犯す事。俗のたはけは却て少し杯と。世人を笑ひ誑る事皆僧の今日にする所。又和泉式部と同じ車に乗り。往來しけるとかや保昌はくそだはけ。今の武士ならば道命と式部を一刀に四ツにすべきに。保昌は鼻の下の長き男と見へたり。式部が姪佚も詞及ばず。惣じて女ほど油斷のなり難きものはなし。去によつて昔より諺に。七人の子を持とも。女に心をゆるすべからずとなり。兎角夫が通人と云れ善人といはれたがる故。女はのし上るものなり。今の女杯は別て邪なり。遊女賣女の類世間に多くかた付。人の妻となるゆゑ。外の女も自然と斯亂らになり。五人や六人に肌をふるは。何の物かはとも覺へず。式部杯は大内に仕し官女ながら。賤しき遊女賣女に劣りたる姪亂。公卿も又遊女と云ものゝ如く。猥りに出會して君を恐れず。世を憚らず放埒の事。帝も是を咎ざるゆへ。互に取替したる戀歌を。撰集に入らるゝ杯は。寛仁入度危政とや云ん(脱誤アリ)忽死刑遠流は免るまじ。中にも出家たる身にて。人の妻に密通するを。俗におち坊主と呼。道命を權輿とすべし



唐土にては。妻を持たる僧を火宅と云よし。去は道命が式部と。一車に乗りてあるきけるも。火宅とやいはん

(十)

業平

右近衛權中將在原業平。平城天皇の御子。彈正尹阿保親王の五男。母は桓武天皇の皇女伊登内親王。姓在原にして五男故。在五中將といふ。容貌嫺雅なる故。閑麗翁とも云り。三代實錄に。業平朝臣は容貌嫺麗にして(脱誤アラフ)學才はなき人にか。其行跡正しからず。生涯好色に耽り。淫伏亂行の人。委細は伊勢物語に顯然たり。今の世に。業平如きの不行跡ものあらば。忽罪科に行るべし。然るに世俗。業平は神明の化身杯と尊み。佛の再來と崇敬するは如何そや。或説。天安元年正月廿八日。文徳天皇住吉に御幸あり。業平供奉して和歌をよめり。

我見ても久しくなりぬ住吉のきしの姫松いく世經ぬらむ  
此時に住吉大明神宮の扉をひらき。出現ありて詠し玉ふ。

むつまじしと君はしらずや瑞籬の久しき世より契りそめけん

此歌伊勢物語に見へたり。古今集にも雜歌の部にあれども。讀人知らずと見へたり。子細ある事にや。元より神は非禮をうけ給はず。何ぞ淫亂不義の業平の歌に。神明愛給ひ。出現し給は

んやいぶかし。世に業平は死せずして。神仙に成りしといふ説あり。神社考にいはいく。世に傳ふ業平は。容貌嫺雅にして和歌を善し。一旦吉野の川上に入て。終る所を知らずと云り又本朝地理志にも。業平は和歌の仙。吉野川上に入て。行方を知らずと見へたり。然れども三代實錄に。元慶四年五月五日病を發し同廿八日子の刻に生年五十六歳にして卒す。滋春遺詞に任せ。東山吉田の奥に送り納めて廟を建。同九月十三日。宇治中納言藤原朝政熊野詣の時。和泉國大鳥郡を通りしに。業平青地衣を着し。黒き馬に乗り。供奉の人十人計前後に隨へ見へたり。朝政夢の如く覺て。いかに亡人と聞けるものをといひければ。業平答て。當時は住吉にこそと云て。かきけす如く失にけり。中納言行平此事を傳へ聞。もしや業平に逢ふ事もやと。住吉に行て。此處かしこと歩行しかども。岸打波の音松の音のみにて。面影もなく。空しく歸らんとせしに其夜の夢に業平打笑て。

おもひ出し神代の事も忘しな昔しながらの我身なりせば

夫よりして。世俗皆業平を住吉明神なりと思ひけり。業平在世の時。住吉にて歌を讀。明神感納有て神詠有しと有は。業平を住吉大明神といふ事いぶかし。豈神明業平に化現して。淫亂不義の振舞志給はんや。元來業平神仙にならざると見へて。伊勢物語に辭世の歌など見へたり。大和國石山在原寺は。業平の菩提所にて。業平の墓業平の像ありといへり。從三位爲子在原寺に



て讀る歌。玉葉集に見へたり。

影ばかりその名残りて在原のむかしの跡を見るもなつかし

加茂岩本の社は。神跡業平といへども。業平神に成りしにはあらず。後人の馬鹿共が神に祝ひたりと也。慈鎮和尚の歌に

月を愛で花を詠めしいにしへのやさしき人はこゝに在りはら

俗説に。業平は東に下りて身まかり。下總牛嶋といふ所に。業平塚といへる古塚あり業平は隅田川にて。舟より落て空しくなれりとして。船の形に塚を築たりと云ならはせり。則歌に

なきあどのゑるしは爰に在原や塚のかたちは船のなりひら

今神に祝ひて。業平天神と號するは此所なり。賣僧の所爲成べし。去ば雜の拾遺に曰く。伊勢物語の注に。都木といふあり。此書の中に。業平一代の内に載るゝ女。三千餘人有りとあり。其上諸國を廻りしとは非なり。東山に籠居して。都の事を他國になぞらへし故。都木と云となり。但此書は異説也。普通の歌道者は嫌らひ侍れど。本文をあげて注せし間。さのみ捨べきにもあらずと見へたり。或説に。業平は極樂世界歌舞の菩薩。正觀音の化身なり。凡三千三百三十三人の女に契りて。一人も犯さず則業平の歌に。

知るらめや我にあふみの世の人のくらきにゆかぬたよりあるとは

是我に契りたる所の女を。悉く佛果に至らせんとの詠歌なりと云へり。觀音衆生を濟度せんと思はれ。即ち釋迦の如き道德の出家に生れ。凡夫を善道に引入るがよし。色々ばけらるゝ身で。淫亂不義なりし業平と化し。佛の身にて邪淫を犯して。たとひ三千人と契りて。壹人も犯さずとへらす口を云はるゝが。何も慥な證據證人なければ。急度した證據は猶なしいかなれば。さばかり非義非禮の淫亂たる業平を神よ佛よと。有られぬ偽りを傳へけるにや。實觀音の化身ならば。業平死して辭世の歌とて。終に行道へゆくべきに。住吉明神となりて此世に止りしは。色道に輪廻したるや。淺ましき觀音の心ぞや

(十一) 紫式部

紫式部。父は越前守藤原爲時といふ。母は攝津守爲信の娘賢子。其始御堂關白の御女彰子に仕ふ。彰子入内有て一條院の后と成。上東門院と號す。式部も相續て。上東門院に陪侍す。後右衛佐宣孝に嫁して。大式三位辨内侍を生めり。式部始は藤式部と云しが。源氏物語の内若紫の卷。殊に勝れて書なしたる故。藤式の名を改て。紫式部と呼り。又一説に。道長の北の方。式部を上東門院へまいらるゝに。我由縁のもの。哀と思召と申さしめ給ふ故。紫式部と申。是に依て古歌に



紫の一もとゆゑに武藏野のくさはみなながら哀とぞ見る

此歌によりての名ことかや。又一説に藤式部の名幽玄ならずとて。藤の花のゆかりをかりて。紫の字に改めしと云へり。又日本記の局と呼は。一條院源氏物語を御覽有て。式部は日本紀をよく社見たりと宣ふ時。左衛門内侍此繪言を妬しと思ひ。日本記の局と號しけると云へり。式部源氏物語を作りし起りは。大齋院選子内親王より上東門院へ。珍らか成物語や侍るかど。御所望有りしゆへに。うつば竹取様の物語は目なれたれば。新しく撰び奉るべき由。式部に仰付られ。式部石山寺に通夜して。此事をいのりしに。折しも八月十五日の夜。月湖水に映りて。澄渡る儘に。物語の風情心に浮みければ。まづ須磨明石の兩卷を書留たり。是によりて須磨の卷に。今宵は十五夜也とおほし出しと書たり。其後次第に書加へ。五十四帖となれり。大概莊子が寓言に本づきて。書作る物語之。式部は博學廣才にして。儒學も史記漢書に通じ。佛道も天台一心三觀の血脉を繼たる由。最凡人にあらず。觀音の化身なりといへり。物語の詞の花。歌道の助と成り。騷人墨客の翫の種と成といへども。國を治め家を齊身を脩る益には成らず。是を讀者却て好色のいたづらものと成る。去は源氏一部悉く好色妖艶の事のみにして。人倫の道に違ふ事甚し。まづ光源氏は。桐壺の帝更衣を寵愛して設け給ふ若宮之。母の更衣病によりて身まかりし後。又藤壺の女御を愛し給ふ。然るに源氏藤壺に戀慕し給ひ。命婦を頼て密通し。藤壺

源氏のたねを懷妊して若宮を生り。藤壺は源氏の爲には繼母之。父帝の御目を掠めて。繼母と密通する事。人倫の道には有まじき事之。又源氏の方違の爲に。紀伊守中川の家に住し。渠が親伊豫守が妻に。一夜の契り有しとかや。人の妻に奸淫する事。甚しき不義之。朧月夜の内侍は。源氏の御先帝寵愛有りしに。源氏内侍と密通したり。是等は人倫の行跡に非らず。又女三の宮は。源氏の御先帝の姫君なれば。源氏の爲には姪なりしに。源氏はと契りしは。姪亂絶倫之。此類は親子兄弟の中にて語るに忍びざる草紙之。斯の類を始として。五倫五常の道に違ひたる事のみ多く見へたり然共源氏物語を見る者能味ひぬれば。好色淫風の事より。仁義の道に便りありと云へり。去れども善に移る事は難く。悪には進み易し。殊に好色の欲は。老たるも若きも智も愚も。迷ふ時は亂に及び命に及ぶ之。源氏物語の意味深き事は悟り難く。好色淫亂にばかり心移り。道ならぬ行跡をするもの多かるべし然るに。觀音の化身たる。紫式部斯る淫亂不義の作り物語を書て。佛の身には似合ざる。邪淫妄語の戒を破り。衆生を色道に導き給ふはいと淺ましき觀音の志にこそあれ

(十二) 神崎遊女

十訓抄に曰く。書寫山の性空上人。生身の普賢菩薩を。見奉るべきよしを。祈誓し給ひけるに。



或夜讀經に疲れて。經を握りながら脇息きょうそくに寓掛よすか。しばしまどろみける夢に。生身の普賢菩薩を見奉り度と思はれ。神崎の遊女長者を見るべきよしにて夢覺ぬ。上人奇異の思ひをなして彼所かしこに至り。長者が家に着給ひ見給へば。遊女亂舞の躰た。長者は横座に居て。鼓を打て亂拍子に次第を取り。其詞に曰く。周防むろつみの中なるみだり井に。風は吹ねどもさゝ波立となり。上人閑居し給へり。此時忽普賢菩薩の形を現し。六牙むくげの白象はくぞうに乗りて。眉間より光明くわうめいを放ちて。通俗貴賤男女を照らし。即微妙の聲を出して。實相無漏大海じやくむろうたいに。五塵六欲ごじんろくよくの風は吹ねども。隨緣ずいげん真如しんじゆの浪立時なみだりときなしと。上人感涙を押へ難くして。眼をひらき見れば。又元の如く女人の姿に成て。周防むろつみの言葉を出す。眼を閉る時は。菩薩の形と變じ。法問ほふもんを演給ふ。形の如く度々敬禮して。泣く歸り給ふ時。長者俄に座を立て間道より上人の許へ來て。此事口外に出すべからずと云終て。則ち俄に死す。異香いかう空に充滿じゆうまんして甚だ香ばしく。長者頓滅とんめつのあいだ。遊宴ゆうえん興きやうさめて悲泣する事限なく。上人益悲涙に溺れ歸路に迷ひけりとなん。彼長者女人は好色の類なれば。誰か是を權者ごんしやの化作と知らん。佛菩薩の悲願。衆生濟度の方便によつて。形を様々に化て樂しみ給ふ道迄も。貴き賤には寄ざる事を。か様の例にて心得べしと身へたり。此事西行選集抄に書り。普賢菩薩衆生濟度の方便ならば。遊女と生給はずとも。いか程も能き方便も有べきに。菩薩の御身として。畜生ちくせう同前の遊女。川竹の女と生れ給ひ。餘多よすの凡夫に執とをか

はし。佛躰を穢し。多くの衆生を色に迷はせ給ふはいかにぞや。普賢も遊女うでめに生れ給ふは。よからぬ事と思ひ給ひてや。性空上人に此事必ず口外へ出すべからずと。口留し給ひしに。上人口さがなくして。諸人にもらしけると見へたり。此事猿樂の謠うたひ物には。西行法師江口の君が許に宿りし時。江口の君普賢菩薩と現し。船は白象と成りて白雲に打乗西の空へ飛び給ふと。謠うたに諷うたへり。大慈大悲の佛菩薩の御身として。情なくもいまだ年も明けざるに。普賢菩薩に成りて西の空へ飛行ひやうぎき。親方迄も大きに損をかけ給ふは。甚むべき仕方なるべし。

(十三) 玄賓

玄賓けんひん僧都は弓削氏にして。阿州の人。山階寺しんがいに住せり。性世塵を厭ひ。法師の僧官しんぐわんに營するを愁ひて。更に寺院の交りを好まず。密ひそに伯耆國の山に隠れたり。然るに桓武天皇御惱みなりに依て。召て冥助めいすけを乞しめ給ふ。玄賓遁のがれ難く又都に入りて。帝の御惱平愈し給ひ。辭して山に歸るといへり。又或説に。玄賓世をいとひ。三輪川の邊はなに幽かすか成る庵を結びて住せり平城帝の御時。僧正に成し給ひしを辭して

三輪川の清き流れに雪ゆきてしころもの袖を又は穢きたさじ  
斯詠すゐぜられしと云へり。一説に嵯峨帝玄賓の道德たつとみを尊給ひ。僧都に成し給ひしを辭して。位記



を木の枝に挟み。和歌を書付置て

外津國の水草清し事しけきみやこの内はすまぬまされり

斯く潜ひそに遁かれて。備中湯川と云る所の。山寺に行て徳を隠し。賤き僧の躰にて。土民に身をよせ。夜は山田を守り鹿を驚かし。晝は稻杯かを菊かりて日月を過し。秋も過こて業わざもなかりしかば

山田守僧都の身こそ悲しけれ秋はてぬれば問ふ人もなし

と詠ぜり。是よりして鹿おとしを僧都といへるよし。然ば元亨げんこう釋書しやくに。玄賓の跡を民家の奴にくらまし。田に有稻を守り鳥雀を起ふ勤ととす。日域ひちいき今に至りて。鳥雀を驚せる藟か靈し。僧都を以て名に銘するものは。玄賓に起れりといへり。藟靈は草をくくり人の形を作り。田の邊に置て鹿鳥を驚かすものなり。山田の案山子と云ものは是。玄賓の傳委しくは扶桑隱逸傳に見へたり。その濫らん狼わい不軌ふきを繩たづを以也。此事は扶桑隱逸傳の贊にあり。推古帝始めて觀勤を僧正とし。徳積を僧都とし給ふ。蓋し止事を得ず。澆季すのよの緇侶しゆら徳を立ず。虚名をもつて自ら奢せ。賓公是を愁ひて心を石泉いしかに凝こし。跡を烟霞えんかに晦くらすといへり。誠に玄賓の如き道德の僧は。古今稀成べし。誰か是を譏そらんや。然しながら山田を守りて鹿鳥を驚すは殺生戒を犯さいれども。いさゝか忍しのばざる心やあらんと。いと疑しくそそいろに袖そでを濡ぬしけり

(十四) 遍照

僧正へんじやう遍照へんじやうは。大納言良岑安世の子也。俗名を良岑宗貞といふ。仁明天皇の寵臣にして少將藏人頭也。故に良少將と呼ぶ。仁明帝崩じ給ひて。御葬みむらの夜より世を厭いとひ。叡山えいざんに登りて。慈惠僧正の室むろにおゐて薙髮ちはつし。遍照と號す。仁明帝崩御次の年。皆人御服みなみんぼく脱。官位を給はり。悦びけるを聞て咏ず

みな人は花の衣に成ぬなり苔の袂よかわきたにせよ

斯て元慶三年權僧正となり。仁和元年僧正と成。同二年封百戸を給ひて。則元慶寺の座主と成りて。輦こを免まされ。仁玉殿におゐひ賀を給ふ。元慶寺は花山にある故。花山僧正とも號し。或は視中院の僧正共呼ぶとかや。甚だ世に時めける有様。玄賓が見ば爪彈つめはじをして憚おそるべし。元より俗にて有し時。名におふ好色ゆへ。僧になりても色情止とざる。嵯峨野さかにて落馬らくばして詠ず  
名にめでし折れるばかりぞ女郎花我落わにきと人にかたるな

又小野小町清水寺に詣でける時に。遍照此寺に有と聞て。いと寒さむきとて。衣一ツ誓ちかし借し給へとて

岩の上に旅寐をすればいと寒しこけの衣をわれにかさなん



斯云やりければ。遍照返歌に

世をそむく苔の衣は只一重かさねは疎しいごふたりねん

と讀り。是等の二首俗にまさり。詞に破戒の罪あらん歟。去ば。僧の身戀歌を詠し。戀の情を能云ひ叶へ。秀歌に譽を得て。撰集に入れし歌人の馬鹿共此僧と同じ罪之。戯れといへども。思ひ内に有れば色外に顯と云へり。耻べき事ならんか。彼慈惠僧正は。官女の歌の返歌して。浮名立たる例有れば。恐るべし慎むべし。或説に。遍照が遁世は。仁明帝に別れ奉り。出家せしにはあらず。嵯峨帝の後に浮名立て。世を通れしと云り。是尤俗説なるべきか。元來色道に溺れぬれば。斯る虚名もちのづから受るなり。兎角此坊主。心は俗の上手を越すならん

(十五) 喜撰

喜撰法師は。世系定かならず。佐々木高秀古今抄に。喜撰は橘諸兄公の孫。奈良磨の子。醍醐法師といへり。古今榮雅抄に見へしは。奈良磨の子周防守良徳の子也と云へり。窺撰と稱しけるが。古今撰集に入られしを悦て。喜撰法師と改ける也。光孝天皇の勅に依て和歌を作り。世を通じて醍醐山へ登りける故。醍醐法師といふ。後に宇治山に隠れて密咒を持し。穀を辭し松葉を喰ひ仙道を得。一日一峯に登りて。雲に乗じて去れり。御室戸の奥の。喜撰の舊跡に。後

人庵を結て喜撰庵と號す。喜撰嶽あり。此所にて登仙したりと云へり。僧の身として厭離穢土欣求淨土の本意にあらず。長生を願ひ仙人と成しは釋氏の罪人たるべし。然れ共此法師。名利には耽らざるか。其頃も宇治の螢見は有けん。借し座敷の思ひ付なきは殊勝なり

(十六) 能因

能因は橘諸兄公十代の孫にて。肥後守元愷か子也。永愷と號し。文章生に補し。肥後進士と號し後に。世を通れ能因と改む。古曾部入道とも號す。昔より和歌の師匠なし。能因始て長能を師とすと云へり。去は歌道に名譽有て。一首の歌まで雨を降せし巧。古今の美談なり。帶刀節信と云者。能因に逢ふて。互に感緒あり。能因が曰く。見參の引出物に見すべきもの侍りとて。懷中より錢の袋を取り出しけるに。其中に匏屑一筋ありて曰く。是は吾重寶之。長柄の橋を作る時の匏屑といひければ。節信甚喜悅して。懷中より紙に包みし物を取り出し。是をひらき見るに。かわきたる蛙也。是は井出の蛙と云て。俱に感歎して各懷中し。退散せしとかや。是を以て見れば能因は。強て風雅の名譽を賣らんと欲する。浮世者と見へたり。古語に。物を翫べば志しを亂ると云り。况や法師の身として。斯る振舞甚だ見苦し。其上能因或時の歌に  
みやこをは霞ととも立しかと秋風そふく白川のせき



此歌を秀歌なりと自讃して。是を都に居ながら披露せんもいと口惜しと。潜に片田舎に籠り居て。面を日に照し色を黒くし。陸奥の方へ久しく修行の序に。讀たる由披露せしとかや。歌に著するさへ。法師に似氣なき振舞成るに。佛の戒給ふ妄語戒を犯して。強て名聲を求る事甚だ罪深し。歌人は歌道に甚だ志深しと歎美すべきが。佛者は無憎かるべし。

(十七) 日藏

和州笙窟の日藏上人は。承平四年八月朔日午の尅に頓死して。十三日を経たり。其間夢現ともなく。金剛藏主の善行方便にて。三界流轉の間。六道死生の栖を見けるに。等活地獄の別所鐵堀獄と云所に。火焰うつまき黒雲掩ひ。鐵の喙の鳥罪人の眼をつつき。又鐵の牙の大罪人を喰付。獄卒聲をいからし。振ふ事雷の如く。虎狼罪人の肉を裂き。其中に燒炭の如く成る罪人四人有り。其叫ぶ聲を聞けば。忝くも延喜帝にておわしましける。日藏ふしぎに思ひ。立寄て子細を尋れば。獄卒答て曰く。一人は是延喜帝也。残り三人は臣下と云て。鉞に貫き。焔の中へ投入ける有様は。業果法の現とは云ながら。餘りに心うく思ひ。日藏頓て立寄り龍顔を拜し。本國へ歸り給へと度々云ければ。獄卒聞て痛はしきかなと。鉞に貫き焔の中より投出し。十丈計り差上げ地へ打付れば。燒炭の如き御形散々に碎て。其形見へ給はず。獄卒又走り寄て。是

を投て一所に蹴集る。様々にして活々と云ければ。又帝の御姿顯れ給ふ。帝宣ひけるは。汝心我を敬ふ事なかれ。冥途にては貴賤上下を論せず。罪業なきを以て尊しとす。朕元來民を痛はり私の道を用ひされども。今五種の科により地獄に墮たり。第一には父寛平法皇の命を背き。久しく庭上に見下せし科。二ツには讒言に迷ひ。罪なき道眞を流罪せし科。三ツには自ら怨敵と號して他の衆生を損害したる科。四ツには月中の齋日に本尊を開かぬ科。五ツには日本の帝位をいみじき事と思ひて。人間執心の深き科。此五ツを根元として。自餘の罪業無量なり。是を以て苦しみを受る事盡す。願くは上人朕か爲に善根を修し。諸國に壹萬本の卒都婆を建て。大極殿にて仙名懺悔の法を修すべしと宣ひければ。日藏泪と俱に歸ると覺て蘇りけり。誠に掌を打て一笑するに堪たり。斯る妄語を吐しを。愚盲の族傳へて書に記し。さしも聖主の譽有し延喜帝に。無實の汚名を蒙らしむる事。日藏こそ憎むに絶たる。以の外の惡僧なれ。渠か云る延喜帝五種の科。第一御父寛平法皇の命を背き。久しく庭上に見下せし科とは。菅丞相を遠流の時。寛平法皇は遠流の罪を宥んとて參内有りしに。衛士門を開かず。終夜禁門の外にイみ給ふと云へり。奏聞する人なければ。法皇空しく還幸有ける由。元來帝は法皇の參内し給ふをば。曾てまろしめされず。是は讒臣時平か威に恐れて。衛士ども禁門を開かず。奏聞する人なければ也と。舊記に見へたれば。強ち帝の御科とも云べからず。第二讒言に迷はせ給ひ。罪なき菅



公を流し給ふは。不明の謗有りといへども。帝其時はいまだ十七歳に成らせ給へば。時平の浸潤の潜膚受の愬に。迷はせ給ふも道理也。孔子も吾言を以て人を取るに。是を宰予に失すと宣へり。大聖孔子すら。人を見違ふの失あり。况や延喜帝徳孔子に及給はず。殊に幼弱にましませば。菅丞相の賢徳を見違ひ。佞臣時平が讒を信じ。罪の實否を糺させ給はず。是又尤之。然共讒臣に迷はせ給ふ。一事の御誤りを以て日藏の悪僧めが妖言の爲に。末代に至る迄。悪人の口舌に御名を汚し給へば。主たる人讒臣に極らば。遠く避べきもの也。第三の怨敵と號して。他の衆生を損害し給ふ科とは心得ず。惣じて天下を知る人は。逆臣有て國を亂す時は。早速退治して。民の患を救ひ。國法を犯すものをば罪科に當行ひ。諸人の見懲にして。天下を靜謐に治るは。國王の職なれば。曾て科にあらず。第四の月中の齋日に本尊を開かぬ科とは。其意を得ず。日本神國にして。神武天皇より代々。天子神明を拜し給ひ。民百姓も神を敬ひ。國安泰に治り。元より佛法の沙汰もなければ。本尊杯云ものは古鐵店にも見へず。去共世々天皇を始。萬民死して冥途と云所へ行き。月中の齋日に本尊を開かざる科とて。鬼にせめられたる沙汰もなければ。舊記にも見へず。聖徳太子日本へ佛法を流行せしめ。内裏にも佛像を安置せられ。二間の本尊杯と稱せらるれども。元來佛像は西戎の人の像なれば。天照太神の。御末たる天子の御身には。穢らしきものなれば。本尊もなければ。開かぬとても科もなし。第五の科とは日

本の正法をいみじき事に思ひて。人間に執心深き科とは何の嘆言。日本の正法をいみじきと云を咎とせば佛も我法をいみじきと思ひ我を信ずる輩は。現世にては福を授け來世は必成佛させんとは。高慢の言葉にあらずや。元來日本の王位をいみじく思ふは。足る事を知るゆへなり。足る事を知らずして。此上にも天帝に成度杯と思は。咎ともいわん。勿論人間に執着心の深き科ならば。孔子は仁義に執心して聖人と成り釋迦は佛道に執着して佛と稱せられ。凡士農工商の四民共に皆夫々に家業に執心せざれば。身を修家を齊ふる事能はず。况や天子として人間に着心せず今の世は假の宿杯と捨鞭を打ち。政道に怠りては國治り難し。隨分人間に執着心深く。津々浦々迄も政道行はるゝ様に思慮を廻らさねばならぬ。天子の職分なれば。延喜帝も別して人間に執着心深く。寒夜の民の寒からん事を思召やらせ給ひ。重ねの御衣を脱せられ。民の寒苦を御身に思し知られ。一向萬民法樂の政事を行ひ給ひ。天下泰平によつて。三十三年にして崩じ給ふ故。其年數の久敷に依て。延喜帝と稱せられ。醍醐邊に葬り奉るに。よつて醍醐天皇と號し奉れり。今の世迄も豊成世の例には。延喜帝の御代と稱し。或は延喜聖主と仰ぎ奉る。さほど帝徳尊き賢主を。妄言を以て辱め奉る。是偏に日藏鐵堀地獄に墮なば。獄卒に命じて。釘貫を以て舌を扱せ度悪僧なり。



(十八) 慈心

攝津國清澄寺と云山寺に。慈心坊尊慶と云老僧あり。本は叡山の學院にて。多年法花の持者成りしが。住山を厭ひ此山に來りて住けり。或時法華經を讀けるに。夢現ともなく白張の立烏帽子を着たる男。草鞋をはきけるが。堅文を持來れり。慈心坊いかなる人ぞと尋れば。閻魔王宮よりの御使へと答ふ。則堅文をひらき見るに。來る十八日閻魔の廳にちゐて。十萬人の持經を以。十萬部の法華經を轉讀せらるべき間。參勤すべきとの召狀之。慈心いなみ難く。領掌の文を書て奉ると見て。夢覺ける。十八日酉の刻息絶て。閻魔の廳に行けるに。閻魔様々の物語有て曰く。日本の將軍太政入道清盛は凡人にはあらず。慈惠僧正の化身之。依之我毎日三度咒を誦して。清盛を禮拜す。其文に曰

敬禮慈惠大僧正  
示現最勝將軍身

天台佛法擁護者  
惡業衆生同利益

汝此文を清盛に參らすべしと宣ひけり。案ずるに慈惠僧正は觀音の垂跡なり。今は大權者の化現法便を廻らして。實業の衆生を利益せん爲に。造罪招苦の旨を示し。盛者必滅の理を顯し給ふにやと。源平盛衰記著聞集等に見へたり。さばかり尊き慈惠僧正。清盛に生れて萬乘の天子を

憍し奉り。萬民を苦しめ多くの人を殺し。無益の暴惡をなしたるは。觀音の垂跡には請合かたし。たとへ清盛慈惠僧正の再生にもせよ。古今無双の惡人を。閻王いかなれば。日に三度禮せらるゝか笑止なり。さばかり慈惠僧正を尊敬せば。慈惠僧正にて有りし時禮拜すべきを。曾て御沙汰なし。惡人清盛に生れたるを拜するは。閻王には物好成事之。思ふに此慈心坊尊慶といふ法師。己が名に慈惠の二字を顯したるは。慈惠僧正の徳をあげて。世に名を照さんと思ひ。あらぬ虚言を言觸して。さしも名高き慈惠僧正に。汚名を蒙らしめたるは。俗にいふ最負の引倒しなるべし。但圓融の御時。慈惠僧正大内へ參り給ひ。宮女に五濟の證文を。いと尊ふ講じ給ふ折から。御籠の内より或女房の申出されしは

有漏地より無漏地に通ふ釋迦だにもらこらが母の有りと社きけ  
と讀し時僧正返歌に

いなやいなむきても見べきいかくりの笑めば一度落もこそすれ

と詠じ給ふ故にや。僧正浮名立て。山門に勸鐘の起請を書初給へり。此時僧正の影障子に移りて。忿怒の相を顯したり。今の世に角大師是とやかや。僧として女に浮名立ち。忿怒して鬼の姿を顯しぬれば。慈惠僧正は佛に成まじと。慈心坊了簡して。清盛に生れたりと。平家へ追從に言ふらしたる妄言を書記し。佛法の本意に違ふ振舞。嗚や釋迦も憎給ふらん



(十九) 賴豪

白川院御在位の時。後の御腹に皇子おはしまさず。仍て貴僧の聞え有る。三井寺の實相坊賴豪阿闍梨を召れ。汝皇子の誕生を祈らんや。驗あらば賞は乞に依るべしと仰有ければ。賴豪畏て。年來深き望有り。勅定相違なくば。皇子誕生勿論の事と奏しければ。主上大に悦び思召て。賞は乞に任すべしと。重て勅定あり賴豪悦で退出し。肝膽を碎て祈ければ。中宮御懷妊有りて。月滿ければ皇子御誕生あり。主上歡感斜ならずして。恩賞の御沙汰有ければ。賴豪願ひけるは。此度の賞は。三井寺に戒壇を立て。寺門年來の本意を遂んと奏しける。此事歡慮にも任せず。園城寺に戒壇を許しなば。山門憤りて合戦に及ぶべし。然る時は天台の佛法も亡ぶべしと。賴豪が望勅定なければ賴豪大に怒り。勅約變じ給ふ上は。皇子は我參らせられたれば。取返し奉るべし迎。飲食を斷て祈死に死しければ。終に皇子も取殺され給ひしとかや。僧として佛戒法噴悲殺生を犯しける也。無賴の惡僧。去ば終に憤死して。一念鐵鼠と成て。佛像佛閣經論書籍を喰破りけるとかや。斯迄主上を恨奉りて鐵鼠と成ならば。直に内裏へ走行き。主上の御手足の爪なりともかぢらざるや。又は虎か獅子に成て。主上を喰殺し奉て。恨を晴すべきに。鼠と成て。恨もなき人の大切にしける。經論書籍を喰破て。迷惑させしは。うろたえたる仕方

なり。鐵鼠は猫に喰はるゝ氣遣ひは有まじけれども。手足の動は出來ぬ筈。迎もなるならば。坊主に似合しき牛になればよいに。鼠とは餘り小さき思付なり。

(二十) 西行

西行法師は。藤原秀郷の末葉にして。左衛門尉康清が子なり。母は監物源清經の女。俗名佐藤左衛門尉憲清といふて。鳥羽院の北面なり。若くして書を讀管絃を習ひ。弓馬に委しく和歌に達せり。元來籠出の心あり。保延三年終に志を遂げ。法名圓位大實坊。或は大法坊。又西行と號す。諸人其徳を尊んで上人と稱しけり。天下に周遊して。至らずと云所なく。常に佛涅槃の日。花の下におゐて死ん事を詠ず

願はくは花の下にて春死んそのきさら衣の望月のころ  
 果して建久九年二月十五日に卒す。平日自分の和歌を記して山家集と云。又は西行歌集。草紙九卷を著して撰集抄と號す。又御裳濯川歌合色川歌合貳卷。皆世に行れり。生涯の行狀普く都鄙の口碑に有。或は其形を畫彫刻し。或は型の像にしてあれば。嬰兒も其形を見て其名を知る。誠に古今桑門多しといへども。西行如きの有徳の法師は稀成べし。西行の和歌は禪定の修行。我歌に仍て佛法を行ひたりと。専ら翫びしが。東國に有けるを。大内に和歌撰集の事有と聞き。



我和歌も入りぬべしと。都へ赴きける路次。登蓮法師に行逢ひ。此度撰集に。我和歌の鴨立澤の歌入れしやと問ひけるに。登蓮聞て其歌は撰者失念しけるにや。撰に入らざる由答へければ。西行聞て。然らば其撰集見るに足らずとて都へ行ず。直に東國へ趣きけりと云り。是兼て鴨立澤の詠歌自賛成りしが。此度撰集に入らざるゆへ。不興して歸りしと見へたり。僧の身としてさばかり和歌に執心し殊に自讚の行跡何事ぞや。是を以て見れば。此法師も一向の桑門にはあらず。或説に。西行法師が遺世は。鳥羽院の后に執心深く。浮名立ちて世を遁れしと云へり。其時渠か歌に

おもひきや不二の高根に一夜寐て雲のうへなる月を見んとは

是其時讀る歌と云へり。尤俗説なれども。一鉢歌の様は。左もあらんやと疑はし。又或説に。西行或時長月の頃。江口と云ふ所を過けるに。折しも時雨しければ。遊女の家立寄時を待程に。宿かりける主の遊女いなみければ。只何となく

世の中をいとふまでこそかたからめかりの宿りをあしむ君かなと讀ければ。あるじの遊女うち笑ふて

世をいとふ人ぞと聞ば假の宿にこゝろとむなし思ふばかりぞ

斯返歌して急ぎ内に入り。唯村雨のほど。暫しの宿と思ひしに。此返歌のいと面白きに。

夜臥所とせり。遊女は四拾計にもや成らん。姥ながらもさもあてやかに艶しく侍りき。終夜何となき事共語りて夜明ぬれば。名残は惜けれども。再逢ふ事を契りて別れけり。其後約束の月尋べくと思ひしに。打紛るゝ事有て過ける夜に。便りの人有て。消息を認めて送りける。假初の世には思ひを殘す哉きし言の葉わすれをもせず

遊女が方よりも。便りに付て返事有

忘れしとまつ聞からに袖ぬれてわが身もいとふ夢の世の中

と書て奥にさまを社と書侍れ。然れ共心はつれなくと書侍り。見るに泪をいり袂をしぼり。さもいみしき遊女にも侍りけると云へり。尙西行撰集抄に委しく見へたり。法師の身として遊女の宿に宿れるは。甚だ不届なる振舞へ。又其後も消息を取かはしけるこそ猶罪深し。瓜田に沓を納れす。李下に冠を正さずとは。文遷の詞に非ずや。西行が嫌疑は避難からんか嗚呼惜ひ哉。さしも道心の聞へありし西行。此事に至て玉の瑕とや云ん。

(廿一) 文覺

文覺は渡邊黨遠藤左近將監成光が子也。遠藤武者盛道と號し。上西門院の北面の士也。十八時。一族源左衛門尉亙が妻袈裟御前に思ひを懸け。あやまりて殺害し。忽發心して盛阿彌と號し。



後改て文覺といふ。諸國を修行して至らざる靈地なし。兼て高尾の神護寺を修造すべき願望に依て。熊野山那智の瀧に七ヶ日打れ。斷食して荒行を修しけり。比しも臘月半の事成に。三重百丈の瀧。氷柱と成て膚を裂。物身破れて紅と成。誠に紅蓮地獄も斯やと知られて。堪へくもあらず見へけるが。三日に當る日既に息絶へ。死人の如く成けるに。不動明王の使として。こんからせいたか二童子來現して。文覺が左右の手を取て助しとかや。文覺は不動尊と入魂と見へたり。但例の賣僧の妄言ならんか。大聖不動明王何ぞ文覺如きの惡僧に加護あらんや。不審し。然るに文覺。神護寺修造勸進として。仙洞御所へ推參しけるに。御遊の折節成に依て奏聞せざれば。文覺大きに忿て。甚惡口狼藉に及ぶ。懷劔を以て狂ひ廻り。安藤右馬太夫祐宗に擲捕せられしが。猶も惡口しければ。平家沙汰として。伊豆國へ流されけるが。船路の間々放逸の我儘に狂人の如し。然るに平家の計として流罪せられしを憤り。いかにもして平家を亡し。思ふ儘に神護寺を修造せんと思ひ立。蛭か小島の流人右兵衛佐源頼朝へ。頼りに平家追討の義兵を勸めて。終に平家の一族を亡させ。願の如く神護寺を再興して住し。世に高雄の文覺上人と稱せられけり。佛は殺生を戒め給ふに。僧の身として私の宿意にて餘多の人を亡させけるは。極惡心の罪人なり。然るに平家亡て後に。小松中將惟盛の公達。鎌倉へ虜と成て。既に誅せらるべき所に。文覺命を乞請し助る事は。せめて衣を着したる甲斐有と云べきか。一旦平家を恨

て。頼朝に亡ぼさせし心とは。裏腹の仕かた。察するに六代御前の男色に愛て。斯る前後相違の振舞をしけるにや。いぶかし。惣して此法師の始終心定らず。腸惡く物狂はしき我儘ものといへり。壇光坊と途中に於て角力を取し。上人とも云はるゝ人品には似合ず。且文覺日比。西行が和歌を嗜けるを。遁世者には似合ざる振舞之と惡み謗。渠に出合なば。擊破らんと云けるが。或時西行高雄山に來て。文覺が房に一宿を乞ひければ。文覺日來の素懷を遂んと。拳を握りて待けるが。西行をつくく見て。拳を隠し上座に請し。久敷貴僧の芳名を承り。唯今面會を遂る事甚祝著せりと。終夜物語りして。翌朝齋を進めて歸したり。文覺が弟子。日來の詞に相違したりと不審しければ。文覺答て。汝らは西行が眼光を見ずや。彼豈我に擊れんや。返て我を打べき者之と云しとかや。是等は人を知り己を知るの智と云べし。六代御前に謀反を進めて。鎌倉を亡し再び平家の世に成さんとの企てをなせしは。時を知らざる無分別にして。一生の行曾て出家の振舞にあらざ。尤譏るに足らざる族なれ共。女童も其名を知りて。世に隠れなき惡僧なれば。謗草の藪に植るのみ。すべて出家は俗人に後世を進るを本意とすべきに。頼朝に義兵を進め。六代御前に謀反を進め。世を覆して修羅の巷と成さんと計りしは誠に天魔ならん

(廿二) 蓮生



蓮生は俗名熊谷次郎直實といふ。桓武天皇の末流。平直貞が子也。其住する邑に猛き熊有て。多くの人を害せり。直貞少くして勇氣あり。弓を携へて熊を射る。熊は矢を負ながら直貞に飛かゝる。直貞刀を抜て終に熊を切殺す。一族并郷民等大に感嘆し且喜けり。爰に於て其所を熊谷といふ。則熊谷を姓とせり。直實二歳の時。父直貞大番として在京しけるが。違勅の罪に依て誅せらる。直實も誅せらるべきを。忠盛潜に助けて。直實が伯父聿久下權頭直光方へ遣はしけり。斯て彼の養育に依て成長し。熊谷次郎直實と名乗りける。左馬頭義朝に屬し。平治の亂に。惡源太義平に隨て郁芳門を守る。十六騎の一人也。義朝亡て後平家に屬し。中納言知盛に隨て多年を送りしが。賴朝義兵を揚る時。平家の味方として敵しけるが。頓て賴朝に屬して。常州佐竹の役に武勇を振ひ。攝州一の谷の合戦に先驅し。敦盛を討て軍功を顯し。賴朝日本の功の者と稱せられ。武名を天下に輝せり。然るに世俗。直實は敦盛を手に掛。無常を觀じて出家せしと云るは非なり。實は久下權頭の所領の堺を論じ。理の立ざるを憤り。遁世しけると見へたり則東鑑に。建久三年十一月廿五日早旦に。熊谷二郎直實久下權頭直光と御前におゐて一決を遂る。是武州熊谷久下堺相論の事也。直實武勇におゐては。壹人當千の名を顯すといへども對決に至りては。再往知斗の方に足らず。頗る御不審を蒙るによつて。將軍度々尋問し給ふ事あり。時に直實申て曰く。此事梶原平三景時。直光を引汲するの間。兼日道理を申入る故か。

今直實頻に下問に預るもの也。御成敗の所。直光定て眉を開くべし。其上に理運の文章要なし。左右に不能と稱し。尋決いまだ終らざるに。調度文書等を卷て。御齋中に投入る庭を立。忽ち忿怒に堪ず。違侍におゐて。自ら刀を取髪を拂ひ。南門より走出。歸宅に不及逐電す。將軍殊に驚き給ひけり。或説に。彼京都の方へ趣くへしと。則雜色等を遣し。伊豆箱根走湯山等におゐて。直實が前途を遮り留て。遁世の事を止むべきの由。御家人及衆徒等へ仰遣しける云。斯て直實は。洛陽東黒谷の法然上人を頼み。弟子となりて。法名は法力坊蓮生と號しける又一説に。直實が法名蓮生にはあらず。蓮西と唱べし。秘傳抄漢語燈錄親鸞上人傳記に見へたり。舊書には蓮西と書しもあり。此法師法然上人へ手紙共數通。今に嵯峨の棲霞寺に有。假名文にて皆蓮せいと書たり。粟津の光明寺の一世道空上人の夢に。我は熊谷蓮西と召れしと。夢の記に見へたり。蓮生とは宇都宮彌三郎朝綱入道法名也。熊谷蓮生と云習せしは誤り也と云り。又世に。蓮生は。武州熊谷にて卒去せしと云は非也。則東鑑に。承元二年戊辰歲九月三日。熊谷小次郎直家上洛す。是は父入道。來る十四日東山の麓に於て。執終すべしと示し下す間。是を見訪はんが爲といふ。進發の後。此事御所中に披露す。珍重の由沙汰有。然るに大江廣元曰く。兼て死期を知る事。權化のものにあらずんば。疑ひあるに似たりといへども。彼蓮生は。塵世を通るの後淨土を欣求し。願所堅固にして。修行を盡修す。よつて信ずべきと云り。全十月



一日。東平太重胤京都より歸參して。則御所に召る。洛中の事共を申。先熊谷次郎直實入道。九月十四日未の刻を。終焉の期たるべきよし相觸るの間。當日に至て。結縁の通俗東山を圍繞す。時刻に袈裟を着し禮盤に昇り。端座して合掌し。高聲に念佛を唱へて執終す。兼て聊も病氣なしと云へり。果して廣元が詞の如し。然ば蓮生は權化者か。尊べし。然るに往古尾陽の太守。武州熊谷の驛を通り給ふ時。熊谷寺に立寄給ひ。蓮生の木像を見給ひ。汝戰國に生れ。武を捨て遁世す。勇士の本意にあらず。卑怯者こと。扇を持って木像の頭を打給ひしとかや。日本一の者頼朝公の稱美に預りし熊谷が。死後の耻辱是非もなし。誠に直實遁世逐電の節。走湯山の住持専光坊。海道におゐて直實に行逢ひて。書狀を以て諫言しける。其略に曰く。貴殿出家の後。道を起し遁世有べきよし其聞あり。此條冥慮を道するに似たりといへども。頗主命に背く。凡そ武の家たれ。弓馬にたつさわる身の習。身を殺す事を痛ます。偏に死に就ん事を思ふは。勇士の取所也。今入道せしめは。仁義禮に違ひ。累年の本意を失はんが如し。出家遁世の義有といふ共。元の如く本性に還らしめんか。君然らずんば物議に不背。天意に叶べきならん。是をせん事いかやと書たり。此狀則東鑑に見へたり。是を以見れば。尾陽公の。蓮生が木像を辱しめ給ふも理也。元來直實は。一朝の念に忍びずして。遁世しければ。誠の道にはあらず。去共生得律義にて。西方阿彌陀佛の居る事とだまされて一生くらしつ則歌に

淨土にも剛のものとや沙汰しけれしにむかひて後ろ見せねは

斯讀て。馬上にても西をいとひ。逆馬に乗て往來せし馬鹿也。逆馬は左もあれ。歩行には嘸あかしからん。又蓮生歌に

いにしへの鎧に勝る紙ころも風の射る矢も通らざりけり

誠に殊勝なる歌也。されども此法師は。やゝもすれば昔の勇氣を出し。物あらしき振舞ありしとかや。大原問答の時。鉈を引提出しは。殺生戒を犯す覺悟。いと淺ましと思へども。木樵水汲み師に仕し。雷山童子の例に倣ひ。薪水の勤に携し鉈ならん。罪ゆるすべし

(廿二) 長明

長明は加茂の禰宜長繼が子也。南太夫或は菊太夫と號す。和歌管絃の道に長し。世に稱揚せられける。一旦加茂の社務職を望し所に。勅免なきゆへ。恨み慣りて薙髮し。蓮胤と稱して。洛外大原に退遁す。土御門院の御宇建仁元年。後鳥羽院上皇和歌所を置れ。寄人に辟されしが。幾程もなく辭して退去す。其後又。舊職に復すべしと勅ありしに。辭して出ず。和歌を詠じ志を述べ。東南北越の間にさすらひ。建永承元の間。幽居を日野の外山に移して一室を造る。縱横僅十笏高サ七尺に盈たず。鈎鎖自在にして。東西南北意の適ふ所に隨ふて移す。其具纒に兩車に



載る計之。外山に石床あり。方丈石と名く。或は仙人石といふ高サ貳丈計。其上平にして十八人座するに易しといふ。凡長明著す所の書。名抄四季物語伊勢紀行。鎌倉道の記は。仁治三年の秋。鄂曲の好士關東へ下向せし路次の紀之。海道記も貞應二年の集にて。長明が遺稿に非ず。或説に。海道の記は藤原光行が作書にして。此記の歌ども。夫木集彼此數首。皆光行が東行の歌と云へり。彼外山の石床には。後鳥羽上皇二度御幸有しとかや。誠に稀有の事に覺之。然しなから長明。社務職を望で。叶ざるを憤り遁世せしは。公を非とし己を是とし。世を謗るの振舞。不義非道の罪ならんか。殊に神職の身として佛道に入りしは。神明を蔑にするの罪。且先祖數代の家職を捨る不孝の罪。又後鳥羽上皇和歌所の寄人に居られしを。程なく辭して去り。重て舊職に復されしを諾せざるは。違勅の罪に非ずや。渠一朝の憤りに因て遁世せしは眞實の發心にあらず。元より佛も嗔恚を戒め置たれば。佛意にも叶はず。日野の方丈室の巧なる所爲も。桑門の本意にはあらず。むかし佛頃和尚。野州雲寺の奥に庵を結て

堅横の九尺にたらぬ草の庵むすふもくやし雨なかりせば  
 誠まことに桑門そうもんの栖すまかは。雨あめだに漏こぼらすは足りぬべし。何ぞやむつかしき室むろを作りて。彼是持運ぢうんは煩わづらしかるべし。元より一所不住いっしょじふぢうの境涯きやうがいなれば。心の止まらざる所をば。庵いかりを捨て去るべきに。持運ぢうんぶとは桑門そうもんには似合ぬ所行なり。渠の方丈記ほうぢうきに。麓ふもとに柴の戸あり。則是山寺の居所きよ所。彼に小

童あり。時々來りて訪ふ。然る時は渠を友として遊び歩行く。渠は十六歳我は六十歳之。齡としは殊ことの外なれども。心を慰なぐさむる事は相同じと云り。或説に。此小童は長明が若衆なりと云り。是又俗説にて取とり足らず。然共諺ことわざに。灰はいにならぬは止とどまるは色欲しきよくくと云り。渠元來一旦の憤りに仍なほて世を捨すねれば。道成堅固どうじょうけんこ覺束かくすくなし。いはれざる名聞なもんの望のぞみに仍なほて。公を恨うらみて山籠やまかごりすと云り。苔こけの色替いろか松風の音を讀よみせし。古歌の風情ふうせいにやありけん

(廿四) 圓觀

後醍醐天皇。北條相摸守平高時入道宗鑑そうかんを御征伐の御穩謀いんぼ露顯ろけんしける折ふし。法性寺の圓觀上人勅しつを承りて。高時たかときを調伏てうふくせし罪つみに依より召捕めいとれ。鎗倉やぶらへ引れて。水火の責せきに及およべき所を。圓觀の影かげばふし障子しやうしに移りしに不動明王の尊影そんえいを顯あらわしけるを。人々奇異の思おもひをなし。其旨斯そのこころし申まをすれば。高時たかときも前夜の夢想むせうに示現しげん有し故。感歎かんとして。拷問がうもんを宥なだめしとかや。高時入道たかときか關愚かんぐは論ろんするに足らず。圓觀えんくわん誠に不動の化身けんしんならば。高時たかときを調伏てうふくするに及およばず。明王めいおうと顯あらわれ降魔かうまの利劍りけんを以もて。高時たかときを始め敵の衆類しゆるいを。悉みづかく塵ちりにして成なども。天子の震襟しんきんを安やすし。萬民の愁うれひを救すくん社しゃ。神佛の大慈成だいじへきに。調伏てうふくと云は祈いのて人を亡なすには非あらず。其心を調伏てうふくするといふて。人の惡わるしき意いをよく教戒きやうかいして。我われに隨したがはしむるを云いふ。元より佛は殺生ころしを戒いめ。神は非禮ひれいを請うかひ



給はすされば社。不動の化身たる利生なり。圓觀因となり。曾て佛力も顯れず。影ぼふしを見  
せて拷問を遁しは。不動には言甲斐なき心なり。彼圓觀上人の影ぼふしの事。太平記の評にい  
へるは。圓觀鼻高く頬骨高く瘦て口廣し。灯の影にて障子にうつりしは。誠に怖しく見へすら  
ん。但不動と言しはいぶかし。按するに圓觀上人めが影ぼふしを。障子に移せしは。愚者を欺  
く手づまならずや

(廿五) 兼好

兼好姓は卜部。吉田兼顯か子之左衛門督兼好と號す。後宇多院の北面にして。文才有り和歌を  
能す。往昔頓阿慶蓮淨辨兼好を和歌の四天王と稱す。後宇多院崩御の後遁世して。法名を直に  
兼好と號す。洛湯東山吉田に閑居し。今に其舊跡残れり。兼好元來神道は其家に習ひ。歌の道  
は二條の門弟にて詠歌多く。代々撰集に入れり。且天台の學に達し儒經を學ひ。殊に老莊の道  
を好み。唯の日和語の双紙を作りて徒然草と名付。和文の好書成に依て。世々の才人註解し  
て稱美せり。誠に兼好か夢後の幸と云へし。併兼好神道の家にして佛道に入るは。長明と同じ  
き白癡者也。たどひ世を通るゝとも。家風の神道を守て。其道の教となるへき書を著し。或は  
天下國家の政道に益ある事を記し置は。誠に大功成るべきに。詞花言葉を飾り。無常變易の理

をのみ旨とする書は。神國の罪人之。或説に。徒然草は人の心持を能列たるもの之。但し兼好  
時代は亂世にして。自然の句の中に述懐を含り。長明が書にも然り。常に翫ぶ人自然と述懐の  
心を生ぜり。惜むべしと云り。實に人の心は。白糸の染れば染るものにして。彼草紙の。萬い  
みしくとも。色好さる男はいとぞく敷て。玉の扨にそこなき心地ぞせらるゝと書るは。人をし  
て好色に導く詞にあらずや。尤末に至て。色を能く戒て書たれども。凡貴きも賤きも。色を好  
まざるは稀にして。人情惚て。好む方には染り易きものなれば。斯く色欲妖艶の詞を書る事は。  
甚人の害也。思ふに兼好は。元來好色淫風之士と見へたり。去ば高師直が。鹽屋高貞の妻の許  
へちくる不義の艶書を。兼好師直に代りて書し事。太平記に見へたり。此事を林子の本朝遷史  
に。信に一生の過端なり。慨惜すべしと云り。此一事をさへ一生の過ちと惜れしに。或説に。  
兼好遁世の後。從弟の伊賀守成忠に招れ。伊賀國へ立越住むしける比。忠成が妻に密書をおく  
りしと云へり。此事駿臺雜話にも見へたり。又兼好物語といふ双紙には。勢州桑名の住人伊賀  
守保古が女辨の君と云るに。密通せし事を記せり。蕪染の身として。破戒無慙の罪人成べし。  
是を以て見れば。兼好も正しき法師にては有べからず。誠に桑門も飲食男女の大欲には忍難き  
ものにてや。兼好東山に遁れて。松丸に命じ花菴を織り閑居の便としけるは。内證逼迫と見へし。  
同法師の許へ時借の無心に。米給へ錢もほしと云事を。句に讀て遣しける。



夜もすし寝さめのかりほ手枕もま袖も秋にへたてなき風  
頼阿返事に。米はなし錢少しといふ事を讀り

夜もうしねたるわがせこはてはこずなをさりにたに志はしとはませ  
是等の振舞風雅なる所爲と云ん。たいし口上にも濟べきを好む事の仕かたといはん。頼阿が  
使を待せて返歌をあんじけるもいとわづらひしからめ。

(廿六) 頼政

頼政は兵庫頭源仲正の男也。射藝に達し和歌を能す。保元平治の亂に軍功有りしか共。させる  
恩賞にも預らず。仍て怨を含みながら。大内守護にて。年久しく勤仕ありけれども。昇殿を許  
されざりし故。述懐の和歌を詠ず

人知らぬ大内山の屋漏もりは木隠れてのみ月を見るかな

此歌によりて昇殿を許され。正四位の下にて有しが。猶三位を心かけて

登るべきたよりなき身の木の元にしひをひろふて世をわたるかな

斯詠して。七拾五歳にして三位に叙せられ。専途を遂ぬとて。薙髮して源三位入道頼圓と名乗。  
其外和歌の譽數多にて計るべからず。誠に文武兼備の良將といふべし。然しながら述懐の歌を

讀て昇殿をゆるされ。或は三位に進たるは。和歌の功は去る事なれ共。我身の功を。君の御見  
だしなきとを恨み述懐し。歌を以て君の御誤りを糺して。官位に進みしは。上を犯すの罪に似  
て。武臣の本意にあらざるべし。保元平治の忠戦といへども。天下の耳目を驚す程の功もなし。  
然るを僅の功に便りて。恨述懐の歌を以て。官位を貪りしはいと拙なし。彼九郎義經。朝敵退  
治の大功によつて。昇殿を許され。官位昇進しけるとは。武門の名譽と云べし。和歌を只よみ  
て己の欲をなす。歌の上手は骨折すして。願望心の儘に成べきや。頼政武將として。武を以て  
稱せられず。詞花言葉のもて遊びを以て賞を遂しは。歌道にては藻様ならめ。武道においては  
本意にあるまじきか。仁平應保には。天子を惱し奉る化鳥を。鳴絃を以て退けしは。先祖に耻  
さる功。是ぞ武門の眉目たるべし。然るに頼政の嫡子。伊豆守仲綱か秘藏しける。木の下鹿毛  
といふ名馬の事に依て。平宗盛に憤りを挟み。平家を亡さんとの志を起し。高倉の宮に御謀反  
をすしめ參らせ。卒爾に大義を思ひ立て其志をどげず。曾世の煩ひ諸人の歎身の爲には家を失  
ひ。宮にも生害なさしめ。身を亡したるは。本意ならまし。仲綱彼の馬をおしみけるによつて。  
宗盛に耻しめられしとかや。昔漢の文帝の時。一日に千里つゝ行馬を。献するもの有りしに。  
文帝笑て。我吉行には三十里。凶行には五十里にして。鸞輿前にあり。屬車後にあり。我獨り  
千里の騎馬に乗て。何國へか行んやと云て。其馬を返されしと云り。吉に行は巡行祭禮をいふ。



凶に行どは兵を出す事をいふ。實や名馬に乗つて。我獨先驅したり共。續く兵なければ危し。但し、遡るには調法なるべし。周の穆王八疋の駿馬を愛して。王業衰へたりと云ば。仲綱木の下鹿毛も。房星の精成るか。頼政私の宿意に仍て。高倉宮に御謀反を進めしは。元より忠義に非らず。其上云かひなき僧法師を味方に頼て。強敵の平家を討んとしけるは。迂濶とや云ん。去ばこそ山門の衆徒心替て軍利なく。終に宮をも失ひ。家をも亡しける社口惜しけれ。然れ共最期の有様勇にして。辭世に

うもれ木の花咲事もなかりしに身のなる果は哀れなりけり

斯詠せしは。流石日頃嗜し道とて。斯る時節秀歌を讀は。哀れに優なる振舞ふ。或説に。頼政辭世に。身のなる果はあはれなりけるとつらねしは。哀れならず天晴なり。頼政は源家の正統にして時に遇す。一生涯空しく埋れ居たるに。今高倉の宮の爲に討死するは。天晴勇士の本意とといへる心にて。詠したる歌なりと云へり。我元より歌道にくらければ。そしるべき言葉もあらず

(廿七) 重盛

小松内大臣重盛は。相國入道清盛の嫡男也。其性寛仁にして。文武忠孝の朝臣なり。依て此人

を尊び。日本の賢人と稱しけり。併我が謗草の偏見を以て論せば。重盛を日本の賢人とは。甚褒過たる詞なり。去は平治の亂に。平家へ頼朝を生捕。誅せず東國へ流せし事は。重盛の誤りなり。縱令池の禪尼の仁心に。黙止がたく助るども。重盛彼吳王夫差が。越王勾踐に亡されし例を顧み清盛を諫て。速に頼朝を誅せざるは智なし。諺にも。敵の未は根を断て葉を枯すといへば。誅すべきに。果して頼朝。平家追討の義兵を揚し時。大庭三郎景能。早馬を以て福原へ注進しければ。清盛大に驚き。東國の諸士頼朝に附屬すべし。元來家人なり。いかでかむかしの好みを忘るべきか。然るに頼朝を東國へ流しけるは。八ヶ國の家人に頼朝を守護し。清盛を亡せと云が如し。盗人に鍵を預け。千里の野に虎を放せしが如しと。座にもたまらず踊り上り踊り上り。悔まれしとかや。か様の事は偏に重盛遠き慮なき過失なり。然るに或説に。平家にて頼朝を助しは。重盛の誤りにあらず。却て深き賢慮也。其子細は東國の諸士は。皆源氏舊好の家人なれば。平家頼朝を殺して。源氏の根葉を絶なば。東國の諸士憤り深く。天下の亂をなさんば必定と。爰を以て頼朝を助け。然も國も多きに。能と伊豆の國へ流せしは。關東武士の憤りを宥める謀なり。然して重盛仁徳を以て。東國の武士に恩を施し。平家へ歸服させ。能時節を計て。頼朝をば失ふべきとの密計なり。去によつて。東國の諸武士。追々に平家へ歸伏し。伊東祐親長井實盛等。平家無二の忠臣となれり。然れ共短命にして。此謀略空しく成り



しと云り。此説強て重盛の非を防ぐに似たり。恐らくは。妄説ならん。重盛下知して頼朝を殺せば。東國の士憤りて亂に及ぶ事を思はば。初より東國の方へ流人の沙汰有べきや。朝敵義朝の子なれば。助べき道理にあらず。死罪に決したるを。池の禪尼の歎き黙止がたくして。助けし事あきらけし。若重盛斯の如きの謀あらば。頼朝數年流人の間。祐親に示し合せて。不意闇討毒殺杯の秘計有べきに。其事なきは重盛の怠りか。せめては病中に此謀を。嫡子維盛を始。一族郎從にむかひ遺言して。死後に成りとも。謀成就なきしむべき。然るに其沙汰なきはいかにぞや。然る時は此説妄説成る事必せり。以前治承の始。後白川法皇の寵臣新大納言成親。清盛が逆意を憎んで黨を催し。平家を討んと計りしに露顯して。成親を始め數十人。或は死刑又は流罪せしが。尙法皇を駭し奉らんと。清盛甲冑を帶し軍兵を催すよし。重盛聞て入來り。清盛を諫けれども聞入らず。依て重盛急て家に歸り。兵を集め法皇を守護せんとて。清盛を驚しければ。清盛恐れて怒を解き。忽驛動鎮り。法皇危難を遁れ給ふは。重盛の謀略にして。清盛が暴逆を押へ。朝廷を安し奉る。誠に日本の賢人なるべし。しかしながら忠義の爲に謀とは云ながら。兵を集て父に敵すべき跡を見せ駭かし。威を以て父に勝しは。勝母の里を過らざる孝子の心にはあらず。然れば忠孝全く成し得たるとは云れまじ。又重盛は後世の苦を悲しみて。來世の營他事なく。常に住ける所に。四方十二間の家を建て。四方に四十八間を點じ。一方の

十二間に。十二光佛を一鉢宛立たりければ。四方に四十八鉢の十二光佛あり。其前毎に常燈を點じければ。四十八の燈籠屋の如く。年十七より二十歳迄の美女四十八人。常燈一ツに壹人宛付て。油をそへ燈をかゝげさせ。日没に成ぬれば。衣裳花を飾り蘭麝を薫じて。禮讚念佛して。鼓銅拍子を囀し今様を飄ひ。四十八間を廻らしけり。重盛は中段に座して是を聽聞す。依て重盛の異名を。燈籠の大臣と云ひしとかや。是又賢人に似ざる花美風流の振舞は。いかなるぞや。今の世に日蓮宗の僧俗會式。又一向宗の御講とやらの如し。藏れたる事にて諸人寄集る。大たはけ也。心ある人は爪彈をせり。况や賢人と呼らるゝ重盛。文盲無智の所業は何事ぞや。元より聖賢甚だ好色を惡み。佛も尙戒しむ重盛後世の營に。美女を集め今様を唄ひ。人の心を蕩かせ。色欲を媒としけるは。善事には有らで惡種なるべし。殊に三公の位に昇り。日本朝臣の重職を汚し。其上に燈籠の大臣と異名を呼らるゝは。博奕打又は山師の類に劣りし大たはけ。甚歎はしき事にあらずや。又重盛の。老父清盛頼朝の爲に。首討らるゝぞと夢見て。平家の末覺束なしと。今生の事を思ひ。偏に後世の事を祈り。紀州熊野山に參籠して祈けるは。父清盛の惡逆を翻して。天下安全を得せしめ給へ。若平家の榮耀一期を限り。後日耻を得ば。重盛が運命を縮て。來世の苦患を助け給へと。丹精を碎き。祈念再拜して下向しける。歸京の後幾程もなく惡疾を病て。追日頼なきよし聞へければ。清盛甚だ歎き。越中次郎兵衛盛次を使として申けるは。



何とて今迄療治なきぞや。老たる父母に先立は不孝也。此頃もろこしより。名醫渡りて今津にあり。召寄て療治すべしと有ければ。重盛は盛次に對面して。我此病を受ける事は。熊野權現宿願納受疑なし。親に先立は重盛一人に限らず。必歎き給ふべきにわらず。若異國の治術にて存命せば。本朝醫道なきに似たり。若又彼が醫術驗なくば面謁詮なしと。殊に我三公の位に居て。異國浮遊の來客に見へん事。且は國の耻辱を顧ざらんや彼是以て其義に及べからずと返事有て。頓て出家を遂て後世の勤他事無りしが程なく終に四十三歳にて去り給ふとかや。是又賢人には似氣なき振舞なるべし。重盛父の惡逆によつて。平家の滅亡遠らぬを悟り。慙じひに永らへて成行を見んよりは。熊野權現へ命を縮る祈誓しけるは。孝道の本意にて有まじ。既に虞舜は。父の瞽叟頑に。母嚮しくて然も繼母之。腹替りの弟象は奢りて無禮なり。舜よく是に仕へて至孝と云り。然るにやしもすれば。舜を殺んと計りしを。舜又方便を以て危難を遁れ。身を全して益孝を盡し。終に父母共に善に化せしめけるとかや。清盛惡人と云ども。瞽叟の如く重盛を憎まず。子ながらも恥ぢて惡行を。思ひ止る事有之と見へたり。然らば重盛身を全して父を諫め。舜の如く父清盛を善に化せしめ。朝家安んじ奉り。平家長久の謀をなさば是誠に忠孝全き賢人なるべし。平家の後榮たのみなきを見限て。主上を始め奉り。父母妻子兄弟一族郎等を見捨て先だち。親族の歎きを顧ず。跡は野となれ山となれと思て頓着なきは。君臣父子

夫婦兄弟の實義は微塵もなく。不忠不孝不仁不義の甚しきにあらずや。其上清盛の慈愛の志しに背き。異國醫師の治術にて存命せば。本朝に醫道なきに似たりと云しは心得ず。日本の醫道は。神代には大己貴命と少彦名命と。醫業を民に施し給ふといへども。醫書は傳らず。二神の醫術を傳へたる人もなし。今世行るゝ醫道は欽明帝の御宇に。百濟國より。醫の博士并採藥師來朝して。醫師を日本へ傳授す。此時欽明帝。異國の醫術を用ひ給へば。日本の醫道なきに似たりと恥給はひ。用ひ給ふべからず。然れ共恥給はぬこそ。今に至るまで。唐の良醫の著したる醫書を以て療治し。藥種も唐物を貴とす。其外諸道具よろづの物。多く異國より來るなり。然れば重盛。異國の醫の療治とて。存命したれとて。何の日本の恥ならんや。既に昔唐の帝の後惡瘡を病で。諸醫の力に及ばず。日本の典藥の頭雅忠を。名醫と聞傳へて招きける由。是唐にても。醫なきに似たりと恥ずと見へたり。重盛三公の位に居て。異國浮遊の來客を見ん事。國の恥家の疵と云しは其意を得ず。凡三公の職は。世に埋れ居る人にて。賢能さへ有ば。たとへ下賤の者たり共。其徳を尊て君に吹擧し。國家の寶とすと見へたり。况や醫師は。縱令異國のものにもせよ。良醫ならば擧て用ひ。君に進め奉りて。日本の寶とすへきを。却て渠に見ゆるを國の恥辱なりといふは。三公の職を忘れたる。但必死の覺悟ゆへ。療治を辭せられしか。當座遁れにせしか。去ばこそ重盛は。異國より來りし妙典といふ船頭を頼。唐へ砂金三千



雨を渡わたて。宋朝そうてうの帝てい并ひ育いく王わう山ざんの衆徒しゆとに送り。我わが爲ために育いく王わう山ざんに堂だうを建て。供く米まい所じよを寄進きしんし。永えいく重盛じゆせいが菩提ぼだいを吊つらひ給たまはるべしと。檜ひのきの良材れうさい壹艘いつそうを運送うんそうせり。妙典めうてん歸國きこくして。重盛じゆせいの詞ことばの如ごとく計けいひければ。宋帝そうてい并ひ育いく王わう山ざんの僧侶そうりふ甚せい隨喜ずいきして。彼山かざんに堂だうを建て供米所くまいじよを寄進きしんし。永えいく重盛じゆせいの冥福めいふくを修しゆしけるとかや。是偏こゝろに愚夫ぐふ愚婦ぐふの所行しよぎやうにして。國くにの恥身ちみの恥ちを唐たうへ顯けんす振舞しんぶ。歎なげくに堪かたり。彼遊客かぎやくの醫師いしに見ゆるを恥ちへき程ほどにて。此恥こゝろを思おもはさるや。察さつするに重盛じゆせいは。平家へいけ亡なびて源氏げんじの代しろとならば。跡あと吊つららふものも有あまじと。唐たうへ黄金わうごんを贈たまひ。まさなき事をせしと見みへしが。せめて父母親族ふぼしんしゆくの菩提ぼだいの爲ためにと云いば。孝けうの端はしとも云いべきに。父母ふぼには曾そて頓着とんちやくなく。我身わがみ計けいり永えいく菩提ぼだいを吊つらはれんとは。不孝ふけう不義ふぎの志憎しそむに堪かへたり。凡たゞ菩提ぼだいを吊つらふ人は。此世こゝろにて善根ぜんこんなく。地獄ぢやくの苦くるしみを受うるを。追善ついでんの功德くふとくによつて免まぬれ。佛ぶつに成事じやうじと見みへたり。然しからば賢人けんじんと云いれし重盛じゆせいも。地獄ぢやくの苦くるしみを受うべき覺しやく有ありて。罪つみを遁にれん爲ために。育いく王わう山ざんにて。永えいく菩提ぼだいを吊つらはれんと計けいりしか。實じつに重盛じゆせい命いのちを縮ちぢめ祈願きげんをなして。親おやに先立さきたちし不孝ふけうの罪つみによつて。地獄ぢやくの苦くるしみを遁にれまじ。盲めう無智むちの者ものさへ。親おやに先立さきたち事を悲かなしみ。身みを全ぜんふして父母ふぼの終しゆうを見届みと度たと。平生へいぜい心懸こゝろするは。自然しぜんの恩愛おんあい之情じやう。去いは往昔わかし。小式部せうしきぶの内侍ないし病重びやうじゆうく。人の面おもてを見分みわ難がたき程ほどになりて。頼たのみなく見みへければ。母ははの和泉式部わいせんしきぶ。額ひたいをあさへ涙なみだを流ながしけるに。小式部せうしきぶ目を少すくしひらきて。母ははの顔かほつくくくと見みて息いきの下したに

いかにせん行へき方もおもはへず親に先立道をしられぬは

斯弱そじやくりたる聲こゑにて吟ぎんしければ。天井てんけいの上うへに聲こゑして。あら哀あはれと云いけるか。夫おとこより病心びやうしんよく本服ほんふくしけるとかや。是偏こゝろに小式部せうしきぶか。親おやに先立さきたち事を悲かなしみ詠歌えいかせしを。神明かみかみ感應かんとうありて。應護おうえありしと見みへたり。本もとより神かみは非禮ひらいを受うず。熊野くまの權現ごんげん何なにぞ親おやに先立さきたちつ不孝ふけうの祈願きげんを。納受なうじゆし給たまふべきや。然しかるに重盛じゆせい惡瘡あくそうを病びやうみ。權現ごんげんの納受なうじゆと思おもひしは甚せいだ愚ぐなり。清盛せいせいが頼朝たのちゆうの爲ために。首くびを討うれたる夢ゆめを見て。平家へいけの滅亡めつわうせん事を考かんがへ。頼朝たのちゆうを早速さつそくに亡なすべきを。却かへて我命わがいのちを縮ちぢめ。父母兄弟親族ふぼあにけいしゆくを。悉ことごとく頼朝たのちゆうに殺ころさるゝを顧かへみざるは。豺狼さいろうの類るいにして。妄あやを信まをじけるは小人せうじん。然しかるに。重盛じゆせいは日本にっぽんの賢人けんじんなりと稱たのして。源平盛衰記げんへいせいすいきに褒美ほうびしたるは。其行そのぎやうを見るに。相國さうこく入道にゆうだうが。法皇ほふわうを犯とがし奉ほうらんとせしを諫いさなたる外ほかには。皆寂滅さいじやくめつの教きやうに迷まよひて。婦人ふじん愚父ぐふの振舞しんぶにひとしく。夫おとこが中に燈籠とうろうの大臣だいじんと。拙つたなき異名いみを呼よぶこそ。末代まつだいの耻辱ちよぶなれ。古語こごに聲色せいしきの進しんぬひをうつて。名なは躰たゝみを顯けんすの徳とくありと云いり。宜哉いざ見みぬ世よの人の異名いみを聞きき。其顔そのかほかたち志こゝろも。推おし量りやうなす心地こゝろせり。去いは關白せうはく通長つうちやうは御堂みだうを建立けんたつして。御堂みだうの關白せうはくと呼よぶ事ことは。名聞なもん苦くるしみしき後世ごせいを願ねがひて。金銀きんぎんを無量むりやうに費つらしたる。奢おごりもの思おもはれて。いと淺あはまし。空海くうかいか。左右さうぶの手てと足あしと口くちとに筆ふでを採とりて。曲書まがくして。五筆ごふで和尙わしやうと呼よぶは。先年せんねん見みせ物ものに出いたる。嶋金しまきん大夫だふといふかたはもの。足手あしでに筆ふでを持もて。文字もんじを書かたるに同おなし。名僧なそうには似氣にきなき事こと。永線えいせん和尙わしやうかほど



しきすの秀歌に仍て。初音の僧正と呼るしはいとやさし。返すくも重盛が燈籠の大臣と。拙き異名を取て。一生の徳を失ひけるそ恨なれと。歎息

(廿八) 頼朝

頼朝は左馬頭義朝の三男にして。母は尾州熱田の大宮司。散位藤原季範か女なり。然るに頼朝雅名を免武者と號し。又同國幡屋と云ふ處にて生れし故。幡屋の武者王とも云り。雅かりし時より凡人に非ず。其頃出羽郡に源高能と云者。武者王か容貌を見て。其氣相尋常ならず。此幼童必天下の權を取へしと云し事有。然るに武者王九六歳に成し時。佐々木源藏秀義見參せし折から。若君に持遊を參らせんが。御望の物あらは宣ふへしと云けるに。武者王聞て。いやとよもてあそひは望にあらす。能き家人こそほしけれど。答られければ。秀義大に感して。此若公は天晴武將の器なり。末頼母しと悦ひけるとかや。誠に松は寸にして棟梁の機ありと云へり。去ば子を見る事父にしかず。義朝も牛を食氣あるを見て。生長して武家の棟梁と成べきものなりとて。武者王と名付。源家累代の重寶。源太が産衣の鎧と。髭切といふ名劍を。嫡子源太義平には譲らずして。武者王に與へ。元服して則右兵衛佐に任じ。頼朝と號せり。然るに平治合戦の時十三歳にて出陣し。義朝にむかひて。平家は早向ひ候はん。人に先をせられんより。先

づ六波羅へ押寄べしと云しは。先んずる時は人を制すといふ兵法に叶ひ。自然と元帥の器なり。既に合戦に及び。敵二騎打取。壹騎に手を負せ。進んで駈けるが。終に軍利なくして。義朝に隨ひて東國へ落けるに。終日の軍に疲れて馬疲れて。義朝におくれ。唯一騎落ける處に。江州守山の驛にて。雜人數多落人を生捕らんと。大勢にて取込しに。源内兵衛と云もの。頼朝を馬より引下さんとする處を。真向二つに割付。猶も近寄る雜人ばらを切散しける。勇猛の振舞感ずべし。斯くて爰かして漂泊して。江州淺井郡の民家に隠れ。身を全ふしけるは。誠に賢き振舞也。然れども。終に平家の侍彌平兵衛宗清に生捕られ。誅せらるべき所に。清盛の繼母池の禪尼。愛子家盛を先立常に歎きしが。頼朝の容貌を見て。家盛の稚立に能似たるよしにて。哀れに思ひ清盛へ命乞せらるよし。頼朝聞て。先立たる父母兄弟の爲と稱して。手づから卒都婆を作りし事を。禪尼聞及て。いよくあわれに思はれしとかや。是偏に池の禪尼の心をとる謀とかや。恐ろし。案の如く禪尼此よしを聞。哀憐いやまして。頻に命乞有ければ。清盛止事を得ずして死罪を宥。伊豆の國へ流しけり。然るに東國へ下向の路次にあゐて。近江國建部明神へ通夜しけるに都より従ひ來りし上野源吾盛安。其夜あらたなる靈夢を蒙りしは。頼朝天下の主將と成るべき瑞夢なりければ。甚だ悦びて。翌朝頼朝へ夢物語りしけるに。頼朝心中には悦ぶといへども。何の返答もせざりしは。我身の吉夢を沙汰し。平家へ聞へば。身の爲惡しか



りなんと遠慮と見へたり。頼朝此時十四歳。いまだ幼弱の身として。斯る賢慮誠に凡人にあらざ。然れども伊東次郎祐親入道が館に在し時。祐親が娘と密通して。男子を設たるは。平家の後聞を恐れざる振舞。以前の遠慮とは大に違ひなり。去ば社。果して身の大事に成しを。伊東九郎祐清が情によつて。危難を遁れ。北條時政に身を寄せけるが。爰にても時政が娘と密通しけるが。前非に懲ざる危き振舞なりしが。深き奸計有て。僥倖にして禍を免れたるべし。思ふに頼朝は。甚だ好色淫風の人と見へたり。去れば頼朝兄悪源太義平の妻は。新田大炊介義重の娘。義平落命の後。父義重の許に有しを。頼朝懸想して。伏見冠者廣綱を以て。艶書を贈りけるに。許容せざれば。父義重に申入らる。義重元來思慮深きゆへ。頼朝の御臺の後聞を憚り。俄に彼娘を師六郎に嫁しけり。是に依て義重は。頼朝の氣色を傷りける由。東鑑に見へたり。頼朝の心に。兄嫁をもとつて我妻にせんと欲するは。親兄の禮を失ひ。兄を辱め。骨肉同胞の肉を絶しけるは。人倫の振舞に非ず。此一事を以頼朝の心中を知べし。斯て無道の心より。舍弟範頼義經を始め。親しき一族を亡して。事を欺き天下の權を奪ひ。讒を信じて。忠臣を罪し。讒を後代に残せり。去ば頼朝の不仁不義の行跡。算ふるに暇なし。頼朝奸計を以て。天下を掌握するといへども。纔か二十年にして薨じ。嫡子頼家武將に任じ。僅か五年にして。時政が奸計を以て。伊豆の修善寺に於て害せられ。次男實朝世を取て。十七年にして。惡禪師公曉

の爲に。鶴ヶ岡におゐて横死す。是また北條が奸計なり。斯て頼朝父子三人。僅か四十餘年にして家名斷絶して。天下の權は北條の掌に落たり。是ひとへに頼朝の積惡の宿報にあらざや。林氏七武に云く。頼朝口に蜜あり腹に劍あり。而して忍ぶ人なりと。其功清盛より大にして。其罪清盛より重しと云り。頼朝口に蜜あり腹に劍あるは。唐の林甫の類なり。蜂飼のものが見ば甚だ愛すべし。

(廿九) 義經

義經は左馬頭義朝の末男にして。母は九條院の雜色の女常盤也。義經は稚名は牛若と號し。平治の亂に義朝敗軍して。長田忠致が爲に生害して。一族悉く亡び。牛若いまだ櫛椽の内にて有て。母の常盤容色勝れし故。清盛に寵せられ。是によつて牛若刑戮を免れ。漸成長し鞍馬山東光坊に身を寓て勤學せしが。常に報讐の志しありて出家を厭ひ。兵術に心を委ね。十六歳にして潛に鞍馬を出て。奥州に至り藤原秀衡を頼み。首服して九郎義經と號し。治承四年。舍兄頼朝平家追討の義兵を上ると聞て。奥州より發向して。駿州黃瀬川におゐて頼朝に謁す。頼朝甚だ悦び。則軍將として木曾義仲を誅し。次に平家を討しむ。元來義經武畧に長じて。奇計妙術を廻らし。大敵を亡し。其勢普く天下の口實にあり。依て元暦元年五月六日。從五位下左衛門尉



に叙し。則平家追討使の宣旨を蒙り。九郎判官と號す。是一の谷戦功の賞と聞へり。同十一月十一日院參の節。昇殿を許さる。同二年平家悉く滅亡して。四月廿五日神鏡神璽西海より還幸。朝廷に入御し給ふ。則義經供奉有て。同廿七日院の御廐別當に補し。同八月伊豫守に任ぜらる。段々の昇進は朝敵退治の忠賞と聞へけり。宜なる哉さしもの平家の強敵を。二年の間に塵になし。天子の震襟を安んじ奉り。父の仇を報じ。廢れたる源氏の家名を起し。忠孝を全くし功を遂しは。誠に古今無双の英雄と云べし。舍兄頼朝は居ながら日本の物追捕使と成て。天下の權を執しも。全くは義經の軍功によれり。然るにさばかり朝家に忠有て兄に孝なる義經。讒者の爲に亡しは命なる哉。かなしむに絶たり。奸臣は梶原景時なり。去ば末代の今に至り。兒女幼童に至る迄。梶原が讒言を憎て。既に景時くと嘲る。一向義經を哀悼して。諺に判官最負と稱するも。理義の仁心を感じしむる處にして。是れ則義經の陰徳ならずや。嗚呼痛ましい哉。義經。狡兎盡て良犬養られ。敵國定て謀臣亡る例を顧ず。身を保つ謀なきは如何ぞや。客四友先生不覺の落涙しければ。是を見て油煙公からくと笑て。先生も諺の判官最負にや。豈義經古今無双の英雄ならんや。世舉て梶原が逆櫓の遺恨によつて。義經を讒言せしを憎といへ共。逆櫓の論も景時が道理にして。義經の僻事なり。されば駈けべき時にか。引べき時に引退き。身命を全ふして敵を亡すこそ良將成るべけれ。一己の高名せんと危を顧ずは。暴虎馮河の類ひ

之。左によつて梶原は。舟軍の駈引自由を得ん爲に。逆櫓を立る工夫を廻らし。適れ能智恵なりと。定て自讃心にて談じけるを。義經は古老の異見を無にして。逆支度と嘲りしは甚だ無道之。平三景時辱られ。争てか忿り思はせざらんや。然し敵計を以討取んと。隙を知らざるは猪武者と嘲りて非禮の詞を放ゆへ。既に珍事に及ぶべき所。三浦島山寺無事に納めたり。元より平家追討の宣旨を蒙りたる義經。無益の論に大義を忘れ。梶原を討果して犬死せば。天子に不忠と云。兄頼朝に不義と云。敵味方の笑草と成て。尸の上の耻辱たるべし。其上檀の浦にて。梶原景季と先陣を争ひしは。大將の機にあらず。おもふに義經は其身の武勇にほこり。梶原を侮りて。先陣の望を片腹痛く思ひしが。梶原元來尋常の侍にあらず。既に生田の森の一軍に。梶原父子三人。武勇を振ひし有様は鬼神の如し。又平次景高一陣に進んで。大將範頼の下知をも顧ず。さしもはげしき軍中にて。取あへず一首の秀歌を詠じ。猶も進んで戦ひしは。文武二道の勇士にあらずや。兄源太景季一枝の梅花を籠にさし。三十餘騎に取籠られ事もせず。落花微塵に切ちらし。菊池三郎と組で首取たる武勇は。猶更籠の梅の風流を。平家方にも梶原が花籠と感賞しけるとかや。父の平三景時五百餘人にて。平家の二千餘人と戦ひしが。無勢なれば下手へ廻りて。颯々と引けるか。源太が生死如何と。又二百餘騎にて敵中へ駈け入。大きに武勇を震ひ。梶原が生田の森の二度かけと末代に譽れを殘せり。是を以て見る時は。何とて梶原



が義經の勇猛に劣るべき誠に一人當千の剛の者と稱すべし。然れども世人は。義經を讒しけるを憎て其美を擧ず。彼を毒虫に比して忌憎む。義經も又罪なきにあらず。頼朝元より口に蜜あり腹に劍あり。兼て義經武畧に長せしを。心中に忌憎む所に。朝敵亡びて京都靜謐に治り。天下安堵の思ひをなして。義經の武徳を稱し。殊に後白川法皇御覺いみしく。殿上人を始として。洛中の老若男女。哀れ判官殿の世にてあれかしと云あへる由。頼朝傳へ聞て心中快よからず。其上義經は平家の一族。平大納言時忠の尊となりしは。世を憚らざる振舞存の外と。憤り深かりしに。伊豫守に任せしは猶安からず。伊豫守は源家の先祖頼義朝臣是に任せられしより以來。源氏代々是を重んじて。任せらるゝ人なし。然るに義經一應の辭退もなく。伊豫守に成しは。頼朝に憚らず。天下を我儘に計ふ事。自立の志疑ひなしと。甚だ忿り強かりし折から。梶原讒言して燃る火に薪を添ければ。終に連枝の因を絶て。衣川の泡と消しは。淺ましき事。然しながら或説に。義經は實は生害せず。秀衡存生の内示し置たる密事にまかせ。潜に國を遁れ蝦夷へ落行。身を全ふせしと云へり。是正説なればいどかしこき謀也。又或説に。西海にて建禮門院を擒にして。歸路の折から。船中にて密通せしと云へり。此女院は清盛か女といへども。正しく高倉院の后にして。安徳天皇の國母なり。義經いかなれば。王位を恐れず世を憚らず。斯る絶倫のふるまい有ぞや。尤も此説とるに足らずといへども。義經は牛若丸といふ時よ

り好色淫風の聞へなきにしもあらず。又更に妄説にもあらざらん。義經才智有ながら。かゝる無道を行ひしは。諺の猿智恵にて。信の智はなき人によ。俗に義經は向ふ齒反りて猿眼といへは。自立して天下を執んと欲せしは。正眞の猿猴か月ならん

(三十) 時政

時政は桓武天皇の後胤上野介直方より五代の孫。北條四郎太夫時家か嫡男にして。北條四郎と號し。後遠江守に任ず。其性甚だ奸佞にして悪行多く。然るに世俗。時政は頼朝を駕にせしを以て。頼朝に忠有と稱して。時政を善士と唱ふ。伊東次郎祐親は。頼朝へ敵對しけるゆへ。祐親を悪人といふは。甚だ非なり。尤祐親はむかし舊好の源氏と云ども。平治の亂に義朝亡びて。時政に始として源家恩顧の關東武士。悉く平家に隨へり。中にも祐親殊に平家の恩深きゆへ。無二の忠臣と成けり。是に依て頼朝が娘と密通し。男子を一人設しを。平家の聞へを憚り。彼男子を殺して。頼朝を計らんとしけるは。曾て祐親が僻事にあらず。頼朝流人の身として世を憚らず。渠が娘と密通せしは。甚だ義に背けり。縱令尋常の者なりとも。密通罪すべきにあらずや。况頼朝は祐親平家より預りたる囚人なり。娘と不義せしを穩便に差置ては。平家へ不忠なり。是によつて彼兒を殺し。頼朝を計らんとせしは至極道理也。元來祐親は義士なり。治承



の亂に。小松中將維盛に屬して。賴朝を襲はんと計しが豆州鯉名の浦におひて。天野藤内遠景に生捕られて。聳三浦義澄に預けらる。義澄賞に代て祐親が命乞しければ。賴朝彼を免して謁見せんと有しに。祐親則義を守りて自殺せり。其頃關東武士の有様を見るに。源平兩家の色を見て。運を兩端に伺ひ。朝に味方と成り夕に敵となれり。其中に祐親一人。一旦平家に隨ひ恩を受たれば。始終こゝろざしを變せずして。賴朝に降らずして自殺しけるは義士なり。世俗強ひて悪人と云ふは非なり。古今絶類の悪人は時政之。既に賴朝伊東が難を避て。時政を頼みて居たりけるが。又彼が娘政子と密通せり。然るに時政在京して歸國の折から。路次にて此事を聞くといへども。知らざる躰にもてなし。兼て政子を伊豆の目代八牧判官義隆に。嫁すべき兼約なりしゆへ。急ぎ婚禮を整けるに。政子は賴朝に志深くて。八牧が館を遁出。賴朝の許に隠れ居けるを。時政是を知りながら。穩便にして差置ける。八牧に對して不義といひ。平家の後聞を憚らざる振舞。甚だ無道之。是偏に時政兼て賴朝の潜龍の氣有を見て。源氏の世を興すべき器量ぞと末を思て。娘が不義を辛として駕にして。平家追討の兵をすゝめ。力を合せて専ら志を盡しけるは。賴朝が驥尾に付て。己が家を興すべき佞謀にして。曾て眞實の忠義にあらず。されば賴朝薨じて。賴家武將に備るといへども。僅か五年にして。時政奸計を以て殺害し。二男實朝を副としける。時に時政が後妻牧方腹に出生しける娘が聳。平賀右衛門佐を武將にせん

と謀反を企て。既に實朝を殺さんと計り。忽ち露顯してせん方なく落髮して。牧の方と共に豆州北條へ行て塾居せり。凡賴朝薨じて時政天下の權を奪ひ。恣に振舞ひ。慈愛深かるべき孫賴家を殺し。其以前御臺若君并外戚比企判官能員を殺し。其上牧の方が讒を信じて。時政前妻の腹に出生したる娘の聳。畠山重忠父子を殺たる。獸心の所行を始めとして。大惡十四ヶ條太平記の評に見へたり。其外佞奸邪曲の振舞計るへからず。誠に前代未聞の逆臣たり。始め賴朝を聳にして。賴朝といふ良犬に。平家の狡兔を獵し盡させて。終に時政天下の權を奪ひ取へき奸謀を深く胸中に秘し。口に甜言を吐き。腹に劔を研きけるは。牡丹花下の睡猫の。意舞蝶に有と聯ねし詩の風情。いと怖ろし。

(卅一) 泰時

泰時は北條遠江守時政か嫡孫にして。北條右京太夫江馬小四郎義時の長男なり。武藏守と號す。時政塾居して義時執權たり。元來父時政に似て。兩面二舌の佞臣にして。不善の行ひ多き中にも。賴家の子鶴ヶ岡の別當公曉を謀て。實朝を殺させ。又公曉をば即時に殺して。其上賴朝の弟阿野法橋全盛の子。阿野冠者時元をも誅戮せり。時元の母は時政か女之。然れば義時には子に同じき甥を亡し。賴朝父子三代にして。源氏の根を斷ち葉をからしけるは。禽獸の所行なり。



實朝横死の後は。既に頼朝の後室政子法名二位の禪尼如實。籠中に政事を聽けり。是に因て世俗尼將軍と號す。義時益武威を振ひて。天下の事大小となく恣に計ひけり。是に依て後鳥羽院御在位の時より。北條が天下の權を取りて恣の振舞。王位の衰ふるをも憚らず。よつて主上逆鱗まし。鎌倉をあとし給はんと思召立れ。北面の士の外に西面の士を置。勇士を召集給ひしに。其頃信州の住人仁科次郎盛遠父子。宿願ありて紀州の熊野へ詣ける折から。後鳥羽院も御參籠有て。盛遠父子を獻覽有て。西面の士に成れしを義時傳へ聞。關東恩顧の者として。許されもなく院中に仕ふる事心得すと。大に忿て仁科か所領を悉く沒收せり。盛遠迷惑して甚た歎しかば。院より義時方へ院宣を以て。返し與へきよし仰下さるといへども。義時曾て承諾せず。是偏に己か理屈を立て。君を蔑にする違勅の罪人なり。其上攝州長江倉橋等一ヶ庄を召仕はるゝ龜菊といふ白拍子に給はりけるを。彼庄の地頭是を渡さず。院又義時方へ院宣を以て。相渡すへき由を。兩度迄仰下されける所に。義時申けるは。諸國庄園地頭の事。上代はなかりしを。後白河法皇頼朝平家追討の軍賞に。日本總追捕使。成れし時。諸軍勢其功によりて得たる懇命の地を。さして科なきに。今義時が計ひとして。開退けとは得こそ申まし迎。更に聞入ざりければ。院益逆鱗有て。終に北條退治の御金に及び。承久の亂と成れり。尤院妓女に所領を給はるは。甚だ僻事にして。義時が申所理ありといへ共。これたゞ己が爲に諸士を謀る

奸曲にして。益君を蔑にしたる再三違勅の逆臣なり。普天の下何れ王土にあらずと云事なし。縱令頼朝軍功の賞に與られし。所領なりとも。夫は私之。勅命あらば先渡すべき事勿論之。義時が暴惡は論ずるに足らずといへども。泰時世に賢人と稱せり。何ぞ父を諫て主命に隨はしめざるや。若故なく長江倉橋の地頭を立たしむるに忍ずんば。先達て和田畠山が所領。其外仁田梶原等の功臣を盡して。其領地關所の地と號して。義時父子是を領す。然らば其領地の内を配分して龜菊に與へて。院の慮を宥奉り。父の逆意を鎮めなば。忠孝全き賢人たるべきに。爰に至て賢人の振舞を知らず。剩父義時が逆意に隨ひ。院の討手として上洛し。大軍を以て官軍を亡し。其上一院後鳥羽院を隱岐國へ流し。土御門院を土佐國へ移し。新院順徳院を佐渡國へ配し。一院の御子雅成親王を但馬國へ流し。頼仁親王を備前國へ流し。その外公卿數多或は誅し或は流し。當今順徳院の御子懷成親王の御位を下し。高倉院の御孫守貞親王の御子。茂仁親王を即位せしめし。是義時が計らひ。斯る惡逆無道の振舞は。上古末代其例を聞ず。其むかし平相國清盛惡逆といへども後白河法皇を鳥羽の離宮へ押籠奉るのみにて。遠島にはうつさず。元より後鳥羽院を始奉り。何れも榮紂が如きの惡逆にもあらず。何ぞ武臣として斯る惡逆の振舞せしぞや。然るに此節生捕多き中に。清水寺の住侶曉月法師。官軍に屬して宇治の手へむかひ生捕れて。既に誅せらるべき所に



勅なれば身

を武士のやそ宇治川の瀬にたゝねど

斯詠じければ泰時大きに感じ。死罪を宥めて遠島に流しけり。然れば歌にて罪を遁るべくば。歌人は何程も詠ずべし。殊に彼は僧の身として戰場に趣きしは。破戒の悪僧也。何ぞ速に誅せざらんや。是偏に泰時世俗の耳を感じせしめ。慈仁の名を賣手段と見へたり。實に泰時和歌を感じて惻隱の心有は何ぞ後鳥羽院の御歌に感ぜざるや。配所へ趣き給ふ折から。雲州大濱港に着御し給ひ。供奉の勇士に暇給はり。大略歸路の折から。御歌を國母七條院并女院修明門院へ贈らせ給ふ。

たらち女の消やらてまつ露の身を風よりさきにいかでとはまし

知るらめやうきめを三穂の浦千鳥島くしぼる袖のけしきを

誠にいと哀なる御歌なり。いきとし生るもの。親子夫婦の間程わりなきものはあらじ。况や一天の君として。御母御後に別れ給ひ。萬里の波濤にさすらひ給ふ。御心の内思ひやられて。恐れながら御いたましく。感涙を止め難し。泰時御歌に感ぜざるは。誠に鬼畜木石也。又後鳥羽院配所より郭公の御歌に

なけば聞くきけば都の戀しさに此里出よやまほとゝきす

斯御製ありしよ。此所には郭公鳴さるよし。又勝田の池の邊に御遊の折から。松風吹て蛙の

聲かしましければ。

蛙なく勝田の池の夕たゝみきくましもものは松風の音

斯詠しさせ給ひけるより。此所蛙の聲も發せずと云り。情なき鳥虫すら。天子の御歌に感じて聲を發せず。泰時御歌に感ぜざるは。鳥虫にたにも劣れり。是をもつて曉月が歌に感じて。命を助しといふは。慈仁の意を賣る佞諂たる事明らかなり。實朝横死の後。義時が計にて。左大臣道家の三男賴經を鎌倉へ請じ。將軍と仰ぎけるが。賴經少二歳なれば。政子石代として政事を聽と云へども。天下の大小の事共。皆義時が心の儘に計りけり。是よりして北條代々。儲王攝家の幼主を以て將軍とし。成長に及では。事を左右に寄て是を廢し。又幼弱成を代として。北條一人威を恣にせり。かくて義時積惡の餘殃終に身に報ひ。近臣深見三郎といふ者に刺殺されたりとかや。泰時は父に似ず。其性無欲にて専ら善政を行しかば。世人賢人と稱す。去ば義時横死して。家督を配分しけるに。舍弟朝時重時以下に。多く所領を與へて。泰時は僅に末子の分限ほど領せり。其後寛元元年天下飢饉の時。諸人借書を調へ判形を書き。富有のものに米を借るに。泰時法を出しけるは。來年世上豊年ならば。本物計を借し主に返納すべし。利分は我添て返すべしと定め。面々の借状を取置て。所領有人には約束の如く本物を返させ。我方より利分を添て遣し。貧者又病人には皆免して。我所領の米にて借し主へ返しけるとかや。是を



以て世俗は泰時を賢人と稱しけるとかや。然共過讚なるべし。兄弟家督配分するに。惣領少し取り舍弟に多く與ふるは。民間にまゝあり。是を成すに何ぞ難からんや。又飢饉の時。富家の米穀を貧者に借させ。泰時利分を出し。或は本物どもに我方より返し遣したる事も。凶年に飢民を救ふは。國主領主の常なり。若し泰時己が所爲の善事を。將軍家の仁徳より出たりと披露して。諸人に君恩を添ふさせは。誠に賢人成べきか。將軍家を慕にして。己が慈仁の名を顯して諸人の心を取り。その恩に感ひさせて我に歸伏させ。益威を強し家を榮へさすべき爲に。小利を捨て大利を得る方便にして。君の爲に成す善事にあらず。豈泰時賢人ならんや。佞人と云べし。又或時泰時が弟朝時が館に。惡黨押入て騷動しけるよし。泰時聞くとひとしく評定の座より。直に彼所に走向ひし所に。朝時は他行して。留守居の士惡黨を擲捕て。無事に鎮りければ。泰時路次より歸りたる時に。盛綱諫て曰く。重職を帶し給ふ身。たどひ敵國たりとも。まづ使を以て其左右を聞き計り給ふべき事か。盛綱を遣され。防禦の方便致すべきに。信偽を問はず向ひ給ふは甚だ不可之。以來如斯の事有らるるは。殆ど亂世の基なるべし。又世の誹を招べしと申ければ。泰時答て曰く。申處然るべし。但し人の世に有は親類を思ふが故之。眼前に兄弟を殺害せられん事。豈人の誹を招に非ずや。其時には定て重職詮なからん。武道には争か人品に寄らんや。唯今朝時敵に圍れん事を聞。他人は小事に處するが。兄の思所は建曆

承久の大敵に違ふべからずと云ければ。是を聞者皆感涙を流し。盛綱が諫言泰時が陳謝。其理何れの方にかあらんやのよし。是を決せずと云へり。是又我僭見を以て論せば。盛綱が諫言理ならんか。泰時が執政の重き身として兄弟の小事にあわたいしく。評定所を明て。卒爾に馳行しは輕忽なり。泰時斯て非常の事あらん時は。柳營を守護し。諸士の騷動を鎮めて。下知を致すべき身なり。何ぞや弟の小事に公の事を忘るゝは不忠なり。盛綱に諫られて。人の世に有は親類を思ふ故之と云しは。私を重んじ君の事を思はざる不忠の志し。既に詞に顯れたり。是を以て泰時が日頃の善行は。皆私の爲にして。聊も君に忠なき表裏の佞人と知るべし。然るに古今著聞集に云く。誰と聞侍しやらん名を忘れられど。一人八幡に参りて通夜しけるに。夢中御殿の御戸帳を押ひらかせ給ひて。誠にけだかき御聲にて。武内と召れしかば。畏て参り給ふ御躰を見れば。高年の白髮の俗形にましく。御装束は分明ならず。御前に畏て侍り給ひしに。御髮長く白くして。御丈長と同じかりけり。又御殿の内よりも前の御聲にて。世の中亂なんとす。暫く時政が子と成て。世を治べしと仰出されければ。唯と稱して御座ぞと思枕に。夢は覺にけり。此事を思ふに。義時は彼の化身にや。其子泰時迄も凡人にあらずといへり。是一笑するに堪たり。元來八幡太神は應仁天皇におほしませ。御子孫の皇祚をこそ守らせ給ふべけれ。何ぞ武内大臣をして。御子孫の天子を惱まし奉る。逆は義時に再生なさしめんや。論ずるに足



らず。妄言を吐しは。北條に媚諂ふ奸愚の族の所行と見へたり。然るに著聞の作者是を記して。後世を迷し偽を傳ふるはいかにぞや。又泰時が歌に

世の中に麻は跡なく成にけりこゝろのまゝの蓬のみして

是荀子勸學の篇。蓬麻中に生れば扶けずして直しと云る詞に。同く詠したる歌なり。泰時が心を麻として。世人を蓬と見しはいどおかし。誠に巧言徳を亂すの聖言の如成べし。

(卅二) 時頼

時頼は泰時が二男。北條修理亮時代の二男にして。相摸守に任じて。頼嗣宗尊二代の將軍の執權たり。母松下禪尼は賢女の譽あり。時頼若かりし時。禪尼の許へ行るゝ事有しに。禪尼は煤たりし明り障子の。破れたる所計を自ら切張し。即時頼に儉約を示されし事。北條時頼記徒然草等に見へたり。去ば母の賢徳を受繼。専ら儉約を元とし奢を禁じ。善道を行ひければ。世舉て賢人へと稱せり。建久八年十一月廿三日。最明寺におゐて落飾して。法名覺了坊道崇と號す。戒師は宋朝の道隆禪師。時に三十歳。此時剃髮の者多し。是時頼に無二の志を顯す成べし。時頼の子幼稚ゆへ。北條武藏守長時名代として。執權の事を勤め。北條左馬頭政村連判す。然りとすいへども。皆時頼が旨を請ずといふ事なし。斯て弘長三年十一月廿二日未の刻。時頼最

寺の北亭において卒す。時に三十七歳。此時にも哀傷止がたく。髪を切除しも多し。依之國々の口々へも出家制止の觸あり。時頼執權十一年。落髪の後七年。都る十八年。政道正しく天下無爲なり。誠に世に類なき賢佐。然しながら徒然草にいへるは。時頼宵の間に大佛宣時を招けるに。武藏守參りぬ。時頼手自銚子杯を持出て。此酒を獨り飲んも残念なれば招たり。肴こそなき。他人は靜に寐たらん。さりぬべき物や有尋給へと有ければ。宣時紙燭を燈したづねけるに。臺所の棚に小器に。味噌少し有しを見出し。是ぞ尋得たると申ければ。事足なんと。心よく數献に及び興じけるとかや。質素儉約を専ら行ふとはいへども。天下の執權たる者には。過不及の振舞なかるべし。此とき時頼致仕の身といへども。政務に口入し。將軍家も最明寺の亭へ度々渡御有りし事。東鑑に見ゆれば。さばかりかすか成住居とも見へず。元より夫々の役を勤る家人もあまた有べし。然らば時頼自ら銚子土器携へずとも。近臣に命ずべきことにや。殊に宣時を呼に遣したる下部あり。何ぞ夫に命じて肴を求めさせざるや。宵の間に有れば下々の熟睡すべき時分にもあらず。平日は兎もあれ。今宵は主人の方へ客來あれば各起て用事を承るべき事。皆々寐て構はざるは主人を蔑にせし不届もの。夫を時頼返て彼等を痛はり呼起さるは。慈仁と云はんか婦人の仁と云んか。當時武家は勿論町家にて。人を召仕程の者は。夫々主従の禮は亂さず。時頼の家風の如き不作法なる振舞は有まじ。且又其節。時頼隱居



といへども。政事に拘る重き身之。夜陰の折とて客と差向に有んば。安に居て危々忘るゝとや云ん。宣時無二の心友たりども。義時が近臣の爲に横死しける事。近くは北條光明。三浦光村が如きの變往々あり。慎べき事ならずや。諸人に儉約を示す爲にもあれ天下の執權北條時頼。斯る振舞はいかにぞや。其上諸國を廻り。隠れたる惡を尋ね埋たる善を糺し。理世安民の政を行んど。廻國修行を思ひ立。二階堂信濃前司壹人連れて。三年の間諸國を廻ると云へり。去とも此事東鑑には見へず。然るに北條時頼記。太平記等に記して。婦人兒童の能知りて世の美談とす。勿論正説成べし。誠にさばかり政事に心を委しは。類希成賢臣之。然しながら大學に。君子は家を出ずして。教を國になすと有れば。時頼賢徳わらば。自然と其徳四海に及ぶべし。何ぞ執權の重職を思ひながら。遠山波濤を只二人歩行しは危し是も又過不及の振舞なるべし

(卅二) 藤綱

藤綱は上總の國青砥の郷主。大塙十郎近郷が末孫。青砥左衛門藤満が末子にして。妾腹の子なれば。父の寵愛も兄に劣りしかば出家にせんと。十一歳の時眞言宗の寺に遣し。弟子と成りしが如何なる旨にやありけん二十歳の年還俗して。青砥孫三郎藤綱と號す。行印法印と云けるを師とし。學問しけり。斯て藤綱二十八歳の時。北條相摸守時頼。豆州三島明神へ參詣せし折か

ら。彼藤綱片瀬川にて牛の水中に尿しけるを見て。哀れちのれ守殿の御法事の風情したる牛かなど笑けるを。時頼の士是を聞て。いかにさは申さるゝやと尋れば。青砥答へていはく。比日數日雨降らず。田畑枯て百姓のかなしむ折からなれば。あの田畑の邊にて尿をせば。少し成とも潤ふべきに。水の餘りて流るゝ川中にて。尿せしは無益なり。去れば先日守殿の御法事に。鎌倉中の智徳備りたる名僧。身貧にして飢寒に苦しむ輩數多有しに彼等には供養し給はず。無智無徳にして。金銀米錢に飽滿たる。破戒の坊主共に供養有しは。眞實の佛事に非ず。川中に尿せし牛に同じからずやと申ければ。各感じて時頼に達しければ。申所道理之。奥床しき男なりとて。頼て召出して。評定所の引付の列とし。青砥左衛門と申ける。或時藤綱夜中に出仕しけるに。火打袋に入たる錢十文を滑川へ取落し。大きに周章て。其邊の土民を雇ひ。五十文の錢を出し。松明十把求て是を燈して。終に十文の錢を尋得たり。後日には是を聞く人。十文の錢を尋んとて。又五十文の錢にて松明を買しは。小利大損と笑ければ。藤綱聞て夫ぞ愚なり。世の費を知らず民を惠むの心なき人々之。墜所の錢十文は。只今尋ずば。滑川の底にて朽ものど成べし。某が松明を買せし五十文の錢は。永く民の家に留りて失ふ事なし。我が損は民の利之。彼と我と何ぞ差別が有んや。彼此六十文の錢を一をも失はず。豈是天下の利ならずやと云ければ。始笑し面々舌を屈て感じけるとかや。又或時時頼鶴ヶ岡八幡に通夜したる曉の夢に。衣



冠正しき老翁枕に立て。政道を直くして世を久敷保んと思はれ。心私なく理に闇からざる青砥左衛門を賞翫すべしと。示さるゝと見て夢覺たり。時頼則近國の大庄園八ヶ所。自筆に補任を書て青砥に與ふ。藤綱見て大に驚き。今何事もなくして萬貫に及ぶ大庄園を。給はりけるやと問ければ。夢想によつて宛行由を答へしかば。青砥聞て。然らば一所をも得こそ給るべからず。且は御意の所歎入候。若し某が首を刎よと云夢を御覽候はれ。答なくも夢の如く行はれんや。今報國の忠薄ふして。生涯の賞を蒙らん事。是に過たる國賊や候まじとて。則補任を返しける。又或時徳宗領に沙汰出來て。地下の公文と相摸守と訴陳に番ふ事あり。理非辨論して公文が申處道理なりければ。奉行頭人等徳宗領に憚りて。公文を負しけるを。青砥一人權門にも恐れず。理の當所を委細に申立。終に相摸守を負しけり。公文不慮に利を得て安堵しければ。其恩を報ぜんと思ひけん。錢三百貫文を俵に納て。後の山より潜に青砥の邸の内へぞ入にけり。青砥走て是を見て大にいかり。沙汰の理非を申付るは。相摸守殿を思ひ奉る故也。全く地下の公文を引にあらす。若し引出物を取るべくは。上の悪名を申留ければ。相摸守殿よりこそ悦びはし給ふべき也。沙汰に勝たる公文が。引出物をすべき様なしとて。一錢も用ひず。悉く持返させて遣しける。自餘の奉行頭人も此事を聞。おのれを耻ける故に。聊も理に背たる事なし。既に時頼記太平記等に見へたり。誠に古今稀成廉士也。去とも東鑑には。青砥左衛門が事會て見へず。

左ばかり善政を行し名臣。實錄に洩るゝこそ怨なれ然しながら青砥が。十文永く滑川に朽ん事を歎しは。程子の賢慮に同じき振舞と云へども。日本六十餘州にて。日々六道錢どかて土中に朽。或は國々の靈窟に參詣の者。賽錢に投捨る錢幾ばく成らん。青砥是を制禁せざるは。彼大佛を鑄崩して世を賑したる松平伊豆守信綱の大智より見ては。滑川の十文は鎖細の沙汰にして。唯世俗の耳目を感せしめ。一己の譽を得るのみにて。天下の爲には大功ならず。然ば青砥。信綱の賢才には及ぶべからず。去れども大庄八ヶ所給りても請ず。三百貫の賄賂を返したる潔白の振舞は。上古末代比類なき善成べし。か様の善行東鑑に記さるは。青砥が不祥と云ふべし惜哉

(卅四) 藤房

藤房は萬里小路大納言宣房の長男にして。後醍醐天皇の寵臣なり。性忠純にして志節あり。博學強記にして。正四位中納言に進む。元弘に主上東夷の難を避て。山州笠置の城に籠らせ給ふ。藤房及び舍弟季房等隨ひ奉りしが。終に逆臣の爲に落城して。主上は隱州へ流され給ひ。藤房は常州へ配せらる。正慶に朝敵高時亡びて。建武に主上復位し給ひ。藤房も歸洛せり。四海の逆浪忽鎮りて。公家一統の世に返りて。京都靜謐に成りしかば。いつしか主上華奢逸遊に耽



り給ひ。先づ大内裏造營有べしとて。諸國の地頭へ二十分一の功課を懸られ。或は鳳闕の西二條高倉に。馬場殿とて離宮を建られ。常に御幸ありて。歌舞蹴鞠の間には。弓馬の達者を召れて。競馬笠懸を敵覽有て興し給ひ。政事向は准后の口入にて。賞罰正しからず。斯て元亨以來戦功有輩へ。忠賞を行はるべしとて。洞院左衛門督實世を上卿に定められけるに。忠有は功を頼みて諂ず。又忠なきは。媚を以て。上聞を掠めければ事正統に非ずとて。頓て召返されて上卿を改て。藤房にぞ命ぜられければ。忠否を糺し。淺深を分て。廉直に沙汰せんとしけれ共。准后に便りて。内奏秘計によつて。只今まで朝敵たりし者共。安堵を給はりて。忠なきも數ヶ所の所領を給はりければ。藤房諫かね。病と稱して奉行を辭けり。其頃雲州の住人鹽谷判官高貞が方より。希代の駿馬を進奏す。主上則敵覽有りて。我朝には天馬の出たる例を聞ず。朕が代に當りて。求ざるに此良馬出來る。吉凶いかにと御尋有しに。洞院相國公賢申けるは。是吉事にあらず。房屋の精馬と化して。天の心を蕩すと申せば。吉事に非ずと奏聞す。此時主上逆鱗の御氣色付て。御遊も止りける。其後猶直言數度に及ぶといへども。曾て聞届給はず。藤房諫むべからざる事を知て身退き。洛外北山の石倉に趣き薙髮せり。此處も猶都近しとて。一首をのこして行方えれず

住捨る山も浮世の人訪は、あらしや庭の松もこたへん

其後藤房の在所を知る人なかりし所に曆應の頃。新田義貞の臣畑六郎左衛門時能。越前國鷹巢山にて。藤房に似たる桑門を見て歸り來り。斯と語りければ。一條少將行尹時能を伴ひ。彼所へ行て見るにいつしか跡を隠して。石上に和歌を殘せり

こゝもまた浮世の人の訪くれば空行雲に宿もどめてん

少將是を見て。疑ひもなく藤房の手跡と。落涙しけるとかや。其後藤房は和州芳野を通り。便りを求て洞院實世に書を寄する中に

君か住む宿のあたりを來て見ればむかしに濡す墨染のそて

實世是を見て。是藤房の筆之迹。敵聞に達しければ。勅して近國を尋求むるといへども。知れずとかや。世に貧賤にして老衰し。餘命なく。或は病身にして。出世の頼みなき身だに。捨がたき浮世なるに。况官祿等倫に過ぎ。才徳人に超。齡もいまだ不逮盈人の。父母妻子を捨たる事惜べし。是を以て古今桑門の有様を見るに。或は恩遇の君に別れて。二君に仕へしと世を遁るゝは。良岑の宗貞顯基の中納言吉田兼好か類之。色欲に迷ひ。一念發起して遁るゝは。遠藤武者盛遠齋藤瀧口北條時頼か類是之。或は最愛の女に別て世を通るゝは。花山法皇大江定基か類是之。或は男に別れて世を通るゝは。大磯の虎千代熊野勾當内侍。或は男に捨られ世を遁れしは。室の遊女宮城祇王祇女横笛か類之。或は父母に別れて世を通るゝは。平三郎貞近白拍子



微妙の類是之。或は名利を厭ひ世を遁るゝは。開城皇子藤房高光(暎)後長門新文佐藤意清か類是之。或は世に捨られて世を遁るゝは。惟喬親王建禮門院平判官康頼か類是之。或は耻を見て世を遁るゝは。信濃前司行長若狭少將勝俊か類是之。殊勝なる振舞と云んか。然しながら無住禪師の歌に

遁世の遁も時代に書替んむかしは遁る今は貪る

實に宜哉。遁世者の遍照か元慶寺の坐主と成。僧正に補せられ。輦をゆるされ。又文覺が神護寺の住職と成。上人と唱へられし類は。實にや世を貪る盗人僧成べし。花山法皇の四の君に通ひ給ひ。兼好か成忠か女と密契せしは。淫を貪る成べし。其外にも遁世の名のみにて。和歌に迷ひ藝に迷ひ遊び。世上に浮游して専ら名に走り奢る輩。枚擧すべからず。藤房のごとく遁れ。再び世を顧す。山林に隠れて生涯を終りたるは希之。扶桑隱逸傳に。藤房進るは則君に忠あり退いては佛に忠有と云るも宜哉と。しきりに感歎しければ。見石翁からくど笑。先生また藤房を最負し給ふや。藤房忠臣といへども。君を諫て善道に歸らしめずして。終に身退しは。本分に叶へるのみにして。眞忠の振舞に非ず。往昔甲府宰相綱重卿の近臣根津宇右衛門。君を諫て手討に成といへども。猶も忠臣の英魂死しても滅せず。其夜より平日の如く小袖上下を着し。御前近く顯れ。諫言數日に及ければ。さしも猛勇の綱重卿も。其忠烈を感じ給ひ。善道に

歸したるまひ。根津が靈魂を神と崇め給ふ。則根津權現是之。且宇右衛門諫言して。君を善道にせしめしは。誠に古今無双の忠臣之。藤房何ぞ死を以て深く諫め。君を善道に歸せしめざるや。傾を見ながら扶はせて身を遁れしは。一己を安ずるのみにて眞忠にあらず。隱逸傳に藤房進ては則君に忠有といへるは許すべし。退ては佛に忠有と云へるは。藤房にあつては本意にあらず。元より神國に生れて。神の御末の朝廷に仕へて。黄門侍郎の位に居る身を釋門に入。先祖數代の血脉を絶し。釋迦の氏族となりしは。不孝の甚しきに非ずや。あゝ惜哉。藤房さばかり賢才有て。忠孝を無にして。何の益か有や。され共能名利を避て隠れしは。今の世の盗人坊主とは甚しき分ちあり。今の僧は女を犯すを第一とし。世を貪るは俗よりつよし。彼等から見れば。一向善く遁る成るべし

(卅五) 義貞

義貞は清和天皇の正統にして。新田六郎太夫朝氏の子。氏光の嫡男之。幼年小太郎と號す。元弘の亂に官軍に屬して。大塔の宮の令旨を給り。朝敵追討の旗を上て。大に武威を振ひ。北條高時を始め。一族郎等悉く塵にしける其有様。雪に湯するが如く。火に水を投ずるが如く。兼て楠正成と示し合せ。日本六十餘州の兵を集めて。武藏相摸の兩州に對すと云共。勝事を得難



しと云し鎌倉の強敵を。僅か二十日の間に攻亡し。忽ち天下泰平に歸せしめ。後醍醐天皇伯耆國船上より還幸あり。再び帝位に即給ふ。是を以て鑑に。むかし伊豫守頼義の嫡子八幡太郎義家。奥州の貞任宗任を征伐有しも。九年を経て亡し。武衡家衡を討しも。三年を経て平らげ。蒲冠者範頼判官義經平家追討も。二年を経て功を遂げたり。元より東夷は。少か奥州羽州兩所に威を振ふ逆賊なり。平家は西海の浪に漂ふ落人。去れ共容易に亡ずして數年を経たり。況んや高時は時政が代より。數年天下の權を執て。武威を振ひ四海を呑て。一族郎等皆關八州に轟く。然も各弓馬劍術に達したる勇士。義貞は僅に上州世良田の領主にて。一族郎等皆々小身にして。其勢僅か百五十騎に過ず。是を以て鎌倉の大敵を挫かんと思ひ立しは。古今無双の勇將なり。尤さつそく越後國の一族。二千餘人にて馳來り。續て甲斐信濃の源氏。其外近國の武士馳加りて多勢と成。是に依て義貞は龍の水を得たる如く。大に武威を振て。不日に鎌倉を焦土と成しぬ。是を以て見れば。頼義父子の東夷を平らげ。義經兄弟の平家を亡したる功は。物の數ならず。然ば義貞は先祖に勝れし名將。忠臣英雄と云つべし。然るに後醍醐天皇。諸將に忠賞を行れけるに。足利尊氏六波羅を亡せしを。第一の功として。武藏下總常陸三ヶ國を給り。同舍弟直義に遠州を給る。是兼て尊氏。帝御寵愛の准后に賄賂を贈り。内奏して恩賞を貪しとかや。次に義貞は鎌倉を亡したるを。第二の功として。上野播磨兩州を給り。舍弟義助に

は駿河國を給はる。勿論軍功の賞其功に當らざれば。義貞の老臣共甚だ憤り罵りけるは。尊氏か僅かに籠の如く成る。六波羅の探題を討しと當家の小勢を以て。鎌倉の強敵を亡したるも。同様に忠賞有らんさへ。口惜かるべきに。尊氏を以て第一の功とし給ふは何事ぞやと。口々に申けるを。義貞聞て。元來我に不義なし。他家の不義は云に及ばず。後代取沙汰有べしと。更に愁の氣色なし。帝此由を聞召れ。義貞に一理有とて。子息義顯を召して。越後國を給はり則越後守に任じ給ふとかや。然ば義貞功にはこらず功を施し。事を積て其賞を求ずと。本文の心に叶ひたる。至忠の武臣。されば官軍に屬せしより已來。始終忠義の志うとかや。尊氏朝敵と成て。逆威を振ふに及で。義貞節刀を給はり。官軍の總大將として。數萬の軍兵を引卒して。専ら忠戰を勵といへども。後醍醐天皇不徳に因て。天下の武士朝家を怨で。尊氏が逆意に與して。凶徒益強大にして。官軍は日々に減じ。剩帝は尊氏の詭謀に欺れしかば。義貞數戰の功忽ちひなしく成て。遂に帝都を發して北越に落行しが。猶も忠義金鐵の如く。朝敵退治の謀に心を委ね。尊氏が黨類と數々戰て。武勇を振ふといへども。天運時至らずして。延元二年七月越前國黒丸の戰に。流矢の爲に落命せらる。時に生年三十七歳。嗚呼命なる哉。さしも頼し宮方の柱石碎て。官軍闇夜に燈の消たる心ちして。涕泣せざるものなし。惜哉義貞蓋世の智謀有といへども。其行一失の瑕玼。末代の誹を遁れず。去ば建武の始に。義貞大内守護の折か



ら。勾當の内侍を垣間見しより。戀慕深くして已事を得ず。媒を求て一首の歌を贈る

我袖の涙にやとる影たにもまらて雲井に月や住らん

内侍此歌を見て。いと哀なる氣色に見ながら。敵聞を憚りて手にだにふれざりけるに。如何して聞し召れけん。御遊のありからに。義貞を召れて天盃を給り。勾當内侍を此盃に付て。勅定ありしかば。義貞日頃の志を遂て。限りなく悦しが。頓て迎取て寵愛淺からず。是よりして軍慮に怠り。尊氏に勝べき軍の圖を外せし事。數度に及しも。内侍に暫の別れを惜みける故とかや。是偏に帝敵慮淺して。大將に美女を給り。傾城傾國の禍を招せ給ふ社うたてけれ。然しなから義貞。好色なれども其惡き事を知らば。何ぞ色欲に身を果さんや。志からは義貞を亡せしは。尊氏に非して勾當の内侍なるべし。古語に。美女は命を斷つ斧なりといひけんも宜なる哉。恐るべし慎べし

(卅六) 尊氏

尊氏は清和源氏の嫡流。足利讚岐守貞氏の次男にして。尊氏の功は清盛頼朝より軽くして。罪は又相均と云り。其罪悉く士武太平記に記せし事顯然たり。因て是を略す。大塔宮を弑し奉る一事を以て。其惡を知るべし。元來尊氏は。性柔弱にして智勇なし。舍弟直義が邪智姦計を以

て。准后を迷し帝を欺く。功を以て重賞を貪り。朝廷の衰運に乗して己が逆意を企。自然に膝下へ轉ひ掛りたる天下を取て。然も家名十三代相續て。忠臣義貞正成は。却て逆臣尊氏が爲に亡びたるは。兩將の至忠天の照覽に洩たるが如し。神明何ぞ冥助あらずや。若神明の明鑑に洩なば。佛何ぞ利益あらざるや若佛の兩眼に洩なば。何ぞ閻羅王尊氏を擱んで無間地獄へ投入ざるやと咄る時。兎毛先生莞爾として云く。顔回不幸短命にして。盜跖富て長壽なり。侍と世間を觀るに。世に善人と云へる人の。生涯貧にして窮し。飢寒に苦しみ。或は不圖災來り。不慮の辱を見。或は子を先立。或は親族に別れ。然も短命にして。剩へ難病を受け。風雷雨電して。世俗に業人と誹らるる者あり。義貞正成は此類ならんか。又世に惡人と呼ばれて。一生富貴にして歡樂に誇り。惡をなせ共災に逢ず。又酒色に耽れども。無病にして年を終り。然も臨終正しく。葬送の時に後生人と褒らるるあり。尊氏此類か。されば尊氏は暴惡を以て。一旦天に勝といへども。積惡の餘殃子孫に及て。武將の名のみにして武威を臣下に奪れ。或は弑せられ又は追れて邊土にさまよひ。天下一日も穩かならず。終に天誅此に至て亡びたり。義貞正成不幸本意を遂すといへども。積善の餘慶子孫に及んで。今正成の血脉列國の諸侯たり。元より義貞の英名連綿として。四海を照らし。萬代不易の御代と共に。盡る期あるへからず。是豈天私あらんや。尊氏が功を遂しは。柔よく剛を制するの謂ならん



## (卅七) 正成

正成は卅一代敏達天皇五代の後胤。井手の左大臣諸兄公廿四代の孫。橘正達が次男。宅邊に楠樹あり。仍て姓とす。志貴の毘沙門の申子たるに因て。楠多門兵衛と名乗る。後に河内守に任す。姓寛仁にして武徳誠忠凡日本開闢より古今獨歩の元帥たり。其戰功擧て不可計。末世の諸葛孔明と被稱。淡川の石碑に英名を照し千歳不朽。誰是を誹らんや。と不覺感涙を催しければ。油煙公微笑して。先生も楠公最負成や。尤も正成は古今絶倫の良將なりと雖も。聖賢の誹を以て誹學の趣意たり。何ぞ渠を洩さんやと云て申けるは。正成初めて後醍醐帝笠置の皇居へ。日被召し時奏しけるは。天下の草創の功は。武畧と智謀との二ツにて候。若勢を以て戰はし。日本六十餘州の兵を以て。武藏相模の兩國と戰共。勝事を難得と云しか共。義貞小勢を以て。僅廿日の間に鎌倉を攻亡し。然も奇計妙策を用ひたる沙汰も不聞然らば。正成言を失けるに非ずや。又奏しけるは合戰の間にて候へば。一旦の勝負調ひ難しと御覽せられ候へし。正成壹人未だ存命と聞し召れば。聖運を可被開と思召候へと云しは。高慢自贊の詞にして。然も後醍醐帝聖運を開しは。楠が功には非ず。義貞鎌倉を亡し。忽ち天下泰平に歸しける故。帝船上より還幸ありて。再び御位に即せ給ふ。然れば是又正成が言を失ひたるに非ずや。又楠が釣堀藁人形

等の謀。古今の美談なりと雖も。良將の好んで可爲に非ず。小敵をも不侮と云り。况や大敵をや。是敵を愚にする謀事にして。必勝の良策に非ず。殊に藁人形の謀は。唐土にて敵を欺きし謀にて。新に正成が肺肝より出しに非ず。然らば奇とするに不足。又建武に尊氏。筑紫より。大軍を引率して帝都へ攻上る。天皇正成を召て。急ぎ兵庫へ馳向ひ。義貞と力を合せ防戦すべしと。勅定有しに。正成奏しけるは。小勢を以て機に乗て懸る大軍と戰はし。必定味方可討負と奏しける所に。坊門宰相清忠に被拒。忠言を不被用を憤り討死せしは。私の怒りに公を忘れたるに非ずや。元來清忠は軍慮に闇く。管見を以てしたり顔に僻事を留るを知りながら。正成再應の諫奏せざるはいかにぞや。清忠如きの人に掠められ。口を閉しは無勇。剩へ渠に遮られて。怒りに堪へず討死せしは勇なし。少しきに忍びざる時は。大謀を亂ると云り。大將は耻忍難きを避け。命を全ふして終りの勝利を本意とする計事を不辨正成には非ず。帝不徳にして忠諫を用ひ給はず。小人の言に迷ひ給ひ。聖運開き給はざる事は。今始めて見へたる事に非ず。既に藤房諫奏をして退きたり。元來藤房正成義貞は宮方の三傑也。如レ鼎足。朝家の存亡は此三人の身にかゝりて。至て重き身。藤房世を遁れて。鼎足一ツ欠たりといへ共。新田楠の兩足全うして。君安泰成しに。正成討死して。官軍は流れに棹を失ひたる心地して。終に帝吉野に潜幸有。義貞は北越の鬼と成。尊氏は巷に落たる物を拾ひし如く。天下を掌握せり。楠存命な



らば。豈尊氏に天下を奪はれんや。いと口惜し。凡討死は敗軍の味方を助けん爲に。或は君の命に替らんが爲に。一人踏止り討死するは古今勇士の本意とせり。されば佐藤繼信同忠信が義經の爲に忠死し。上山六郎左衛門師直が爲に討死せし類は。一死を以て大功を立たる忠臣義士也。正成が討死は。清忠を恨み君を見限り。可死時と覺悟して。常に替り血氣の勇を振ひ。敵味方の目を驚かし。花々敷討死を遂たるのみにて。尊氏兄弟の中壹人なり共打取らざれば。君の爲に忠死に非ず。却て味方の弱りと成りたる。不忠の討死と云んか。正成笠置にては。合戦の習にて候へば。一旦の勝敗は必しも御覽せらるべからず。正成壹人存命と聞し召れなば。聖運を開かせらるべしと思召候へど。云しに違ひ。君を捨て一死を輕んじけるは。言を食たるに非ずや。又太平記の評には。正成兼て尊氏か朝敵と可成事を。未然に悟りたりと云へり。然らば正成尊氏と會しひる時。謀略を廻らして討果し。兩葉にして朝敵の根を斷べき事成に。空敷黙止たるは。死を顧みて忠義を忘れたるか。果して大木と成に及んで。斧柯を用ゆるに勞して無功。終に討死せしは誰が爲ぞや。子孫の爲と云不忠不義勿論也。彼稻葉氏が堀田正俊を刺殺せしは。身の爲子孫の爲に非ず。忠義一途にて。戦死よりは猶難き忠死なり。是至忠勇猛の振舞也。依之是を見れば正成稻葉氏に不及。嗚呼忠臣成哉稻葉氏。あゝ惜ひ誤正成。功なく討死して。多年の忠孝一時に失ひけるこそ。遺恨なれと歎息すれば。楮皮子忽然として曰。油煙公の

正成を誹るは。莫邪を鈍とし鈍刀をとしとするが如く正成衆に先んじ官軍に屬し。僅かの城郭に楯籠り。小勢を以て東國の大軍を欺きたる。勢ひに誘はれて。官軍に屬する者廣大也。尤も義貞は朝敵の根を斷といへども源は正成也。既に漢の高祖の三傑。張良蕭何韓信を一つにせし元帥たる事。云に不及。元より君を見限りて。清忠を怨み討死せしと云は。甚だ僻事也。士は可死時に死せざれば。死に勝る耻有と云り。正成討死して。武名益高らざれば。君不徳にして。清忠外を亂し准后内を破り。聖運終に傾ん事歴然たり。正成討死せずんば。義貞の如く君に被捨て。百戦の功忽空敷すべし。正成可死時を知て討死を遂しは智有勇有。元來最期に臨んで。嫡子正行へ遺言に。至忠金鐵の志は日を貫く事。太平記を讀て感涙に咽ばすと云事なし。徳を子孫に残して三代の節義を守る。然らば正成死といへ共不死。湊川の石碑に。武徳精忠赫赫として萬世に朽ず。是を以て離倫絶類の英雄たる事を可知。巧言は徳の賊なり。邪僻の見を以て猥りに譏る事勿れ

(卅八) 僊人

昔し唐土に仙人と云者有て。無限齡を保ち。奇妙成術をなしたるを。書に著はし書に書て翫ぶを見るに。或は鶴に乗て空中を翔り。劍に乗て海を渡り。鯉に乗て瀧に登り或は形ちを吹出し。



又は瓢單ひょうたんに駒こまを出し。石を打て羊ひつろを出し。羅を切て蝶ちやうとし。水を酒とする。其術尤奇まじといへども。藏術ざうに似たり。人は學んで或時は。御咎め有て身を亡す。彼は狐狸こりの妖怪ようかいにして。毛虫けしの仙せんと云んか。されば世に狐きつねを使令しれいして。則術じゆつを行ふ者あり。俗に是を飯綱めしつなと云ふ。座敷ざしきを忽ち海となし。源平西海の軍船の形勢を顯はし。矢叫やさけび関の聲を發す。壺中の天地も奇まじとするに不足。或は既はたしにて猛火を踏刃ふみばを渡るは。上利劍のつるぎに乗て海を渡るも難とせず。或は紙に乗て虚空こくうを翔り。天の川の魚を取て歸るは。黃鶴くわくかく仙人が鶴つるに乗りて空を翔るも微笑すべし。又は形を變じて鼠ねづみとなり。鐵拐てつかい已れが形かたちを吹出すも物の數ならず。况や張果老くわうろうが瓢單ひょうたんより駒こまを出すは。見せ物にするならば。馬の籠かご拔ひきより劣るべし。費文程ひぶんていが鶴つるを舞ますも。鼠ねづみの三番さんぱん更さらより劣り。琴高かたかが鯉こいに乗。吳猛ごまうが車くるまに乗て海を渡るも。女めに乗て子こを拵しらへるよりは次つぎ。張ちやう□が羅を切て蝶ちやうになし。初午しよなが石を打て羊ひつろとなすも豆藏品玉まめざうしなたまに同じ。仙術何ぞ怪しむに足んや。長生又益なし。彭祖ほうそが八百年生る間に。四拾九人の妾五拾四人の子を失ひ愁に逢しは。長命故耻多しと。莊子か云しも宜ならずや。顔回不幸短命と雖も。德行彭祖が下に出不ず。然れば身死して英名不朽を仙と可言か。釋名に老て不死を短と言といへ共。豈老て不死者あらんや。元來生あれば死有。孔子も死生命ありと宣へり。命は天數にして。強て長壽を不可求。されば長生の仙藥を服して。却て紅鉛金石の毒を發し。非業に死する者無に非ず。凡仙法を學ぶ者穀を

不食。木の實草の根を食し。或は霞を喰ひ氣を吞で。生を保つと云は異に足らず。世に五穀を不食。菓くだものを食し水斗りを吞で命を保つ者。往々ありと云り。蛇蛙三冬は土中に蟄居して。氣を食して不死。况や仙人胎息胎食の術。導引どういんの修養。外丹げだん内丹の良藥を服せば。長生もすべし。五雜俎ござぐに。千年の人參じんじんの根は。人の形となり。千歳の狗狂の根は。狗の形をなす。中夜の時出て遊戯す。煮て是を食は必地仙と成。然れ共二物固に逢難しと傳ふ。女道士師弟二人。深山の中に居。其徒出て井畔いんに汲む。道に一の嬰兒ゐいを見る。其師に語る。師抱いだて至らしむ。一ツの木きの根と成。師大に喜んで火に投じ是を薫す。未熟せず。たま／＼糧盡て山より下りて米と化す。師門より出ると水大に漲りて還る事を不得。徒うゆる事甚し。烹る所の氣を聞ば香美かうびと。と終に是を食ふ三日にして食盡しぬ。時に水落て師還る。其徒已に飛昇す。又維揚いようと云所に壹人の老叟有。常に衆の酒食を擾る。一日衆を邀具を治む。丐者貳人持人に盤を以て至る。蒸る小兒と蒸る犬也。衆嘔噓おうさして不食。道士懇ろに請へ共不從。則歎息なんそくして自是を食。既に盡して其餘りを。諸丐者に分ち與へて食はしむ。衆に謂て曰。是千歳の人參狗狂也。求る事甚難し。是を食者白日に天に登る。諸公の延遇を感ず。依て相報。然るに食せず。信成哉まこと仙方の難事と。云終て。群丐化して令童玉女と成て。道士を擁んで上天す。夫此二事。或は是にあへとも知る事あたわらず。又は是を知れ共食ふ事あたわらず。弟子及び丐者。心無を以て是を得たり。豈命に非



ずやと云り。尤人參狗狂は良藥にして。千年を経ぬれば。是を食して生を養ひ壽命を可延事不可疑。此二物を食して弟子登仙し。丐者令童玉女に成て。天に昇るといへる類は怪談也。葛洪が抱外子に曰。仙の要は忠孝和順に信を以本とすべし。君徳を不修して仙法術を務は。長生する事を不得と云り。然れば無徳の丐者。千年の人參狗狂を食したりとも。豈神仙とならんや。博物志に曰。丹水石穴は蝙蝠の大成もの例多し。百歳成物の集る時は倒れ懸る。腦重きか故也。是を取て乾干にして。未にして是を服すれば。神仙ならしむと云へり。是又大なる偽にて信するに不足。書言故事に。塵世の外におこり出るを神仙なりと。昔人云る事有。世に豈仙人あらんや。悉く妖妄耳と云り。然れば山林に遁れて名利を避て。喜怒哀樂の情無く。思按に勞せず。疎食を喰ひ。色情を絶し。思ふ事無。晝は草木を友とし。夜は鶴下に見ぬ世の人を友とし。光陰の移るをも不知。如斯の境涯とならば。自ら長壽可成。され共莊子。上壽百歳中壽八十歳下壽六十歳。病疲死喪憂患を除き。其中口を開きて笑ふは一月の中三四度に不過のみと云へる如し。山庄の樂し共苦し共。色替らぬ松風の音無にしも非ず。商山の四皓も終に塵世に歸り。松葉捧鉢を服し霞を飲氣を呑。飛騰の術を得るといへ共。彼一ツの病難止。久米の仙人も女の脛に忽ち墮落し。四海の龍神を禁淫する術有し一角仙人も。扇陀羅女に被欺通力を失ひ。後漢の費長房も。壺公の仙道を授く一ツの符を得て。是を以て人に祟りをなす百鬼を制服せしか。其

後鬼の爲に其符を盜まれ。却て百鬼に被殺しと云り。是仙は徳を修せざるのみならず。方便も未練の仙ならんいとおかし。特に可一笑は。晋の王質と云樵夫山中に入。仙人の碁を圍むを見て居たるに。未た一局の碁終らざるに。王質が持し斧の柄朽しかば。驚きて家に歸れば。已に七世を過しといへり。盧生が黃梁一睡の夢よりも無墓有様可憐。されは古詩に

人説仙家日月遲 仙家日月轉堪悲 誰將百歳人間事

唯換山中一局碁

誠王質仙境に入て。千年を経て。閑をなすは。長生甲斐可有に只一局の碁を見る内に七世を経たりしは。長生をせしには非ず。壽命を縮るに等し。浦島が蓬萊に入て。七日経るといふ間に七世を送る。剩へ仙女に貰ひし玉手箱を開きて。忽ち老衰して。百年の齡ひを只七日に促して。王質同日の趣にて。いと哀れなる有様也。七世とはいへ共。大略卅年を一世といへば。王質浦島が世は凡貳百拾年成べし。武内大臣の三百貳拾餘歳は。然も身軀健にして。六朝に仕へたるは。生なからの仙と可云。仙法の靈藥を服したる沙汰をも不聞。趙の廉頗は年八十歳に及ひて。米一斗程肉十斤を喰ひければ。天下の諸侯是を恐れて。敢て趙の界を不犯と云へり。然れ共仙藥を服したる無沙汰。元來命の修短身軀の強弱は天性にあり。假令仙道を學んで長壽を保つ共。武内廉頗が如く天下に功無は。王質浦島の如く。馬鹿に名を擧て益なし。三浦大助八



十九歳にて。頼朝の爲に討死し。齋藤別當實盛は七十歳にて。鬢髯を墨にて染戦死しけるは。長命の甲斐あり。彼の小角葛城山にて松葉を食し。密呪みつじゆを持して幻術げんじゆを顯すと雖。正直中道の神國に不相應。終に日本を去り異國に渡る。喜撰法師は宇治山に入りしが。終に雲乘飛去るの類は。佛者の偽之。能因法師が歌にて雨を降。菅公の御歌に梅の飛たるは。誠に天地の勅したる偽り之。總て奇妙は皆偽り之。是を可知。只奇妙〱と云て俗を訛すのみ之。つらく〱思ふに。和漢仙術流行せしと見へたり。今捨られて世一統錢術を學ぶ之。去は仙家の子母錢も。日納貨の仙術に落。壺公が壺中の樓觀も。飴賣のからくりと成。西王母か桃も棒手振の籠に在り。松江の鱸も南樓の鯉も。肴賣の生擔荷に有り。錢術を以てすれば忽ち爰に來る。其外唐物の品日本にあされ共。錢術を以てすれば不至といふ事なし。浦島か契りし蓬萊の仙女も。女肆に有り。魚鶴仙が鶴より早き四ツ手あり。張伯鶴が浮木より早き猪牙舟あり。是皆錢術之。白晝に人の腰に附し巾着を切るは橋の錢術之。賽を投て乞目を出すは博奕打の錢術之。其外四民色々の錢術有。算ふるに無暇。彼王質が類は。途中にて狐にはかされたる心地ならんと。は可笑。

(卅九) 宗論人

自讚じざん他毀たごは佛の十重禁戒の制法と聞しに。いかなれば淨土宗日蓮宗。互ひに念佛題目の勝劣を

論し。俱に誹謗の罪を犯すや。元來佛法の源は釋迦の一統にして。同じ流れの法水を汲なから。水波の論あらんや。古歌に

分登る麓の道は多けれど同じ雲井の月をこそ見れ

雨霰れ雪や氷とへたつれと落れば同じ谷川の水

愚老元來佛法の甚深微妙じんしんびみょうはしらざれ共。此歌の心を推量するに。分登る麓の道は多けれど云は。八宗十宗と分れたれ共。至れる所は彌陀の淨土可成。最此唯心の淨土に赴く近道。甚難所にし。て容易に越る事難し。即ち佛の四十二章經に説玉ふ。殺生偷盜邪淫妄語綺語惡口兩舌貪欲瞋恚ごんごしんい愚痴十惡の難所之。此嶮難切所を能慎み凌ぐと無恙越されば。唯心の淨土に至る事決して不叶。衆生は此嶮難に行惱み。跌て此惡穴に陥る者不少。唐の白樂天行路難の詩に。行路難非水非山。只在人情反覆間と云しも。此難所可成。依之諸宗元祖たるもの。惡道に陥る凡夫を導き。唯心の淨土に至らしめんと思ひしか。道披き取々に教化する中に。法然と日蓮と云馬鹿坊主。末の衆生俗性を能吞込。器に隨て法を説近道からだまし込。彌陀の名を唱へたり。又は法華經の題目を唱ふれば。罪業悉く消滅し。現世にては祈禱となり。病厄を除き壽福無量にして。來世は極樂淨土に生れて。紫摩黄金の佛と成。九品蓮臺に安座し。伽陵頻迦の舞遊を見物して。思ふ事なく泣事無。常に名負極樂世界に往生する事。念佛題目の功力に寄持と。無跡方偽りにて。



婁嫫の耳に入り安く。然も六字七字にして。覺へ安く唱へ安く。馬士船頭鏡ひ組の愚知無智の大へらぼう。姪れ歌の替りに諷ひ。腕に彫物して。自然と念佛の縁となり。托鉢乞食の者と成。皆念佛と題目の徳に浴して世を渡る者。幾百萬ぞや。依去兩宗に歸依の大馬鹿共。草に風を加ふる如く。是以て日本六十餘州。淨土の寺拾四萬廿ヶ寺。日蓮宗の寺八萬三千廿ヶ寺。餘宗は兩宗の十が一にも不及と云り。以て念佛題目廣大無邊のたわけ者あれば有物。斯て一派の宗門開きつ法然は勢至并どやらの再生。日蓮は上行菩薩の化身として。俱に衆生濟度の方便に穢土に生れて。愚痴無智の凡夫を思ふ儘にだまし。無造成念佛題目の弘まりしは。兩坊主の働き。然るに兩宗の僧侶共に。只念佛題目を唱さへすれば佛と成と心得。惡を止善を修する事を外にして。佛の禁戒に背き。互に仇敵の如く誹り。甚だ我慢偏執にして。勢至上行の面穢し。然れば此族も誹謗の罪あれば。墮獄の基ひ可成勿論。念佛の流行ても題目の妨にも不成。題目か繁昌すれ共念佛の害にも不成。如何なれば妬みそねみ確執に及ぶや。愚痴暗昧の凡俗は論するに不足。然るに僧の身としては。甚可耻事に非ずや。最佛法の本意に違ひ。勢至上行の二菩薩の冥慮にも不可有と歎かはし。定て四老の中にも。兩宗の信者も可有。今より自讚他毀の邪念を飄へして。彼我の隔て無。念佛題目雪や氷りと名は異なれ共。解れば同し谷川の水と。此の如く和順して。念佛題目共口に任せて唱へ。勢至上行二菩薩に便り。手を引きて寂光

淨土に往生し給へど。時に油煙公莞爾として曰。誠に先生の宣ふ如く。日蓮淨土の二宗は。犬と猿知恵の族。良もすればいかみ合て。日業の罪を犯し。地獄の種を植るこそ悲しけれ。夫か中にも殊に甚敷は。先年天仰と云る僧。日蓮宗を誹るを以て名を照し。高坐の上に日蓮の木像を置て。小僧と呼はり。飽迄匂り耻しめ。剩へ扇を以て打擲する有様。提婆達多か釋迦を打けるも斯やあらんと。身の毛豎て淺ましく。心有輩は爪弾して憎みけり。元より天仰か談義は。衆生濟度の爲ならず。賽錢備米を貪り。徒らに後家を引入る術とは乍言。三衣を着し高座に上りて。虚にも佛の眞似を大盗人坊主。佛戒を犯し惡言を吐のみならず。凡僧の身を以て菩薩の化身と詐り。尊者の木像を打擲する事。上下尊卑の禮を不辨。放逸無慚の惡僧。諺の佛共法共不辨。職分に不似合はれ者。釋門の徒として菩薩を打擲する事。佛敵とや云ん。佛身より血を出すを五逆の罪の一にして。鬼畜の業外道の所行可成。傳へ聞龍樹并は引正太子に失はれ。伽留陀夷は舍衛商人に被殺。目連尊者は竹枝外道に亡さる。皆是宿罪怨憎の報ひと云り。上行并いかなる宿罪ありて。天仰如き外道の爲に。佛躰を被穢耻を受給ふや。凡夫ならば直に怨を可報に。佛は大慈大悲にして。怒憎噴恚の惡念有事無れば。冥罰を當給はさるは。天仰か幸ひ可成。されども日蓮宗の俗共是を慣りて。天仰か說法の高坐へ礫を打て如雨。天仰か頭に疵を蒙り。辛して逃去といへ共。止事を不得金銀を貪り。於他所說法初めし所。已前にも不懲日蓮の像を匂り打擲なせば。又爰にても日蓮宗の